Disturbed Hearts

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

小説タイトル】

Disturbed Hearts

Z | | - | | | | |

【作者名】

炊飯器

【あらすじ】

平凡だが幸せな日々を送っていた彼の人生は唐突に終わりを告げる。 人残された彼は復讐のために立ち上がることを決意する。 地図から忘れ去られた漁村ボンゴで育った少年、 ロイ= クレイス。

設定・登場人物紹介 (前書き)

小説の進行状況に合わせ、随時更新します。

設定・登場人物紹介

【 人物】

身も共に魔界に封印したといわれている。 ・カオス 数百年前に魔物・妖怪を封印したザイガの英雄。 自

男。 える ウラル= ジエルトン 封印後は解除の時に備えて「ジエルトン」を結成、 かつてカオスと共に魔の封印を行った 精霊術を伝

《ボンゴ》

ガイを尊敬し、 は家事手伝い。 目をしたボンゴの少年。 160cm前後。 ロイ= クレイス いつか力になりたいと日々修練に励んでいる。 魔物に復讐心を持つ。ボンゴ唯一の生存者。 熱 父 Q 祖母との4人暮らし。 · 4 歳。 茶色い髪に白い肌、 父親である 漆色の 身長 特技

と同じく色黒で濃い黒髪。 ガイ= クレイス 村の漁船の船長。 身長180cm超。 村人

《ジエルトン》

でいる。 ಠ್ಠ ギン 美 男。 風 何事も面倒くさがり、 三兄弟の師範でロイの恩人。 『千本刀』 重要な時しか行動しない。 金髪碧眼。 カリュー 中腹の小屋に住ん 黒いローブを愛用してい

・ヘルゲン 風

三兄弟の長男。18歳。

- オルソー風三兄弟の次男。無口。
- ・アンゴラ 風 三兄弟の三男。
- カリース 風 『疾風の妖精』 ギンの師匠。 享年38歳。
- コラヌ 熱 カルコンの師匠。 享年102歳

《ディアボロス》

- ボンゴを襲って魔天転器を発動させた。 ほど。ガイガンと契約を交わし、火球の能力を得た。 の師匠。魔物を憎み、駆逐するために世界を牛耳ろうとしている。 ・カルコン 熱、火球 28歳。無表情で声の渋い男。 色黒で、身長は180cm ロイ
- 見間違いそうな外見。 代々操の術を使う一族「カノ の刺青、全身を覆う長く薄い衣をまとっている。 一見すると少女と レギュラス フルネームはレギュラス = アイティオン = カノトリアス。 操 16歳の少年。長い青い髪、 トリアス」 両腕に文様

(三騎士)

- キリシエ= モレスキュール 25歳の女。 茶色がかった長髪。
- ほど。 リック=ローラン 銃を使う。 独り言体質。 23歳の男。 細身。 身長175 c
- 0 ザバン=ド= cmほど。 ヴォルダン 40歳の男。 筋骨隆々。 身長18

《ケムト》

・リュウコウと盗賊たち

元ケムトに住んでいた男達。 シルク

を慕い、盗賊になった。

キリク 盗賊団の一員で、 ひ弱そうな外見。

グリンの商車から略奪していた。 同業の盗賊に付け狙われていた。 1 9 歳。 商人だった元お嬢様。長い黒髪のなかなかの美女。 ・シルク シュートの手助けをしようと日々奮闘。父の敵を討つため、 カリューを拠点とする盗賊団の頭。 身長158cm。 父親がケムトの

ルジャベリンのリートと意思疎通し、毎回変身して町を襲う役のリ ・シュート トを追い払うことでヒーローを演じていた。 自称モンスター ハンター。 黒髪黒目の青年。 ドビ

を教える。 ・ボール= グリン ケムト位置の大商人。 ロイの雇い主で勉強

《ガルガイア》

リーエン ガルガイアのリーダー 弓の腕は右に出るものは

いない。

アレルナ・リーエンの奥さん。

《ドートリア》

エリナリア゠ スタンフィー トリアで戦う16歳の少

女。銃火器に精通している。金髪碧眼。

【地形】

まざまな島からなる。 ロスターニャ、 ・ザイガ 南東のジラビア、南西のクルシスの各大陸と大小さ 中心のタンタニア大陸、北東のバーカギル。 共通通貨はピークル。 北西の

《タンタニア》

ಠ್ಠ びえているため、 ・ボンゴ 大陸の最南端に位置する漁村。 交易をほぼ完全に断ち、自給自足の生活をしてい 北方にカリュー がそ

いが、 にボンゴしかなく、広大すぎるため、 ・カリュー 広大で身を隠すにはうってつけの場所のようだ。通っても南 ボンゴの北に位置する山脈。 人はほとんど通らない。 標高はあまり高くな

活気のある街。 める最南端と言われている。 魔物を警戒し、 カリュー 北の街。世間ではタンタニア大陸で人がす カリューの恩恵か、 警備は厳重。 水資源が豊富で、

ため、 軍によって滅ぼされた。 ガルガイア 村人の8割が武装し、 森の中の平原にひっそりとある村。 魔物と戦っている。 ガ ー レイシャの大 そこを守る

在し、 ・ゴルゴナリア砂漠 国や街もある。 ケムトの東に広がる砂漠。 オアシスが点

スを中心にして建国された。 トリア ゴルゴナリア砂漠の中央に位置する国。 カルタゴラと戦争を続けている。

スを乗っ取ろうと戦争している国 カルタゴラ ドー トリアの北に位置し、 ドー トリアのオアシ

(魔)

持ち、譲渡も可能 わらないが、その力は凄まじい。 《妖怪》 鋭い爪ととがった耳を持つ種族。 生まれながらにして2つの能力を 背格好は人間と変

火球の能力を譲渡した。 では晶霊石の石切り場で働いていた。 ・ガイガン 擬態 自分の体器官を自在に複製できる。 カルコンにザイガに来た礼に

《魔物》 能力を持つ獣。 先天的に一個体にひとつの能力を備

えている。

る魔物。 度出した水の球は解除するまで移動できない。 るほど拡散し、 ・リヴァイアムース 水の球に入って空を舞り、 殺傷力が落ちる。 水 Α 水鉄砲を発射する。 ボンゴを襲ったラブカに似てい 水鉄砲は遠距離にな ただし、

う。 目がな トに懐いている。 ドビルジャ ベリン いので、 幻覚の一種)。 自在に姿を変えることができる(物理的には効き 変身 レギュラスに洗脳され、 C ケムトに現れた魔物。 ケムトを襲 シュー

イシャ 音波 В ガー ゴイルのような魔物。 ガルガ

イアを襲う。口から出す音波で物を破壊する。

持ったもの。 《魔獣》 しかし、 獣が進化し、通常では考えがたい巨大さ、 その定義は人間による偏見が大きい。 強大さを

M -4 9 2 F C 機械化魔獣。 巨大な鳥で、 鉄球を落とす。

【古代】

石だけはその影響を受けない。 に複数あるらしい。 · 魔天転器 ボンゴに奉られていた古代兵器。 魔界と人間界をつなぐ役割を果たすもの。 どうやらザイガ 晶霊

【ジエルトン】

情報の漏洩を防ぐため、 ウラル= ジエルトンが結成した組織。 を証明するものとして、 o r l d を教典としている。 孤児や、一子相伝で伝えられている。 銀色の指輪が用いられている。 目的は自衛及び魔物の討伐。 e a 1 身分

【ディアボロス】

カルコンを世界の王にし、 魔物を駆逐するために作られた組織。

【精霊術】

森羅万象に精霊が宿っているとした太古の考えに基づき、 それらを

自在に操る能力。

? 開 眼 精霊術を発現させること。 剣の素振りなど様々な方法

がある。

? 発動 術を自在に操れるようになる事。 開眼したものならば

簡単に出来るが、 エネルギーを消費する。

?応用 術を戦闘可能なほどに使用する事。

熱を直接使い引火させたり、 筋肉を活性化させて身体能

力をあげたりできる。

空波を飛ばして遠距離のものを斬ったり出来る。 風を自在に操り、 自身や物を持ち上げて軽くしたり、 真

【能力】

ている。 魔物や妖怪が先天的に持っている力。 同じ能力でも、 使用する者によって大きく異なる。 妖怪は2つ、 魔物は1

) 剣

ジエルトンでは基本的に剣を戦闘の手段としている。 合わせた重量を使う。 に合わせてオーダー メイドする。 また、 本部の地下に鍛錬場があり、 修行では術に 術や体格

ブロローグ

達が溢れ返っていた。 らい、人々は日々怯えながら暮らしていた。 遥か昔、 人類が出現して間もない頃。 人類との共存を許さなかった彼らは人間を喰 この星ザイガには魔物や妖怪

を魔物や妖怪と共に封印したという。 の青年の名はカオス。彼は、封印が解かれた時にそなえ、 人類出現から数万年、 一人の青年がついに魔物たちを封印した。 自らの体 そ

彼はその間際に一つの予言を残している。

れるときがくるだろう。 『例えこの世にいかなる光が宿ったとしても、 闇が栄え、 悪が生ま

物語はそれからさらに数百年後

過ぎようとした刹那、村に突然大声が響き渡った。 たいている。その鳴き声と、 青空に包まれる海の上で、 となって小さな漁村、ボンゴを包んでいた。 海鳥が羽の白さを自慢し合いながら羽ば ゆったりと流れる波の音色はハーモニ そのまま静かに時が

「ロイッ、聞いてんのかいっ!!」

浅黒い肌の初老の女性と真っ白な肌の少年とが向かい合って椅子に 家。 職業の平凡な家庭だ。その家の中では手作りのテーブルをはさみ、 ぞんざいに応えた。 座っていた。 ロイと呼ばれた少年は椅子の上でストレッチしながら 屋根に群がっていた鳥たちが一斉に飛び上がる。 初老の女性の怒鳴り声が海を正面に臨む木作りの家から上がっ 家長は漁師、 その妻は主婦という、この村の90% この家はクレイス の家と同じ た。

聞いてるも何ももう覚えたっつうの!」

は眉間にさらに皺を寄せた。 子どもにそう言われたことに怒りを覚えたのか、 わくちゃ

「じゃあ、さっさと剣の稽古に行っといで!」

~~~!!

「なんだいその返事は!ほんとに怒るよ!!」

その言葉に押し出されるように、 てたなんてとても信じられん」 ばーちゃんはうるさい なし。 若い ロイは家を駆け出した。 頃は村で一番の美女っ て呼ばれ

夏らしい がままに稽古に行く気になんてとてもなれず、 なおされ 方に足を進めた。 の 外に出ると大きく伸びをした。 た桟橋の端で老人が1 入道雲が沖合に見えている。 人釣りをしていた。 目の前に広がるのは一 ふと目を向けると、 なんとなくそちらの 祖母に言われる 面 最近作り の海。

退したが、長年鍛えられた体は健在だ。絶対に釣りをするより素潜 りした方が魚が取れるとロイは思っている。 らなくなった男を指す。 この村での老人の定義は息子が一人前になった後、引退して船に乗 おお、 ロイ。 相変わらず怒られてるな。 この老人も数年前に足を悪くして漁師を引 ここまで声が聞こえたぞ」

るのだ。 老人はにやっと笑った。 れば昼間から続く酒盛りの声も聞こえない。 「大人が漁に出てると静かでいい。 ロイも首肯する。 ま、 淋しくはあるがな 港につながれた船もなけ 男たちは今漁に出てい

それはそうと稽古に行かないとまたどやされるぞ」

そういう老人にロイは唇を尖らせた。

となんだよ。意味わかんね」 「俺は早く漁師の仕事を覚えたいのになんでその鍛錬が木刀振るこ

きた」 「伝統なんだ。 ガイだって、 お前の祖父さんだってみんなそうして

「わかったよ。行ってきます!」

どの木刀を手に取って、 声を荒げてそう言うと、 林の中へと駆けて行った。 家の方に戻り、 家の裏にある1 ほ

船が帰ってきたぞー」

その言葉が聞こえてきた途端、 音がかすかに聞こえる。 イの表情が明るくなった。 の香の するほうへと駆けて行っ ロイは振っていた木刀を放 耳を澄ますと、木の船が帆をはためかす 汗を額から滝のように流してい た。 り投げて、 た 目 

**ソー、クー、クー** 

先ほどまでいっぱ 船はロープで結わえられている。 あろう魚達は港に置かれた木の箱に小分けにされ いに風を受けていた帆はきれいに巻かれ 先ほどまで船底に詰まっ 7 いた。 ており、

東の方に運んどけ おいそこ、 休んでんじゃ ねえ

大男だ。 野太い男の声が響いている。 名前はガイ。 この村の漁船の船長で、 筋骨隆々の黒光りする体をした中年の ガイとの関係は

「おかえりっ、父ちゃん」

とがしがしと力強く頭を撫でた。 ロイはガイに近づき、 声をかけた。 ガ イは振り向き、 ロイに気付く

「おお、ロイ。ただいま」

1 5 歳 にガイの色黒が目立つ。 に超えるガイ相手では見上げる形となってしまう。 った髪の色に比べて、濃い黒の短髪だ。 のロイはこれでも160 c m はあるのだが、 ロイは肌も白い 18 ロイの茶色がか ので、 0 c m を裕

「今日の飯はなんだ?」

先ほどの怒鳴り声の顔とはうって変わって優しい笑顔になった。

たとか。 と父母、 ている。 のだが、 タニア大陸と比べれば、気付かないほど小さい。 ある小さな島で、人口はボンゴと同程度、 キーじいさんはこの家の話によくあがる人だ。 たんだが、海底に設置してあった網が食いちぎられたらし るとガイに負けぬほどの豪傑な人で、葬式には村人全員が駆けつけ 嵐の日に船を守るために港に出て、波にさらわれたらしい。 その日の 「そういえば、漁場の最寄にあるテルの島 とは言っても村人は数えるほどしかいない テルの島はボンゴから南の方向へ3日ほど船で進んだ先に 祖母の4人だ。 若いころに10mもある鮫を銛で捕ったなんて伝説 一週間ぶりの家族全員揃った食事。 祖父はロイが生まれる前に、 面積はボンゴがあるタン のキーじいさんが言って 相当高齢の人らし クレ のだが・ 事故で死んだ。 イス家はロイ ίį • いも残し 話によ

ボンゴ近海は暖かく、漁の条件が良いので、漁師の言う大型っ は大体が3~ じいさんの話だと大型の海底魚がいるって話だ。 m以上の魚だ。 4 メ ー トルは、 二階から尻尾を持つ て

類を毎晩確認したぐらいだ。 しかし、 とがあるが、 えればいい。 目の前に出された父親の戦利品をほおばれるようになっている。 て(現実には重すぎて無理だが)魚の顔が地面に着くぐらいだと考 ロイも一度5メートルのフラットフィッシュを見たこ 怖すぎてそれから3ヶ月ぐらいは食卓に上がる魚の種 今となっては気にも留めず、

ば命を落とす危険性があるからだ。 朝早くから仕事を始めることがほとんどの上に、休息を取らなけれ にも反映され、 漁師は早寝早起きが他の仕事よりも確立されている。 この日も横になり、 ロイもよほどのことが無い限り日が落ちる頃には床 すぐに眠ってしまった。 家長のその生活スタイルは一家 なぜならば、

# パン!・・・パン!

ら外を覗いた。 何かが破裂するような音がした。 ロイはベッ から飛び起き、 窓か

「きゃあああ」

Ţ 若男女の悲鳴が村中に響き渡っていた。 聞き覚えのある女性の悲鳴が聞こえる。 絶えるはずのない波の音をかき消していた。 いままあわてて家を飛び出した。 だが、 その声はあまりに痛切すぎ それだけではなかった。 そこで足が止まっ ロイは意味もわか

# それは、あまりにもむごい光景だった。

出し、 上が無い。 る女性には右肩から先が無い。 体が上下二つに分かれている漁師がいる。 幹にへばりついていた。 辺りに血の池をつくっていた。 先ほどまでその人を支配していた脳は その切れ目からは血が止め処なく その先の林にいる人は首から あそこにうずくまって その隣の樹 噴

## ゲエエエエエ」

易く散っていた。 然に接してきた人たちなのだ。だが、そんな人々の命はあまりに容 そこにいる人たちはロイが生まれたときからの知り合いで、 ロイはそ かだったらもしかしたら耐えられたのかもしれない。 の場にうずくまって嘔吐した。 もし、 彼ら、 彼女らが見知 しかし、 家族同

ようやく胃から出すものがなくなって顔を上げると、 なかった。 り、黒さを増す。 いた女性は目を見開いたまま動かなくなっていた。 ロイは再び吐き気を催したが、 もはや胃液しか出 池は次第に固ま うずくまって

# パン!

空を見た。 れは上空から聞こえてくるようだ。 何かが弾けるような音」 は途切れることなくまだ続いていた。 ロイは顔を上げ、 明るみ始めた

水鉄砲が発射されている。 水鉄砲と言っても手で作るようなかわい 空に浮いている。 それを見た瞬間は、 なぎ倒した。その水鉄砲は樹の幹の幅よりも大きい。 の球体が空に浮かんでいて、そこから弾けるような音にあわせて、 ものではない。 よく目を凝らして見ると、水のようだ。 今、その水鉄砲のひとつが樹の幹に当たり、 何がなんだかわからなかった。 何か青いも 大きな水

なんだ、 あれ・・・・・?」

ロイがそう思ったとき、 朝日がそれを照らした。

ようだっ きさと比べると軽く1 させるも 中には魚がいた。 が似ており、 でいる。 のが無い その ので大きさはわからないが、 樹の肌みたいな色をした魚。 陸上動物にはありえないほど口が大きい。 動きはまるでこの光景を楽しんでい 0メートルはありそうだ。 さっきの水鉄砲 よく見ると、 それが球体の るか 深海 対比 水の の大

「ちくしょう、どうなってんだよ・・・」

そうロイが悪態をついた瞬間!水鉄砲がロイめがけて飛んできた。 危ねえ!」

ロイの視界は右へと引っ張られた。

「おい、ロイ!大丈夫か!?」

どうやらガイがロイを突き飛ばしたらしい。 ガイの右腕には水鉄砲

がかすったのか、血が滲んでいた。

「くそっ、こっちだ、走れ!」

ガイはロイの手を引いて村の広場の方へと走った。 かない人間を優先的に狙うらしく、 ロイたちのほうは向いていなか 上空の魚は、 動

だ。その塔の下は、村の備蓄庫になっていて、 見張り台として使われている。何でも、 けられないように頑丈に造られている。 のではなく、ここを拠点に村を作ったというのだからかなり古い物 村の中央には石でつくられた塔がある。 村をつくってから建てたも それほど高いものではな 時折来る盗賊にも開

「ここに入れ、早く!」

中に入ると、扉を閉めた。 ガイは、持っていた鍵で錠を空け、 ロイを中に入れた。 自分もその

「全く、お前はいつまでっても朝寝坊だな」

ガイが微笑んだ。 その顔は今まで15年間慕い続けた「父ちゃ

の顔だった。

「なんだよこれ・・・」

ロイは俯き、震える声でその言葉を喉の底から押し出した。

以外は村の離れの避難所にいる。 んは・・・ いいか、 現状だけ言っておく。お前と、 助けられなかった」 母ちゃんも一緒だ。 殺された村人、そして俺 だが、 ばあち

ことを教えてく の頭の中で何かが崩れる音がした。 やらで何かと忙しかった母ちゃんの代わりにロイにいろんな れた・ その光景が脳から溢れ出てくる。 今まで家事やら父ちゃ

「あれは恐らく・・・魔物だ」

それ以外考えられない。 ているとも教えられていたのだが・ な獣がいるはずが無い。 それは子供であるロイにも分かっ 確かに魔物は封印されただけで、 まだ生き た。

「いいか、お前はここにいろ!」

ガイが、先程よりもさらに真剣な顔をして言った。

「お前『は』って、父ちゃんは?」

活できねえ、 このままあいつらにここに巣食われちゃ 塔にある古代兵器を使う」 あ避難してるみんなが生

「兵器?」

「爆弾だ!」

それは初めて聞く言葉だった。 古代兵器?爆弾?そんなものがこの

ボンゴに?

そう思ったとき、はっとした。

「じゃあ、父ちゃんはどうなるんだよ!?」

・・・・・・村のみんなのためだ」

ガイの顔に少し笑顔が戻った。 それから小さく溜息をつくと、 ロイ

の目をまっすぐ見た。

目の前が真っ白になった。 の子だ。母ちゃんだ産んだ子供じゃ、ない」 の男と恋に落ちてな。 母ちゃんには幼馴染の女がいた。その人はこの村に迷い込んだ旅人 のことだ・・ 「その前に、 お前に教えなきゃならんことがある。 ・。 俺も母ちゃんも若かった頃・・・ 実は・・・お前は・・ それはあまりにも唐突過ぎて、 • お前 今よりもっとだ。 ・その二人の間 の生い立ち 重すぎる

が静かに脳の中を何度も反響していた。 言葉は出てこない。 今にも意識を失いそうだった。 ガイの言葉だけ

事実だった。

母ちゃ 「その男はまたすぐ旅に出て、 俺達がお前を引き取ることにした」 んは実は病気でな。 子どもがつくれない体だったんだ。 その女はお前を産んですぐに死んだ。 だか

ガイは今にも泣きそうな顔をしていた・ も守るってなあ。 そう言われたとき、 「俺と母ちゃんはなあ、 人と違う。 肌が白いのも髪の毛の色が薄いのもロイだけだ。 だからよぉ、ここにじっとしていてくれ」 なぜか妙に納得できた。 女が死ぬ間際に約束したんだ。 • ロイの容姿はほかの村 それはロイも同じだ。 何があって

「わかった」

わかっている。

今すぐにガイは死別する。

涙が止まらなかった。 そううなずいたロイの頭をガイはガシガシと撫 の最期なのだ。 血を受け継ぎ、俺達から愛情を受け継いできたんだからな」 それでこそ俺の子だ!いいか、忘れんなよ、 これがロイが自分の目標にしてきた「父親 お前はあの二人から でた。

ぎぃ ガイは扉を開けた。 は弱くはなったが、 じゃあな、 いい、バタン。 ・父ちゃん!!」 ロイ 先ほどから続く水鉄砲の音がさらに激 !ちゃ 重々しい音をたてて扉は閉まっ 已然として鳴り響いてい んとでっかくなれよ!! る。 た。 水鉄砲の音

ドウン!!!!

って、 飯を食って眠る。 やんだ。 対側の壁に近付いて、それをかわした。 世界が揺れた。 いつもの夜だったはずだった。 止まったのにロイの目から溢れる涙は止まらなかった。 剣の稽古をつけてもらって、 とめどなく続 壁際に積んであった木箱は転がってくる。 何で、どうしてこんなことに 11 ていた水鉄砲の音も聞こえない。 朝になったら港に行ってガイを手伝 疲れて帰って母ちゃん しばらくすると音が完全に 水鉄砲は の美味い ロイは反

壁の上に積

んであった小

箱が崩れ、

ロイの後頭部めがけ

て落ちてき

涙がようやく収まったころ、1人でいることに限界を感じてゆっ 生きているはずだ。ならば貯蔵庫にある食料は不可欠なも 涙が止まらなかった。 りと扉を開けた。 おらず、まだ安全ではないという事なのだろうと考えた。 必ずこの場所は外から開けられる。 外に出ることはなかった。 それからどれくらいの時間が経っ の物を何とか喉に押し込み、 イの孤独感をさらに加速させた。 避難所から戻ってきたみんなが復興作業をしてい 父親はもうこの世にはいない。 ガイの話では母親や村民の何人かはまだ 何日かをそこで過ごした。 扉には鍵がかかっていなかったが たかわからない。 開かないという事は周囲に誰も ロイ その事実が は倉庫の のなので 

なんで・・・。なんでなんでなんでなんで!」

るかもしれない。

そんな期待をこめながら

込んでしまったように、 そこには何も残っていなかった。 何も無い世界だった。 まるで知らないどこかに迷

「どう、して・・・・・」

真っ白な世界。そこにたたずむのはロイー人。

「どうして!!」

と同じくそんなものはどこにもなかった。 ロイは膝をついた。 さっき抱いた期待はただの虚構だった。 世界

た。 既に枯れ はずの遠くの離れも・・・。 稽古をした林も、 残った 村は無かった。 たはずだった涙が再び流れ出す。 のは、 白い砂と白い塔、 みんなが働いていた港も、 ロイが15年間暮らした家も、 全てが、 そして肌 この世界から削り取られ みんなが避難している の白い自分だけ。 こい

「やはり何も残っていないか・・・」

一人の人間がボンゴの跡地を眺めていた。 紫に近い黒いロー · ブを頭

から爪先まですっぽりと被っている。

見つけた。 その人間が海のほうへ向かって歩いていくと、 真正面に白い建物を

なんだ、やっぱりあるじゃないか。」

そう呟きながら建物に近づくと、 いるのが見てとれた。 そこには少年がうつ伏せに倒れて

「おい!」

男は駆け寄り、 ブの人間は安堵の吐息を漏らすと、 少年を抱きかかえた。 少年を建物を背もたれにして座 息はちゃ んとし て いる。

「うっ」

らせた。

な闇色をしていたからだ。 は少し戦慄する。 少年は苦しそうに顔をしかめると、目を開けた。 少年とは思えない、 一片の光も見いだせないよう その少年の目に

「おい、水だ。・・・飲めるか?」

男は懐から水筒を取り出し、少年に飲ませた。

えない。 少年は掠れたか細い声で何か問いかけたようだったが、 男には聞こ

「立てるか?」

男は少年を立たせると塔の下にあった空間に少年を担ぎながら入っ 男が顔を覗き込むようにしてそう尋ねると少年は小さくうなずい そういって、 砂が入らないように扉を閉めると、 ていった。どうやら村の備蓄庫のようだった。 私の名前はギン。 ローブのフー ここの北の山、 ドを取った。 カリュー に住んでいる者だ 少年の方に振り返った。 金色の髪に青い目をしてい ものが散乱してい ් ද

ಶ್ಠ 顔は少年が今まで見たこともないほど整っ てい

君は・ ・・ボンゴの者だね?名前は?」

少年は頷

「ロイ=クレイス」

言葉にも表情にも目にも何の感情も見いだせな

「ロイ君・ • ・か。君はどうして助かったんだい?」

るで遠い昔の伝説を聞いているようだった。 その話はロイが主人公のはずなのに、なんの抑揚も感情もなく、 で村人も村も消し飛び、 たこと、父親が村を守る為に古代兵器を爆発させたこと、 ロイはかすれる声で静かに話し始めた。突然、空飛ぶ魔物に襲わ 後には自分とこの塔だけが残ったこと。 そのせ れ ま

「当てはあるのかい?」

ಕ್ಕ 南を海、 知り合いもいなかったはずだ。 ロイは落ちくぼんだ目をギンに向けると首を横に振った。 ロイはこの村から出たことすらない。 あとは山に囲まれた土地で、完全自給自足の生活をしてい 他の村人もボンゴ以外に ボンゴは

わかった、それじゃあ、 私についてきなさい

ギンは言って立ち上がった。 ロイに向かって手を伸ばす。

「どうしてですか・・・?」

乾いた唇がかすかに動く。 いや、 かすかに しか動かせなかっ

北の街に行けば最低限生きていくくらいはできるだろう」 「多少の衣食住は面倒を見てあげる。 体が回復したらカリュ より

生きて、 いく・・・・・?」

た。 ギンの目が鋭 が起こっているのか理解するよりも先にギンの口から叱責が発せら つま先が浮いている。 くなり、 ロイを睨むとロイの胸倉をつ 苦しくはないが、 身動きは取れない。 かみ、 持ち上げ 何

勇姿を讃えるんだい?誰がその勇敢な魂を受け継ぐんだい お父上は最期になんと言ったんだ!何を願っ !君は死んだか?生きてるだろう!君が生きなきゃ たんだ!生きるん 誰がお父上の だ

た頬に涙が伝う。 ロイの目から、 またしても涙が溢れた。 すっ かり痩せこけてしまっ

わからないよ・ • なんで、 どうしてこんなことに

ぼーっと眺めていた。 ギンはロイをゆっくりと床に下ろし、 そう言って、倉庫を物色し始めた。 品の選別の手際のよさをロイは の倉庫にも食料や路銀はあるはずだ。 「さあ急ごう。 いつまた魔物がくるかわからない。とりあえず、 ぐずぐずしている暇はない」 持っていた水を再び与え

出発だ」

にギンは言った。 しばらくして、倉庫の中のものを結局ほとんど背負い、 笑顔ととも

広く、 た向こうにあるという麓の町までの道のりの半分ぐらいは行ったら に登ったことがあるらしいが、 カリューの山は、 しいが、それでも丸2日かかったという。 草木が生い茂っていて人はなかなか通らない。ガイも若い頃 それほど高いものではない。 途中で帰ってきたそうだ。 しかし、 途方もな 山を越え

かった。 た。 こともない獣や蛇、 ていなかったので、 ロイはギンの大きな歩幅に四苦八苦しながら歩いていた。 ギンはそれ以外にはほとんど喋らなかった。 大きな牛みたいな生き物を見たら即座に伝えるように言われ 虫など様々な生きものがいたが、 恐らく害はなかったのだろう。ただ、 ロイも喋る気はな ギンは気にし 山に入る 途中見

ボンゴを発ってから丸一日。 えないくらい 辺りは暗くなっていた。 そこにつ いたときにはギンの表情も見

結構頑丈そうなつくりだった。 家があった。 ロイ の家と同じぐらいの大きさだ。 丸太でできてい

ただいま」

抜けになっていた。 るが、大きな机やいすが置いてある場所は屋根があるだけで、 不思議なことにこの家に扉はない。 奥を見れば部屋らしきものはあ 吹き

結局、 気を失うようにして眠った。 のはもちろんだが、それよりも気力の方が底をついていた。 ロイにはそんなことに気づく余裕はなかった。 口ぶりから、2人以上の人間がほかにもいることが窺えたが、 「あれ?誰もいないのか。 一番奥の部屋を案内され、 しょうがないな」 そこにあったベッドに倒れ込み、 山登りで体力がない 今の

ばらく考え、昨日何があったのかを思 見慣れない天井を見上げて、見慣れな 目が覚めると、 室内は窓から差し込む夕焼け い出した。 い狭い部屋を見まわした。 の赤に染まっていた。

経過したからなのか、 ベッドから体を起して逡巡する。前にベッドで寝たのはまだ幸福 からない。 った時だったか。 思い出してももう涙は出なかった。 心が死んでしまったからなのか、 それは時間が 自分ではわ

ただ、 葉、ロイに生きろと焚きつけた言葉。 こうと思った。 思い出される言葉があった。 ギ だから、 ンと名乗った怪しげな男の言 とりあえず生きてお

「足、いて・・・」

じっとしていることが嫌いで普段から走り回ってい がら立ち上がると、 体重をかけようとした途端に筋肉が悲鳴を上げた。 倒れるようにして外開きのドアを開けた。 痛みをこらえな るのに、 両足に

重を預けながら少しドアを引いて外を見た。 かないようになっているのか?設計ミスか?と思い、 何か固い ものに当たったらしい。 まさか壁があってちょっとし ドアノブに体

ゴンッ

ではなく、 そこには筋骨隆々の大木の様な男が立ってい ていた。 のは初めてだ。 誰つ!?」 顔は怖い。 この男の額に当たったらしく、 生まれてこの方、 ロイが人の顔を怖いと思った 男は無表情で額をさすっ た。 どうやらドアは 壁

どうしたオルソー ?

主を見て、 右の方から野太い ロイは目を見開 声が響い がた。 てきた。 そして顔をのぞかせたその声

「お、同じ顔だ・・・・・」

ったらしい。 双子という概念を知らなかったロイにとって、 しばらく男を指差したまま固まっていた。 その光景はホラー だ

額をさすっていた男は何も言わずに歩きだしたので、 くその後をついていった。 ロイは何とな

は夕日は差し込んでいない。 真ん中に大きな木造りのテーブルがある部屋だった。 にはランタンが1つだけ置いてあり、火が灯っている。 窓は東向きなのだろう。 テー この部屋に ブル が上

合はなんて言えばい やあ、 ロイ 君。 おはよう・・・ いのかな?」 というにはもう夕方だね。 の

を見て、 大きな机に座っていたのはギン。そしてその横に座っていた男の ロイは意識を失いかけた。

そう、彼らは世にも珍しい3つ子というやつだったのだ。

「この子はロイ君。戦利品だ」

軽く咳払いして、ギンは言った。 反応を見る限り、 ロイの目の前には太い丸太があったので、とりあえず腰かけてみた。 間違ってはいなかったようだ。 男たちはそれぞれ椅子に座っ

が、 ギンの隣に座っている男がにやにやと笑いながら言った。 一言も喋らな 「もう少し売れそうなガキはいなかったんですか、 先ほどオルソーと呼ばれた男とは表情が全く違う。 りして 仏頂面のままだ。 お頭?」 オルソーは 同じ顔だ

婦人なら買ってくれるでしょうが」 「これじゃあいっても5万ピークルがい いところだ。 ま、 好き者の

ピークルと言うのはザイガの星共通の通貨らしい。 のはボンゴでは貨幣経済そのものが成り立って イはお金と言うものを見たことがない の価値なのかもわからない。 からだ。 だからそれ ١J なかったので、 らしい、 がどれく とり う 

「えっと・・・買うって・・・?」

徹頭徹尾、話が全く見えてこない。

「冗談だよ」

はくすくすと笑った。 4 人の中で唯一 顔の違うギンは恐らく3

ていたのが気になった。 人よりも若い。 だが隣に座っている男が少しだけ丁寧な口調で喋っ

じゃあお頭、 やっぱ戦利品は食料だけですかい?

心を強める。 倉庫の中の食糧をギンはまとめていた。 あれは火事場泥棒のようなものなのだろうか。 戦利品というのはおかしい ロイは更に警戒

「う~~ん、労働力、かな?」

「 は ?」

ロイは首をひねった。 さっきから話がなに1つ見えてこな

話しづらかったんだけどね。 まあ元気になったみたいだから大暴露 その代わりにちょっとやってほしい仕事があるんだ」 やってるんだよ。 大会催しちゃおうかな、 をしてたからなんか独りになりたいのかな~と思ってさ、こっちも 「あ、ごめんごめん、 あっ、でもとって食わないから安心していい 言うの忘れてたよ。 うん。実はだね、 私たちは盗賊なるも いや、君がずっと暗い のを

始めた。 昨日、ここに来るまでまったく喋らなかったギンが矢継ぎ早に話し あっけにとられたロイは、 ギンの言葉を全て理解するのに

相当時間がかかった。

「盗・・・族・・・?」

ボンゴに足を踏み入れた理由。 まは合う気がした。 「それはつまり、 何のためらいもなく倉庫から食料を持ち出したこと。 確かにつじつ うんそう、決定。 生かす代わりに盗賊の片棒を担げと・・・?」 じゃあよろしく」 唯一合わないのはロイがここにいる理由だけだ。 カリューに住んでいるわけ。 そし

ギンは目の前で手を汚してまで生きることを選択すべきか迷っ るロイを無視して勝手に決定した。 て

こつ ちからヘルゲン、 アンゴラ、 オル だよね?」

応えたのはヘルゲンだけだった。

「で、早速仕事なんだけど」

えっと、 ちょ っと・ ・ちょ つ 待ってください

ロイはあわてて声を上げた。

れともこのままのたれ死ぬか・・ ああっ、 ごめん。 · · · ロイ、 君は僕たちについ ・どっちを選ぶ?」 て生きるか、 そ

銀は極めて愉快そうに笑いながらロイを見た。

3人が「違うだろ」という目でギンを見ていた。

た。 ロイは混乱する頭の中で、 昨日ギンに言われた言葉がくり返し

勇姿を讃えるんだい?誰がその勇敢な魂を受け継ぐんだい!?』 よ!君は死んだか?生きてるだろう!君が生きなきゃ 誰がお父上の お父上は最期になんと言ったんだ!何を願ったんだ!生きるんだ

心は既に決まって よろしくお願いします」 いた。丸太から立ち上がって勢いよく頭を下げた。

かギンなら信用していい気もしたのだ。 何があっても、とりあえず生きてみようと思った。 それに、 なんだ

その言葉を聞いて、ギンはニッコリと笑った。

よろしい・・ ・ようこそ我らの家へ。で、早速仕事の話だ」

「な、なにをすればいいんですか・・・?」

恐る恐るロイは尋ねる。 いこともしなければならないのかもしれない。 不安をよそに、 ギンの解答は実に単純明瞭なものだった。 盗賊という事は犯罪者だ。 しかし、 危険も冒すし悪 そんなロイ

う~~~ん・・・・・雑用?」

「朝早いけど大丈夫か?」

んやで3人同時に生まれたらしい。 そうヘルゲンが言った。 いうのは説明を受けてもよくわからなかったが、 よく喋るこの男が長男だそうだ。 要するになんやか 3つ子と

たようだ。 るのはなかなかきつい。 早起きは習慣だったので問題はなかった。 しかしこの3日で少しではあるが慣れてき ただし、 夜まで起きて

実や山菜とほぼ同じものが採れた。 仕事は薪割り、炊事、 のそれほど高くないカリューではボンゴの近くに自生している木の 洗濯、 木の実や山菜などの採集が主だ。

獣を狩ってきたり、かと思えば何も狩らずに泥だけになって帰って 雑用をしているのは基本的にロイー人だ。3人はたまに出かけて きたりする。ギンはといえば一日中机に座ってお茶をすすっていた な毎日を送っていた。 たまにふらっと出かけたと思えばすぐ戻ってきたりと退屈そう

おお、大変だな、ロイ。ご苦労ご苦労」

だけなのだから。 この上ない。そんなロイにヘルゲンが声をかける。それをねぎらい からか、 ロイ以外の4人は椅子に座って何もせずにロイが働くのを見ている の言葉ととれるものは相当の聖人であるか、 ロイは夕飯のために机を拭いていた。 ロイがここに来て4日目。 表面がざらざらしていて、それでいて汚い 黄昏時になり、 こんなところに置かれている ランプに火がともされ 正直者だろう。 ので面倒なこと なんせ

今日は結局その場所を一度も動かなかったギンがそう言ったとき、 まだ汚いよ、 の怒りがピークに達した。 ロイ。 ほらっ、 もっと手を素早く動 かして

「やってらんね~~!!」

だっ た。 だろう。 ロイは布巾を床に叩きつけた。 そうしなかったのは助けてくれた最低限の恩義というやつ 本当ならギンに投げつけたいところ

日も正直にやってた俺も馬鹿だけどっ! 「何で俺がこんなことしなくちゃ なん ねえんだ、 面倒くさっ

地団駄を踏みながら叫んだ。

「あんた、暇なら手伝えよ!!」

たギンの金色の眉毛がピクリと動いた。 力強くギンを指差す。それを受けて、 それまでにやにやと笑っ

ふう

「ちょっと今ため息付いただろ!聞こえたぞ!

た。 今のロイにとって自分の発言を妨げようとするものは全て敵であっ

ゃん!なにも盗まないおっさんたちを人は盗賊とは呼ばねえ、 て人と呼ぶんだよ!」 ねえじゃん!こんなところ誰も通らねえじゃん!なにも盗めねえじ 「こんなことに何の意味があるんだよ!ていうかだいたい盗賊じゃ

3日間たまりにたまった鬱憤。それが一気に噴き出した。

あげようかと思ったのに」 「あ~あ、 せっかく頑張っているみたいだから剣の稽古でもつけて

「は?何言ってんだよ。わいてんのか!?」

ロイの人差し指が自分の頭を指す。

要するに『頭大丈夫ですか?』のポーズ。 は静かに目を細め、 口を開いた。 そんなロイに対してギン

間はもう既に襲われてる。そんな世界で君は本当に生き残れると思 ってる?無理だよ、 ってる?復活した魔物はあれだけじゃないんだよ。 だって君はいつか自立するわけでしょ?魔物を見たんだろ? ここを出たら君なんか1週間と持たないよ。 それは。 私達だってどうなるかわからない世界 何年も前 野垂れ死 から人 でカ わ

ラスの餌がせいぜいだ」

ったロイの将来をギンはすでに見ていたらしい。 がら黙って働 まくし立てられた言葉にロイは一瞬にして口ごもった。 ていけるはずもない。 にわかっているのだ。 いていた。 ボンゴ以外を何も知らないロイが1人で生き 分かっていたからこそ3日間苛立ちを抑えな しかし、ロイ自身ですら何も考えていなか それは

らだけどね。だから君は決して特別じゃない」 ガは魔物に犯され始めている。 こんなに増えたのはほんの数年前か 「あの日のあの村が初めてじゃないんだよ。 もう何年も前からザ

. . . . . .

分だけがこんな目にあっているのだと。 知らなかった。 ボンゴは他との交流が全くなかったから仕方がない のかもしれないが。ずっと自分だけが不幸なのだと思っていた。 自

ロイは俯き、自分への情けなさから溢れる涙を拭った。

活を始めたのは9歳 活を始めたのだって君よりずっと小さい頃だったし、私が魔物に家 る場合じゃな 族と故郷を滅ぼされ、血肉をすすり、人を見たらまず奪うような生 また泣くの?君はもう子供じゃないんだよ?この3人が僕との いことぐらい察しなよ」 の時だ。 君はもう子どもじゃないんだ。 いて

ギンの言葉が強く心にグザグザと刺さっていく。 らも生きることを選択した男たちの顔を。 3人の顔を見た。 ロイよりもずっと小さいころに絶望を背負いなが ギンの顔を見て、

ロイは涙を残らず拭うと、大きく息を吸った。

「すいませんでした」

さて、 界を生き延びなくてはならない。 は考えもなしに動 の本心だ。 謝る必要はないさ。 君はそれ それ なったかな?じゃあ はを望むかな?」 が間違っているわけじゃない。 くのもい 何も考えずに言ったことなのだからそれ いがそればかりではいけ そのためには力が 少し考えてみようか。 ただ私が言いたい ないとい る。 君はこの世 どうだろ う事さ。

選択肢など始めからなかった。 の日を思い出すたびに悲しみとともに湧き上がる激しい怒りを。 ロイは決して忘れてい ない のだ。 あ

「・・・・・はい」

いた。 思いを巡らせているうちに怒りの対象がギンから魔物 拳に力を込めながらもロイはギンを見据えてそう言った。 へと変わっ て

「オーケイ。大事な話がある。 そこに座りなさい」

ロイが丸太に腰をかけると、ギンが話し始めた。

「さっき君が言っていたが・ • ・そう、 私たちは盗賊ではない」

「やっぱり・・・・・」

ロイは呆れた顔でギンを見た。

のだけどね 私は物心ついたときから盗人をやっていたから似たようなも

**うか**? 微笑みながらギンは話す。 るのは時間が経験したからだろうか?それとも乗り越えたからだろ そんな辛く苦しい経験をそん な風に語 れ

私は今年で24になる」 私とこの3人の関係は師弟だ。 見えないだろうけど彼らは 1 歳

「ええつ!?」

生きているように見える。 どう見ても3人の方が老けて見える。ギンの見た目が非常に若々し のもあるだろうが、3人が老けすぎだ。 どう見ても実年齢の倍は

こに来る間に言った『牛みたいな生き物』 「そして今、私たちはこの山に居座っている魔獣を追っている。 と言うのがそれだ」

「魔獣?」

聞き慣れない言葉に聞き間違えたのかと耳を疑った。

とにかく、 く理由に納得がいった。 まあ、 色々 カリューには何かがいる。 いるんだよ。 そういうのは後で説明しようかな ようやくこんな僻地に身を置

でもなんであんた達なんだ・・・ですか?

私たち4人だけじゃ ない、 既にザイガ中で同志が活動してい

で、 ಠ್ಠ ザイガは世界の中心にボンゴやカリュー があるタンタニア大陸があ 南西にクルシスそれぞれ大陸がある。 ほかの大陸全てを足しても半分ほどの面積もない。 その北東にバーカギル、北西にロスターニャ、 中でもタンタニア大陸は巨大 南東にジラビア、

言を危惧 「私たちの組織の創立者はカオスと共に戦ったものだ。 Ų この星に私たちを残した」 カオスの

ことだ。 者。その伝説は小さいころから毎日の様に聞かされてきた。そのカ オスと時を共に過ごしたという事は数百年前からある組織だという カオス。 かつてこの星から暗黒の闇を取り払い、 希望をもたらせ

めている節がある」 うな身寄りのないものも多い。 まあ、 割と名の通ってない組織ではあるんだけどね。 むしろ魔物による遺児を積極的に集 私たちの

ギンと3人、そしてロイの共通点。 たからこそ、ギンはこの話を切り出したのだろう。 イの村を滅ぼし たのが魔物だ

ジエルトンの名前だ。そして・・・」 私たちの組織の名はジエルトンという。 これは創始者、 ウラル

るූ ギンは指を立てると「ちょっと待ってて」と言って立ち上がり、 持って現れた。 の部屋へと入っていった。 棒状の物は1メートル以上あり、 数秒後、 何か棒状の物と、小さな木箱を 布にくるまれ てい

ギンが棒の布を取ると、 ってある。 メートルほどの大剣。 ジするだろう形である。 鍔は左右に開き、 中から出てきたのは一振りの剣だっ 鞘は黒く 恐らく剣と聞 柄の部分は横縞の模様が彫 いて誰もがイ

木箱は開けずに剣の横に置いた。

の身分を証明するものだ」 の途中だっ たね。 この木箱の中に入っているものは唯 私たち

そう言って木箱を開けた。 シンプルなものだった。 中には銀色の指輪が入ってい た。 何も彫

「そしてこれは、君の誕生へのプレゼントだ」

そういって剣を鞘から抜いて見せた。 刀身はロイの後ろにある窓か

ら入り込む光を反射し、眩しい。

ギンは剣をもう一度机の上に置くと、 ロイの目を見据えた。

「君には、今から私たちの同志になってもらう」

コイはい」

ロイもギンの目を見据えながら答えた。

「よろしく、ロイ」

踏み入れたのだった。 ロイの生きる意味である。 覚悟は既に出来ていた。 この日から、 力を蓄え、 ロイは戦いの世界へと足を 魔物を討つ。 それが今の

まずはここで剣を振りなさい

剣を渡されてすぐにロイはそれを言われた。 立ちながらロイは言われるがままに剣を振った。 やにやと笑いながらお茶をすすっていた。その様子に少しだけい それは全く別の場所だ。ギンはというといつも通り椅子に座ってに すぐ目の前 くくっていたのだが・・ 刀を振らされているのでこれくらいなら余裕だ。 の野原だ。3人も3人で修業というものがあるらしいが、 場所はというと小屋 そんな風にたかを 小さいころから木

ゼェ、 ゼェ

い る。 増幅していた。 りに長すぎるその刃にかかるモー メントがロイへの負担を何倍にも よりも軽いものの1 め処なく流れ続けていた。 息が荒くなり、ペースはどんどん落ちて まだ始まってから30分も経っていな 真剣がこれほどまでに重いとは思わなかった。 ,5?ほどある。それに加えロイの体にはあま いのに、 ロイの額には汗が止 鋼剣は見た目

「ここまでか」

ロイをずっと観察していたギンが目を細めた。

もちをついてしまった。 剣を振り上げた時に止まることができずに後ろにひっ くり返っ

・っつう」

Ļ ロイの 刺ができ、つぶれて血だらけになっていた。 激しく息をしながら。 右手は痙攣し、 親指と人差し指の間はこの短い ギンの方へと目を向け ロイは剣を地面に置く 時間( の間に 肉

20分くらいかな。 まあ、 ١J い方だ」

ギンは立ち上がってロイに近づいた。 あと一ヶ月で2時間、 今のペースで振り続けるようになってもら まじめな顔をして 61

う。 よりもまず体力がものを言う。 も 誰か、 もしくは何かと対峙することになっ 体力の限界= 死だ」 たとき、 技術

「精進します・ • ・ お頭」

た。 ロイの掠れながらも力強い声とその言葉を聞いてギンは肩をすくめ

「わざわざヘルゲン達と同じ呼び方にしなくても」

いつのまにか微笑が戻っている。

いや、兄弟弟子だからそっちのほうがい しし と思ってるんスけどね」

「ま、いいや。 じゃあ、 がんばってね」

ギンは家の中へと入っていった。その姿を確認 くりと立ち上がり、 森の中へと消えていった。 た後、 1 はゆっ

あれ?お頭、口 イはどこですかい?」

自分たちの修業から帰って来たヘルゲンが尋ねた。 日はもう暮れか

かっていて、山は赤く染められていた。

「あいつ今日の飯当番なんスけど •

もっとも、昨日も今日も明日も明後日も当番はずっとロイのまま変

わらないのだが。

「ロイなら表でちゃんと・

ばててるよ。 と言おうとしたが、 その言葉はさえぎられた。

いません」

先ほどまでロイを探していた三男のアンゴラが椅子に座るなり言っ

「え?」

た。

ことになる。 目を向けるとそこには鞘に収まった剣が置かれていただけだっ ロイが剣になってしまっ たのではない限り、 そこにはロイがい

逃げた・ わけじゃ ない筈だけどな

立ち上がって剣を拾う。 の仕方を教えてやらなければならない。 柄の血は既に乾いていた。 帰ってくれば、 帰ってきたら手 の話だ

その時、 時間が掛かりました」 かと思ったんスけど、思いの外遠くまで行きすぎて帰ってくるのに 「すいません!手首が動かなくなったので、足腰だけでも鍛えよう 赤から黒に変わっていく道を走ってくる人影があった。

け寄ってきた。 ロイだった。汗だくになって、 その顔を見て、 ギンはすぐに悟った。 肩で息をしながらギンのもとへと駆

「ロイ、ボンゴを見てきたかったんだね」

ロイは頷いた。

うしても見ておきたくて・・ 「もうあそこには戻れな iì Ų ここにくる時は突然だったから、 تع

「それで、もういいんだね?

・・じゃあ、

飯作ります」

握られたこぶしに力が入る。 そういってロイは厨房の奥へと入って行った。 ギンたちとは比べ物にならないほどの

小さなこぶし。 それでも

強く、なるんだ」

ギンとその横にいた三人は椅子に腰掛けた。 ヘルゲンが尋ねる。

「ほんとにあいつも連れて行くんですかい?」

ギンは答えなかった。 難しい顔をしたまま目を閉じた。

体も一回り大きくなったようだ。 それから数日間、 ロイは剣の振ることのできる時間を着々と伸ば そして素振りを始めて3週間後

ハッ

っ た。 ら振り上げまでが格段に早くなり、 やはり剣を振っていた。 既にロイが剣を降り始めてから1時間が経過していた。 しかしほぼ三週間前と比べて振り下ろし 形もより美しく洗練されつつあ

毎日のように座ってロイを眺めてい るギンが呟い た。 つもはほと

を大量に流していた。 んど汗をかかないギンが、 日陰に座っていても暑く感じ、 まるで汗

異常気象かな?」

ಠ್ಠ ギンは立ち上がり、屋根から出て太陽を仰いだ。 はその暑さの原因は感じ取れない。 そこにはロイがいた。 むしろ正面から熱風が漂ってい し かし、 太陽から

「暑くないかい?」

づいた。 た。 集中しているロイは反応しない。 すると、 まるで炎の前に立っているような熱を感じた。 ギンはロイのほうへとまた一歩近

これは

けで、いつもと同じように剣を振っていた。だからそれに気付いた じようなシャツー枚の体からいつもと同じように汗を流しているだ その熱は のはギンだけだ。 ロイの体から発せられていた。 しかし、 ロイは いつもと同

ギンは何か思いついたように目を見開くと、 をすすりながらロイを眺めた。 小屋の椅子(ヘルゲンが言うにはお頭ポジション) 大きく頷いて息を吐き へと戻り、 お茶

ロイ、 2時間が経った」

えつ?」

ロイは言われたことが理解できなかった。 脳の大半はまだ剣を振る

ことへと注がれていた。

ロイ!終わりだよ」

ていた。 言われたロイはようやく剣の動きを止めた。 の場に座り込んだ。 周囲の空気はいつのまにか涼しい風 剣を地面に刺すと、 へと変わっ そ

まさか3週間でこなせるとは思ってもみなかっ たよ

ギンはにこりと笑い、 ロイはそれに笑い返した。

楽勝っス・ •

イは疲労からか、 その場に倒れこんでしまった。 ギンは ロイ · の も

とへ行くと、剣を拾った。まだかすかに熱が残っている。

「こんなに早いとは思わなかったな」

ギンは複雑そうな顔をする。 そして自分の足元に倒れているロイを

担ぎ、中に入っていった。

ロイが出された課題をやり終えた次の日。

「今日も晴れてるな」

雲がなく、しばらくこの快晴が続くことを示唆していた。 かといった時分で、まだまだ薄暗い。西向きの窓から見える空には ロイは自室ベッドの上で目を覚ました。 太陽が上がるか上がらない

ベッドから起き上がると身体の節々がこわばっていた。

首をひねる。そこから先の記憶がない。 「えっと・・ ・。確か俺は課題をやり終え・・ まさかあれは夢だったのだ ・たんだよな?

あ、やべ。昨日の夕飯作ってねえや」

うと思いなおし、 雑用が脳髄に染み込んでいた。 考えるよりも先に朝食の準備をしよ 厨房へと向かった。

題はちゃんと達成されたらしい。 それから数時間後、 ンの話を聞いていた。 への期待で胸を膨らませていた。 ロイはギンといつもの野原にいた。 ロイは少し遅い達成感と次の修業 ロイはおよそ真剣な目つきででギ どうやら課

「じゃあロイには次の修業に移ってもらう」

まった。 その声があまりにも不快だったので、 ギンがそう言いかけたとき、 森の中から低いうなり声が聞こえた。 ロイは思わず身震いをしてし

その顔を見て、瞬時にこの声が目的の魔獣のものだと察した。 見るとギンの表情は先ほどのロイ以上に真剣なものになってい る。

「ロイ、ここにいるんだ!」

た課題をクリアしたのだから連れて行っても助けになる事はあって 声を上げたギンに対 も足手まといにはならないはずだ。 してロイは眉をひそめた。 自分はギンが指定し

「俺も行きます」

手ではない。 を見せることは大切なことだし、幸い魔獣ならそれほど手ごわい そのロイの強い目にギンも揺れ動かされてた。 離れて見ていれば巻き込まれることはないだろう。 ロイに魔獣との戦

「わかった・・・来なさい」

ギンはそういって駆け出し、 長い長刀が隠されていた。 かったが、はためいたギンのローブの中にはロイのものより遥かに ロイもそれに従った。 今まで気付か

源の方向へと向かった。 道の途中で合流したヘルゲンたちと共に、 ていた。 3人もギン同様に真剣そのものの表情で走 再度うなり声 が響い た

•

た。 届くことのない距離で、 からああいったものを倒しに行くのだ。 必死に走りながら、 ロイ 村人を確実に殺せる水鉄砲を撃つ魔物。 はあの時の光景を思い出し 自然にこぶしに力がこもっ てい た。 今

る事にした。 ったのに、これだけの距離走っただけでもう追いつけなくなってい 気付けばだんだんと4人の背中が遠のいてい ロイは考えるのをやめて、 ギンたちについていくことに集中す た。 足腰には自信が

るだろう。 これだけの面積があれば人が一度に何百人も泊まれる宿でもつくれ こそぎ倒された形跡があり、そこだけ見晴らしがよくなってい その場所は、 家からさほど離れていなかった。 樹は明らかに力 ් ද で根

の男が立ってい しかしそこには魔獣の姿はなかっ るだけだった。 た。 広大な空き地 の真ん中に

ここに大きな獣がいたのだが、 知らな か ?

ゼェゼェ 言うしかなかっ ンが着くなり、 息など微塵も切らせていない声で尋ねた。 たロイは無性に悔 くなる。 後ろで

てきた。 男はこちらを振り向き、 切り株を気にしながらツカ ツカと歩み寄っ

に駆け寄ってきたのだ」 私はこの近くに住んで いる者だ。 大きな唸り声がし たので、

淡々とした、 めから無いかのように変わらない。 感情を全く感じさせない口調でそうい つ た。 表情は初

「何で急にいなくなっちまったんだ?」

ていないだろう質問を全員に向かって投げかけた。 ヘルゲンは空き地の中央まで駆けていくと、 およそ誰も答えを持つ

な獣で角が馬鹿でかいんだ・・・」 「おい、あんた、何でもいい、なんか知らないか?大きな牛みたい

位置は先頭からロイ、オルソー、アンゴラ、ギン。そしてその後ろ 所の後ろを指差した。 相も変わらぬ単調な声でそう言うと、ギンたち4人が立っている場 とりあえず私の家に来ないか?ここを抜けたすぐ向こうにあるんだ」 いや、 ヘルゲンとなっている。 すまないな。 ギンが了解して、来た道を戻り始めた。 わからない。しかしここにいても仕方が 今の な

2、3歩近づいた。 そしてギンが一歩踏み出した瞬間。 のように固まった。 そしてその顔のまま振り返ると、 男の口元が卑しく曲がり。 ヘルゲンへと 能面

「・・・・・・つ!!」

ていた。 ら突き出された鋭 その時ヘルゲンが見た顔は先ほどまでの男とは違っていた。 のように尖り、 鋭い歯がむき出しになっている。そして視界の左か が爪は、 ヘルゲンの喉元を寸分の狂い も無く狙っ 耳は槍

少量の血を残して空を切る。 オルソーはそれを見た瞬間、 反射的に体を右側に寄せた、 その爪は

お頭っ!!」

その声に振り返ったギンの目に最初に飛び込んできたのは尖っ 耳だった。 それに気付くと同時に右手を男の方へと突き出した。

つ

ギンの叫び声とともに風が巻き起こった。 ぐわっ」 その風が男を吹き飛ばす。

全く異なっていた。 流れる血を口元で舐めながら振り向いた。 声を上げたその男はその先にあっ 禍々しく、牙と尖った耳を持っている。 た樹に顔からぶつかっ その顔はさっきまでとは た。

だな!」

ヘルゲンは、首の右側を手で押さえながら言った。

男はその問いを待っていたかのように瞬時に答えた。 たことは無かった。 特徴を残された書物で知っていた5人も、妖怪が現れた話など聞い 「なぜ、妖怪が・・ ご名答。俺の名はガイガン。・・・・・妖怪だ」 もちろん妖怪という存在を目にしたこともない。 ? だが、 妖怪

ギンが呟くと同時に、ガイガンは言った。

「まあ、 最後ぐらい疑問もなく死にてえよなあ。 教えてやる。 魔天

表情も声の感情もさっきまでとはうって変わって楽しそうだ。

「マテンテンキ?」

聞いたことのない言葉に ロイは眉をひそめる。

ある長い爪はなんでも切れそうなくらい鋭い。 て察したらしい。 ロイをはじめ、そこにいる誰も意味が分からなかった。 知らねーのか?どうやら後釜が育たなかったらしいな。 ガイガンは呆れたように手を広げた。 その指先に その顔を見 人間は

るとはな。 のが魔天転器だ。 「本当にしらねえのかよ。 がな。 • おかげでこっちに来たのは俺だけかよ」 ・よりによって魔界の晶霊石の石切り場で転換が起こ 唯一、霊石である晶霊石だけはこの影響を受けな 魔界とこの世界を転換させる媒介となる

燃えたのであればその焼跡が、 疑問には思っていた。 平坦になった森、 吹き飛んだのであれば残骸があたり 爆弾で吹き飛ばされた家々。

時 見の品を取ってくることもできなかった。 のように消滅していた。 に散らばっているはずである。 その残骸はどこにもなかった。 だから村人を弔う事は出来なかったし、 しかし、 まるで世界から切り取られたか ボンゴを最後に見に行っ

塔と、 とかそんなレベルの爆発ではない筈だ。 それにあの爆発。 中にいたロイは無事だった。 村を吹き飛ばすほどの爆発にもかかわらず、 強固な石造りの中だから大丈夫 あ

その疑問はガイガンの答えによって解き明かされた。

が晶霊石でできていて、その中にいたからということだ。そして目 つなぐのが魔天転器。ロイがその影響を受けなかったのは、あの塔 妖怪の住む魔界というものがあるらしい。そしてそれとこの世界を の前には代わりにこちらに飛ばされた妖怪がいる。

魔界から飛ばされてきた妖怪が生きているのならば魔界に行っ 「じゃあ、 向こうに飛ばされた人達は、生きているのか?」 た人

々も生きているということになる。

様子を逐一楽しんでいるようだ。 れは意地の悪い笑みに変わる。禍々しい表情をした妖怪はこちらの ロイが声を上げるとガイガンの目がロイを睨んだ。 しばらくし そ

こで俺 腹の減ってるやつしか食わないけどな。 だが、魔界じゃあ人間は餌か奴隷だ。 飛ばされても生きていられる人間はいる。・・・ 「俺は親切だから懇切丁寧に教えてやるよ。 の餌だ 人間はまずいから俺みたいに まあ、 確かに俺と同じように どの道お前たちはこ 実例もあるしな。

が話を元に戻すべく聞いた。 希望にすがる表情から一気に表情の暗くなっ たロイ の前に出たギン

ここにいた魔獣を食っ たのはお前だな」

ガイガン の口元が大きくつり上がっ た。

獣じゃ なきゃ 美味かったな、 でも俺まだ腹減ってるからよお、 あいつは。 やっぱ魔物や お前らの肉分けて 人間は駄目だ。

ていた。 弟は一斉に飛び出すと、次の瞬間、ガイガンを正面と左右から囲っ そう叫んでロイたちのほうへと飛びかかってきた。それを見た3兄 りかかる。 に見失っていた。 それはあまりにも突然の出来事で、ロイは3人の姿を完全 既に剣を抜いていた3人は、 一斉にガイガンに斬

ていた。 はそこにはなかった。着ぐるみのような上皮だけを3本の剣が貫い **ようだった。いや、ようだった、ではない。** 3人が切った剣には手応えは全くなかった。 「なにっ!?」 事実、ガイガンの肉体 まるで布を切っている

「ガツ・・・!」

的の持ち合わせている鋭い爪の仕業だった。 3人がほぼ同時に地面にうつ伏せに倒れた。 何か刃物に裂かれたようだ。 いや、刃物ではない。 服に血が滲ん ガイガンが生得 でい

なるほど、 この皮が、君の能力らしいね

歩ほど離れたところにいつのまにか立っている。 ギンがいつのまにか倒れている3人の近くにかがみ込み、 もその動きは見えなかった。 所空いている皮を手に取った。 ガイガンはというとロイの左、 ロイにはまたし 穴が三箇 5

ガイガンにはギンの気迫が伝わっているのか、 た表情は消えている。 先ほどまでの浮つ l1

「ああ」

ガイガンの顔にはちゃんと皮が再生されている。 分はただの穴だがそれ以外は髪の毛も耳もある顔そのものだっ 音も大した抵抗もなくガイガンの顔から剥がれた。 おもむろに自分の顎の下の皮をつかむと、 軽く引っ 目や鼻、 張った。 口の部 そ れ は

ギンがガイガンの皮をつかんだまま立ち上がり、ガイガ だけで切り裂かれてしまうように鋭かった。 だったが、 向き直った。 そいつらは妖怪にも魔物と同じく能力があることは知ってるよう 俺の能力を" その目はいつもの優しさなど微塵もなく、 人間に化けること" だと勘違い 目があった ンのほうへ したな?」

「お前には上皮を自在に操る能力がある。 そうだな?」

「ご名答!」

音が聞こえた。 ガイガンの体は一瞬ぶれて、消えた。 次の瞬間には3人から5メートルほど離れたところで打ち合う 、染まっ た爪が打ち合っている。 見ると、ギンの刃とガイガンの短刀 ギンは剣を抜くと、 ロイ の耳に3度ほど打ち合 のように長く鋭 同様に消

う音が聞こえたところで、ガイガンの声が聞こえた。

?知ってるぜえ。 「さっき俺を吹き飛ばした風。あれはアンタのセイレイジュツだろ もう一度見せてくれよ」

も止まらぬ動きを止めて構えた。 ロイには意味がわからなかったが、 ギンはロイの目の前でその目に

「口オオオオ」

低い声を出し、剣を大きく横に振った。

「裂波!」

空気が泣いているように震えるのを感じた。

正面にあった樹が次々と背を短くし、広場はさらに大きくなった。 一瞬の出来事だった。ギンの剣が空を横薙ぎに切ったかと思うと、

「ハア、ハア・・・・・」

ギンは肩で息をしている。 えた。だが、その「何か」が全く解らない。 めて見た。しかし、ギンのことを気遣うよりもまず混乱していた。 ロイの目にはギンの剣から何かが出て、それが樹を薙いだように見 ロイはこんなに苦しそうなギンの顔を初

「終わった」

出ている。ギンはロイのほうを振り返った。 ガイガンは背後に広がる木々と同様に、 声をかければい 方に近付く。だが、 仰向けに倒れている。その境目からは真っ赤な血が止め処なく溢れ いのか決めあぐねていた。 ギンはまだ厳しい表情は崩しておらず、 胴体が真っ二つに裂けて、 すると突然、 ようやくロイはギンの なんて

ああ、終わりだ」

ガイガンの声が聞こえた。

ドスッ!

赤く染まったガイガンの爪が、 ロイの胸のの前で止まった。 見上げ

ると、 にその血を吹きかけ、 口から血を吹き出したギンが立っ 横向きに倒れた。 ている。 そして、 ロイ

「ヒッ」

尻もちをつきながらその顔を見た。 外の何物でもない。 その後ろにはガイガンが立っていて、 口元の歪みが示す感情は快楽以 ロイを見下し てい ්ද

「ロイ、逃げろ・・・・・」

戦闘力。 が脳だろうが俺は自分自身の複製を無限に作り出せる。 ギンの声がかすかに聞こえた。 ろか、その目をガイガンの顔からそらすこともままならなかった。 これが俺の能力、 イジュツが凄くても人間ごときが妖怪にかなうわけがねえんだ 生まれながらにして存在する人間との差。・・ 『擬態』だ。 皮だろうが目だろうが心臓だろう しかしロイは恐怖で、 立つことは 加えてこの いくらセ

その言葉はいま自分が腹を貫いたギンに対し てすぐにその爛々と光る目をロイに向けた。 のものだった。 そし

「さあ、お前から食わせてくれ」

ガイガンの顔が歪んで見える。恐怖からか、 ガイガンは表情の変化のなくなったロイに一歩近づいた。 収集をやめ、やがて何も見えなくなってしまった。 を開けると、 鋭い歯でロイの頭を包み込もうとした。 ロイの目は次第に光の

その瞬間、 目もくらむほどの閃光が、 ロイの額から放たれた。

ガイガ 赤く浮かび上がっていた。 光が放たれた額には、 思えない。 イを見た。 ンは3メートルほど後ろに飛びのき、 目の焦点は合ってい まるで糸に操られているかのように立ち上がってい 中央を境につくられたシンメトリー ない、 虚ろな目。 ゆるりと立ち上がる口 意識があるように ් ද

双竜のパターン、まるで・・・

その先を言うよりも早く、 イのものとは似ても似つかない低い声が響いた。 ロイの体の右手が挙がり、 ロイ

\_

た。 それは熱気だった。 太陽に近づいたかのような熱が周囲を包み始め

「バカな・・・!!」

ガイガンは明らかに動揺していた。 されたガイガンの額から、 いだけではない。 イの足元にあった切り株が干からびていった。 大粒の汗が流れている。それは熱気のせ 熱はどんどん高まっていく。 その眩しい光に照ら

「そんな、 バカな。 こんなガキにカオス様のお力が

熱はロイを焦がさない。

\_

低い声で叫んだ。 おもむろに 風穴が乾いてゆく。 ロイはギンへと近づき、 ロイは立ち上がり、 そして傷口から溢れていた出血が止まった。 何かを呟いた。 右手をガイガンのほうへとかざすと、 手をかざすと、 腹に開い た

.!

「なっ!」

れた熱。 掲げられたロイの右手が陽炎で見えなくなった。 熱の塊が、 それがロイの右手を離れてガイガンのほうへ移っていった。 ガイガンの核、 脳を貫き、 全身を焦がした。 あまりのも高めら

悲鳴が轟く

生きてる」

らない。 眠っていたかわからない。 そもそもどうして眠っていたのかもわか ロイはおよそーヶ月間慣れ親しんだ部屋で目を覚まし とにかく寝すぎた時によく怒る頭痛がした。 た。 どれだけ

「よっと」

うじて手足は動いたので、 気合いを入れて上体を起こそうとしたが、力が入らなかった。 へと着地させた。 体をよじりながら足を流し、 ベット . の 下 かろ

「つう」

れ始め、 るかのような感覚。しかし、時間が経つにつれてそれにも次第に 両足へ体重を乗せると痛みが走った。 いだな、 座りながら足踏みができるくらいにはなった。 とひとりごちる。 まるで足が体を支えることを拒絶してい なんだからここに来た日み

コンコン」

のだと思っていたが、 ドアがノックされた。 入ってきたのはギンだった。 てっきり3人がロイを起こし に入ってくるも

あれ?お頭妖怪にやられたはずじゃ・・・」

いべ と自体がおかしい。 記憶がフラッシュバックする。 の証拠にギンは少しだけ腹を庇うようにしていた。 たら庇って歩けるようになるはずがない。 確かにギンはあの妖怪、ガイガンに腹を貫かれたはずだ。 ギンを貫き、身体の前で止まった鋭 そもそも生きているこ だが、 腹を貫か そ

見ていた。 いつものロー ブをまとっているギンはたいそう驚いた表情でロイ

ロイ、 目が覚めたのか!?

その言葉の意味がよく理解できなかった。 しれない。 まだ頭が廻ってい ない の

ゃなかった。出血は多かったけど、 くぐらいがちょうどいいのさ」 ヘルゲン達なら、 大丈夫だ。 傷の一つ一つはそれほど深いものじ 元々血の気が多いから、 少し抜

た。 ギンはふっと笑う。 しかしロイはその言葉に笑い返す事はしなかっ

が思い起こされる。 に自分を飲み込むべく開けられた妖怪の大口と、 ロイの脳では焼きついている光景が繰り返し再生されて 迫りくる死の恐怖 いた。

「夢じゃなかったんだ」

ロイの考えを察してギンが言い放った。

「ああ、現実だよ」

なく思った。 その光景を再度思い出す。 そのたびに何もできなかった自分が情け

「すいませんでした、俺足手まといになってばっかで・ いや、そうじゃないかもしれない」

理解できず、顔を上げた。 すっかりうなだれて謝罪したロイに言った。 ロイはその言葉が全く

ギンは真剣な顔をして顎に手を当て、ロイを見ていた。

ガンを吹き飛ばしたあの風、 そういえばそんなことを言っていた。 しているんだろう。 あの妖怪が言った"セイレイジュツ"って覚えているかい そして木々を切り倒したあれの事を指 ヘルゲンを襲おうとしたガイ

「はい」

「実は、 君もセイレイジュツが使えるんだ」

は ?

を合わせた。 をかばいながら腰掛ける。 ロイは目を丸くして、ギンの顔を見た。ギンは傍にあった椅子に腹 背もたれに寄りかかりながら顔 の前で指

風も日も水も光も全てのものには精霊が宿っているとされてきた。 少し説明するよ。 今ではありえないとわかってるけど、 太古には、

た そして、 から"精霊術"と呼ばれている。 人間はそれを自在に操る力を持っている事を発見した。 そして、 君は、 先日それを開眼し

だった。 だと思い、ギンの真剣な表情を見なければ吹き出してしまうところ まったく身に覚えがないロイは、ギンが自分を謀ろうとしてい したのか、 だいたい全く説明になっていない。そんなロイの意図を察 ギンは続ける。

ギンは一呼吸置き、 のことだ。 「君は夢中で気付かなかったかもしれないけど、 あまりの熱気で私は君に近づくことすらできなかっ 続けた。 剣を振る訓練の時 た

うね。 えるわけじゃない。開眼のためには類稀な集中力が必要とされ 開眼するための鍛錬なんだよ。 というよりは精霊術を開眼する才能 そのギンの皮肉はどちらかというと自分自身に向けられている気が 命の危機も感じずに幸せに暮らしているような人々には難しいだろ があるかどうかを見極める試験かな。 もちろん精霊術は誰にでも使 重さの剣を2時間も振り続けることなど不可能だ。 「そしてもうひとつ、まだ厳しい訓練も積んでいな だって、彼らは必死に強さを求めることなんてないんだから」 実はあれは術を い少年が、 . る。

「という事はお頭も?」

月はかかる」 剣を振り続けた。 にも早く開眼させるとは思わなかった。 く熱によって全身の筋肉を活性化させたのだろう。 「そうだ、 ロイの言葉に自嘲気味な笑みをやめて、深くうなずいた。 私も師の下で同じ鍛錬を行い、風によって力を使わずに 全身から熱気が発せられたという事は、 正直驚いたよ。 しかし、こんな 本当は2ヶ 君は恐ら

「え?」

確かには一ヶ月と言われたはずだ。

あの修業じゃ 『あの』 修業は一ヶ月なんだよ。 効果はないから別の方法で開眼させるんだ。 水" なんかだ

とも、 れてしまった。 あまりにもぶっ飛んだ話で、 いないのかもしれない。 大抵の場合はその時点で諦めることが多いらしい ようやく思考が追い付いてくる。 なぜこんな説明をされているのかを忘 さな 追い付いて けどね

「それで『そうじゃなかったかもしれない』 って言うのは?

ギンは指を鳴らした。

うね。 ていた。 ピーエンドが待っている物語じゃないんだから」 「そう、 えないし、仮にあったとしても都合よく発動するはずがない。 君の小さな身体に妖怪を焼き尽くすほどのエネルギー があるとは思 意識の内にやったのではないかと思っている。 の仮説が思いつかない。しかし、それもありえないことなんだがな。 あの日は晴れていたし、あそこは人も通らな それだ。 あれは自然の雷に打たれでもしない限り、焼かれたんだろ 私があの広場に目覚めた時、 と言うか、それ以外 あの妖怪は炭になっ いから、君が無

「お頭の傷は?」

ギンは首を横に振った。

こうして全員生きていたわけだし」 り痛いけどね。と言うわけで、何か゛ わからない。 目覚めたら動ける程度には回復し 運が良かった" こ て い た。 と考えよう。 まだかな

急に笑顔になり、手をたたいた。

「楽天家すぎだ!」

えても結論が出ないものは仕方がない。 使われていなかった喉をいきなり動かしたからだろう。 思わず突っ込んでしまった。 同時にごほごほと咳き込む。 しかし、 しばらく

あっ、 そういえばあれ から何日経ってるんスか?」

「ん、ああ、3日だよ」

起きていれば・・・。 ロイの頭の中で何かが崩れ落ちる音がした。 肉の焼ける匂いが頭 の中でこだまする。 せめ もう一日早く

「あの日の夕食になる予定だった、獣の肉は?」

ガ イガンが現れた日の午前中にヘルゲ ン達が狩ってきた獣の肉だ。

今夜は御馳走だとみんな手をたたいて喜び、 いように保管 していた。 食卓に並ぶまで腐らな

ギンは悪びれ ない様子で笑顔をロイに向けた。

はきつかったね。 が早いから私が2人前も頂いちゃったよ。 もすぐに目覚めたとはいえ、 あれね~、美味しかったよ、ごちそうさま。 幸いにも消化器官は傷ついてなくてよかったよ。 食欲もあんまり無さそうだったし、 いやぁ、この腹で2人前 ヘルゲンたち

・うん、 おいしかった」

そんなあ

見えた。 吊っていて、オルソーは右目付近を包帯で隠している。 頃にはロイは立ち上がって歩けるくらいにはなっていた。 ギンの後 話している間に3日のブランクの勘が戻ってきたのか、 目立った外傷はないが、 に続いて居間に出ると、 ロイはがっくりと肩を落とした。 3人は机に座っていた。 服の下にしっかりと包帯を巻いているのが 久しぶりの肉だった ヘルゲンは右腕を のに アンゴラは 機嫌が直

「おお、 ロイ、 起きたか」

無事か?」

りだが。 感じなのだろうな、 なにもできなかったロイを攻めるわけでもなく、 ロイには兄弟はいなかったが、兄がいるならばきっとこういう と思った。 もっともこんなふけ顔の兄などお断 慰めるわけでも

自分の椅子に座った。 ロイは少しにやけ ながら特に何を言うわけでもなく、 ギンに続い 7

沈黙が一瞬流 ロイを除く4人の腹の音がそれを打ち壊した。

そういえば俺も腹減っ

かけ たとき、 8つの眼が全てロイに注がれてい るのを感じ

. . . . .

えつ、 俺え?3日昏睡状態にあってたった今目覚めたばっ かだぞ

緒で、恐ろしいほどの血のつながりが感じられた。 手で目を覆い、アンゴラは胸を押さえた。そのタイミングは全く一 4人を見回した。 ヘルゲンは、痛そうに右手を庇い、 オル は右

「わざとらしっ!」

ぼそっと呟いたロイの声を合図に、

「イタタタタタ」

各々の怪我の箇所を押さえながら、 ステレオで言った。

「ちぇ、・・・お頭は?」

っ た。 ロイがギンの方を向くと、 やはり輝かしい笑みを呈しながら言い放

何で私がお前たちの飯を作らなくちゃならないんだい ?

· · · · · · ·

米を湯の中に入れ、 結局ロイが昼飯を作ることになる。 野菜添えて味噌で味を調えた。 とんだ雑用根性だっ 炊いた

いやあ、やっぱりロイの料理は美味しいなあ」

そうギンが言ったところで気づいたが、

「あれ?昨日までの飯は・・・?」

一斉に目をそらされた。やっぱりか。

「交替で作ったんだろ?」

目はそらしたまま、 木のスプーンで飯を口に運び続けた。 ギンは食

べ終わると、

「いやあ、やっぱりロイの料理は美味いなあ」

ロイがじろっとギンを睨んだ。

「あっ、そうだ、精霊術のことだけど」

ギンが唐突に話を振った。 という言葉に敏感に反応したロイは、 100%逃避のためだと思うが、 そのことには気付かなか 精霊

知人に" 君の **熱**" の術者がいるから手紙を書いておいたよ」 の術の修業には同じく **熱**" の師が必要だ。

ギンは新聞や手紙やらは伝書鳥で行っている。 ことが多い。 頻繁に紛失するらしいが、 スピード重視という事らし 大抵は鳶や鷹を使う

そういうと、 に入り、何かごそごそやりだした。 「多分結構時間がかかるだろうから、 思い出したように立ち上がり、 それまでは 剣と指輪を出した部屋

ボフ

「うわっ

扉からほこりが吐き出された。 どうやら中は相当汚いらしい。 見た

•

くない。

掃除をしたくなってしまうから。

染み込んだ雑用根性が取り除かれる日は来るのだろうか。

と言う手書きの文字が見て取れた。 きた。それを机に置くと、辛うじて表紙の「 2,3分ほどして、ギンはなにやら色あせた分厚い本を持って出 r e a l w o r l d て

もっとも、これは写本だけどね。読みなさい」 「これはジエルトンが残したもので、 私たちの教典にもなってい る。

は 稀少だったため、 ロイの顔はさっと曇った。 んに字は教わってはいるが 本を読めるほどじっとしていられなかった上に、村に本自体が 今までほとんど本など読んだことはない。 幼い頃から家にいるのが苦手だっ ばあち た 1

マジで全部読むんスか?」

マジで全部読むんだよ」

このクソ分厚い本を?」

このクソ分厚い 本をだよ」

間を空け イは深 く溜息をついた。 ギン の返答が有無を言わせないことを物語っ ていた。

はいっていった。背後から、くつくつと笑う声が聞こえた。大声で言って、立ち上がり、本を脇に抱えると、大またで部屋へと 「わかりましたよ、ええ読みます。読みゃいいんでしょ!」

ながらゆっくりと読み始めた。 文字が出てきた。 表紙をめくると、 不本意だったが、 予想通りの黄ばんだ紙と、 ロイは祖母の教えを思い起こし 黒いインクの手書きの

「この世は5の種族からなっている。 すなわち人間、 妖怪、

持つもの。 を用い、魔獣は用いない」 人間とは地上に生き、術を使うもの。 獣は世界に生き、 4の種以外の全てを指す。 妖怪とは地上に生き、 魔物は能力 能力

などが基準になるらしい。 魔獣と獣の定義は曖昧だと注意書きがされていた。 生命力や凶暴さ

とが記されていた。 る事に気がついた。 ここまで読んで、ようやくロイは自分がこの本に釘付けになって この本には、 まさしくロイが今一番知りたいこ l1

目次にある世界の地形のことがロイの興味をそそったが、まずは 随分汚れていたので、写本自体が相当古いものなのだろう。 その下は、 について読むことにした。 目次のようなものになっていた。 写本と言ってい

は書かれていなかった。 ら備わっているものではないらしい。ギンが「開眼」と言っていた のも頷ける。 のほかに" は妖怪や魔物の持っている。 中には開眼できない者もいるらしく、 光 など多種多様だ。 能 力 " しかし、 と違って生まれたときか その詳しいこと 風"や"

には治ってい ようなことも多かった。 ほかにも戦術なども参考になっ のマスターを前提とした内容であっ ないことも考え、 ただ、 た。 後回しにする事にした。 「先に体術を学ぶべし」と書い 特に剣術については、 たので、足がまだ完全 知らな

、ふう

術の章を眺め始めた。 ところも多いのだが、 ロイは天井を仰ぐと、 ロイは軽く伸びをすると、 溜息をついた。 一通りは読み終えた。 何か簡単にできる事がないかと、 読解できなくて読み飛ばした 本と言うより事典に近

「入るよー」

ロイの返事も待たず、ギンはドアを開けた。

「な、何してるんだい?」

ロイは床に寝転がっている。 仰向けの姿勢から左右交互に向きを変

え、その都度掌で床を叩いていた。

「・・・受身の、練習です」

ロイはがばっと起きて、 床に座ると、 少し気恥ずかしそうぼそっと

言った。

ロイは「 ないので、 の本貸すから、うまく使うといいよ」 「ロイはせっかちだから、 「ああ、 一通りは」と言うと、立ち上がった。 なるほど、 ゆっくりとではあったが、 いや、大事だよ、 剣術から入るかと思ったよ。 もう痛みはほとんどない。 受身は。 まだ足が本調子じゃ もう読んだのかい そ

「はい

ギンはニッコリと微笑むと、 両手を重ねて腹の上に置いた。

「ああ、そうだそうだ。お腹が空いたなあ」

「またスか・・・・・」

ギンの表情は変わらない。 に来たとのかと思えばそう言う事か。 それは依頼ではない。 ロイは心の中だけで嫌味を言 強制だった。 何し

「はあ・・・わかりましたよ」

屋を出た。 ロイは胃にも穴を空けられればよかったのに、 ギンは部屋のドアを閉めて、 微笑みながらロイ と思い ながら先に の後に続

あろうことか爪の垢を取りながらという適当っぷりだ。 食後に、 そうそう、 ロイが一番気にかけている事を適当にギンは言い放った。 ロイの先生なんだが、 1週間後に来るらしい」

「どういう人なんスか?」

今度はお茶をすすりながらギンは言った。

ら5本の指に入るだろうね」 「カルコンってやつだ。私とは幼馴染でね。 多分" 熱 " の術だった

どうかはわからなかった。 ジエルトンの規模を知らないので「5本の指」 が果たして凄い のか

「じゃあ、お頭はどれぐらいなんスか?」

「さあ」

軽く流された。

「カルコンは確かに術者としては凄いけど、 でもなあ

何事もなかったかのように受け流す。 さすが" 風" の術者だ。

「でも?」

ロイは控えめに聞いた。

「最悪、死ぬかもよ?」

「えつ!?」

ギンは最後に最も聞き捨てならないことを言い置いて、 立ち上がっ

て自室に入っていった。最後に振り返った。

「じゃあ、体術がんばれ」

バタン

誰も物音を立てない部屋に、 扉を閉める音だけが響いた。

1人残されたロイはつぶやく。

・・・まじかよ」

とオルソーは近くに座って眺めている。 何も持っていない両腕を構え、ヘルゲンと対峙していた。 靴が砂を踏み しめる音が響いた。 それ以外の音は何もない。 アンゴラ ロイは

げ、 繰り出した。 のになる。 ロイが砂を蹴り出し、5歩でヘルゲンの間合いに入り、 それを避けると、 ヘルゲンは少し口をほこばせながら、頭を少し後ろに下 身長差でそれはフックというよりもアッパー に近いも 腕を下げ、 右アッパーを返した。 右フック

. . . . . . . . . . . . .

置に戻った。 豪快に音が鳴った。 ロイはよけるために後ろに飛び、 ほぼ元い た位

のタイミングを合わせて右ストレー もう一度踏み出すと、 ヘルゲンへ向かって突進する。 トを繰り出した。 ヘルゲンはそ

· · · · · · ! ? J

けた。 込んで拳を避けていたロイはその隙を逃さずヘルゲンに足払いをか その右手は空を切った。 刹那、 ヘルゲンはロイ の姿を見失う。 沈み

「おわっ!」

倒れる勢いを使って背負い投げした。 ルゲンの体は前のめりに倒れそうになる。 それをロイは支えると、

ルゲンは地面に仰向けに倒れた。 そのままの姿勢でロイを見た。

「ぶはははは、負けた」

「勝った!」

勝49敗である。 ロイは嬉しそうに顔を綻ばせている。 ちなみに対戦成績はこれ で

「随分いい動きになったじゃないか、ロイ

突然出てきたギンはロイを称賛した。 のか ۱۱ ۲۱ とかロイを馬鹿にし続けていた男である。 ちなみに昨日までは、 まだ、

聞きしてロイが言うと、 雰囲気だけでなくしぐさまで年よりじみている。 勝ったっスよ、 お 頭。 ギンは腰に手を当て、 これで剣術教えてくれるんスよね!? バキバキと鳴らした。

まあ、 ぶっちゃけめんどくさいけど、 約束だ、 教えよう」

「ぶっちゃけすぎです」

「じや、 昼飯の後にしよう。 さあ、 今日は何?」

ロイは、 後ろの3人を見ると、一斉に「あいたたたた」と、 それぞ

れ怪我していた箇所を押さえ出した。

「うそつけっ!さっき人殺しそうなパンチだったぞ

「あれで肩い ったんじゃねえか?アンゴラ、 診ろよ」

「折れてる」

小芝居を始めた。

は重宝することなのだが、 ちなみにロイの料理の腕は他の誰よりも上がっていた。 何となく悲しくなってくる。 特技として

自身を守るためのものだ。 まずひとつ言っておく、 それだけは肝に銘じておきなさい」 剣は何かを傷つけるため のも のじゃ l,

ギンが真剣な表情で言っ た。

はい

ロイもそれに答える。

実践剣術は、 型がそう多くはない。 達人になればなるほど勝負は

一瞬でつく」

ゴクリとロイは唾を飲んだ。 真剣な表情なだけに修業へ の期待が高

まる。

ギンは相変わらずぶっちゃけながら家の近くの樹の幹を叩 私は相手なんか したくないから、 この樹を斬りなさい

はあ

なんか自分ひとりでもできそうだ。 とはいえ、 結構太い樹だっ た。

「お頭、まず手本を見せてくださいよ」

ギンは心底嫌そうに剣をローブから出した。 細身の剣だ。 ロイのものよりずっと

その樹の前に立った。そして剣を抜いた

シュン

に ギンが剣を納めると、 ロイにはいつ斬ったのかすら見えなかった。 その樹は切り株になっていた。 あまりの早業

· · · · · · ·

「まあ、 ことだね。 はっはっは」 こんなところだ。 実践剣術についてはカルコンが教えてくれるよ。 とりあえずは一振りで切れるようにする 頑張っ

ギンは笑いながら踵を返し、 家の中へ入っていった。

· · · · · .

な形だったと言われた方がしっくりくる。 ロイは倒された木を見る。 ロイにどうしろというのだろうか。 滑らかな切り口で、 だいたい手本にはなって むしろもともとこん

「はあ、はあ」

えている。 みが入っているが、 数時間後、 ロイは自分の目の前にある大木を眺めた。 どの太刀筋も4分の1もいかないところで途絶 何本も切れ込

「無理だろ、これ」

どさっと音を立てて、 から刃を入れると、 息を強く吐いて立ち上がり、 ないので、ギンはトリックでも使ったんじゃないかといぶかしみ始 掌を見ると、 案の定、 また肉刺がはぜて、 ロイは芝生の上に仰向けに倒れた。 刃はほんの少しで止まった。 地面に刺してあった剣をつかんだ。 血まみれになっていた。 右

・・・駄目だな、それでは」

背後から声がした。 返ると、 背の高い男が立っていた。 低く腹の底に響くような声だ。 色も黒く、 どことなくガイに ロイが後ろを振

違う。 暗く濁った眼をしている。 似ている。 少なくともガイはもっと表情豊かだ。 ロイは目をこすっ た。 しかし、 やっぱり自分の父親とは 目の前の男は無表情で

男は一回そこで区切った。 「脇をしっかりと締め、 下半身を安定させる。 そして

剣を研げ」

らに叩きつけすぎたということだろう。 らくもらった時から相当刃こぼれしていたであろうが、 その言葉にハッとして剣を見ると、 刃がボロボ 口になっ ていた。 むやみやた

・あっ!」

ロイはそこで始めて突然現れた男の正体に気が 向

「もしかして、カルコンさん • • ですか?」

「そうだ。 お前がロイか?」

えっと・・ •

ロイがカルコンの雰囲気に息苦しさを感じていると、 家からギンが

出てきた。

堅苦しい雰囲気をぶち壊し、カルコンと挨拶を交わした。 やあ、 カルコン。よく来てくれたね。 ああ、 その子が口

「ギン。 久しいな。 魔獣退治の任務は終えたのか?」

があって、任務が出されるのだろうか。 と言う言葉が気に掛かった。「ジエルトン協会」 みたいなの

ああ、 妖怪が出てきてやばかったけどね

ギンはまったくやばそうにもなく、肩をすくめて答える。 いたカルコンは表情を変えずに眉を動かした。 それを聞

妖怪、 だと?」

ああ、 なぜか知らない けど灰になってね。 まあ、 倒 したんだろう

それを聞 ロイには身に覚えのないことだ。 たたまれなさを感じて、 バて、 カルコンがちらりとロイのほうを見やっ 目線を樹の方に戻した。 未熟な自分がやっ たはずがない。

「どうかしたかい?」

それに関係あるのはロイだが、 積めばあとは独学でも何とかなるか。 カルコンが少しだけ微笑んだ。 ロイはギンの質問に頷いた。 半年か・・・。 すまないが、 いせ、 用ができた。ここには半年ほどしかいられない」 なんでもない。 厳しいな。 修業は完成しないな。 カルコンはギンに向かって言った。 旧友の無事を喜んでいるのだろうか。 無事で何よりだ」 • いいね、 だが、基礎さえ ロイ」

父親に似た無口無表情な男。 つ動かさず、 なり、ロイは6人分の夕飯を作るはめになった。カルコンは表情1 剣の研ぎ方を教わり、研いだ。 3人とカルコンは既に見知っていたらしい。 何の感想も言わずにロイの手料理を平らげた。 それが師匠への第一印象だった。 その後、修業は明日からという事に ロイはすぐさま3人に

思う?」 修業を始める前にひとつ聞きたい。 お前は今の異変についてどう

ったが、 唐突にカルコンが言った。 正直に答えた。 ロイはその言葉の意図が全くわからなか

せない」 「俺は・ ・許せません。 家族を、 村を奪い去った魔物が許

ロイの目は力強く、それと同様にその言葉も力強かっ

「そうか・・・わかった。では修業を始める」

質問の意図は最後までわからなかったが。 今の言葉でロイの決心は

固まった。

「お願いします、師匠」

昨晚、 自分の事を『師匠』と呼べとカルコンは言った。

ップに水を入れてもってこい」 「まず、 能力をいつでも引き出せるようになってもらう。 金属のコ

ロイは、 コップに水を入れて持ってくるとカルコンに手渡した。

熱"の術の修業の初歩だ。水の温度を上げる」

はゆっくりと沸騰を始めた。 そういうと、左手にコップを持った。 しばらくすると、 コップの水

「コツは、 水を体の一部のように考えて、そこに神経を集中するこ

とだ。やってみろ」

突然言われてもまったくできる気がしないが、 ロイは言われたとお

ıΣ́ コップを持ち、 手に力を込め、 水を凝視した。

•

もちろん変化はない。

の操作だと俺はイメー では、 コップを胸に抱えてやってみろ。 ジしている。 自分のエネルギー 熱 " の術 を無理やり消 の本質は代謝

力は出やすい」 費して熱を生み出すのだとな。 つまり、 体幹に近いほうが自ずと能

うに集中した。 ロイは言われたとおりにコップを心臓の前で抱え、 しかし、 先ほどと同じよ

「変化無いように見えるんですが・・・」

ンを見た。 そもそもできるわけがないだろう。 集中しつつも諦め半分でカルコ

「水に触ってみろ」

?

ロイは言われたとおり、指を水につけた。

「・・・暖かい!」

確かに水の温度は上がっ て、新しい水に代えたので、これはロイの力によるものだろう。 ていた。 先ほどカルコンが温めた水は捨て

そうだ。 使えないものが思うよりもずっと、 術の発動は簡単だ。

開眼には時間を要するがな」

と思っていた。 自由に発動できるようになるまでが一番時間がかかるんじゃ ないか

っでは、 らいにはしておけ。 明日までに手を頭上で伸ばした状態でも水を沸騰できるく 俺はこれからやることがある」

がある方だ。 そちらに向かっ そういうと、 カルコンは山道の方へ歩いていった。 昨日妖怪に関して興味を示していたから、 たのだろう。 ガイガ カルコンは ン の死骸

刺激的だった。 味な基礎トレーニングばかりやってきたロイにとって、 たとえ、 手取り足取り教えてもらうことができなくとも、 この修業は 今まで地

「まだまだ時間はある」

せた。 ロイはそう呟くと、 先ほどと同様にコップを抱えて、 神経を集中さ

水も体の一部と考え、 そこに神経を集中させる」

ロイは目を瞑って、 胸の前の手の中に神経を集中した。

先ほどのカルコンのように沸騰していた。 0秒ほどたって唐突に音が聞こえた。 八ツ として水を見てみると、

「よしっ!!」

ロイは左手でぐっとガッツポーズをした。

「あっつ!!」

がった。 コップの水がこぼれた。 とりあえず次の段階に進むために新しい水を入れようと立ち上 沸騰し ているのだから暑いのは当たり前だ

「なんだ!?」

えてから立ち上がると、 眩暈がしたかと思うと、 目の前にギンが立っていた。 そのまま膝をついてしまった。 少し息を整

増えてくる。わかったね」 気に使うのは危険だ。 はじめは慣れるまで時間を置いて訓練した方 ないんだ。使えば使うほど術者の体力を消耗していく。だから、一 「言い忘れてたけど、ロイ。精霊術は無限に生み出されるものじゃ そうするうちに、 消耗の抑え方もわかってくるし、 体力も

バケツに水を汲んだ。 休憩を挟まなければならないならば、 まだ少しくらくらしているロイは、 に行く時間も勿体ない。 返事をして、 流しへと歩くと、 水を汲

いた。 争うように、木々が揺らめいている。 日が暮れかかっていた。 トンを渡している。 その中で、 少し肌寒い山の中で、 ロイは未だにコップを片手に立って 夏は終わりを告げ、 残り少ない日射しを 秋へとバ

が聞こえた。 わずかな音だったが、 できた」 途端にロイ ロイの右手に高々とあげられたコップから音 の曇っていた表情に満面の笑みが走っ

ツポーズをした。 小さく呟き、 コッ プをギンが斬り倒した木の切り株に置くと、 ガッ

株に腰掛けると、 水を捨て、 コップを水がそこに少し残るバケツの中にい 大きく息を吐いた。 れ て、 切 1)

に変わってあたりは虫の鳴き声に包まれていた。 分かっている。 何十回かこれをくり返しているので、 ロイが立ち上がって、 家に戻る頃には、 どれくらい休めば 鳥 11 の 11 い鳴き声 の か は

には、 程なくしてカルコンが帰ってきたが、 ともねぎらうくらいはしてくれてもいいのにな、 ロイにも訓練が終わったかどうか聞 昔から不愛想な男だったらしい。 特になにを喋っ くだけだった。 しかしギンみたいじゃなく とロイは思っ たわ ギンが言う けで もな

## 翌 日。

践で使うとなると、こ 「昨日やった訓練は、 能力を自在に操るためのものだ。 しかし、 実

る れを応用しなくてはならない。 今日は、 熱を使って身体能力を上げ

?

ていたのだとギンが言っていた。 しかし、 ロイは始め、 すぐに素振りの訓練を思 カルコンの意味している事がさっぱりわからなかった。 い出した。 あの時は熱の力で振っ

ら不利だ。 柔の力だとしたら、 熱によって筋力を活性化させる。 それに・ 我々の使う熱は剛 ギンらの使って の力。 純粋にぶ ١١ る風 つかり合った 力が、

柔の力と違って限界があるってことですか?」

た力 そうだ。 の限界を超える諸刃の剣だ」 その上この力は一時的に肉体を酷使する。 人間に許され

なるほど・

それじゃあ、 この力では風には勝てないっ て事じゃ ない か。 風 の術

み取ったのか、 者になりたかっ カルコンが続ける。 たとロイは落胆した。 その表情からロイの心情を汲

を爆発的に上昇させられれば、熱の術者に敵う者はいない」 「だが、それは長期戦の場合の話。 もし熱を自在に操り、 身体能力

一呼吸おいて、カルコンは言った。

鍛え、強くなろうとするのではないか、とな」 さびだと俺は思っている。 ぎる力は暴力しか生まない。人間としての本分を忘れないためのく 「確かに、それでも肉は疲労し、骨は軋む。 このくさびがあるからこそ、 だがな、 ロイ。 我々は体を 完璧す

その言葉が心に深く刻み込まれた気がした。 カルコンは自嘲気味に微笑み、ロイを見る。 ンが微笑んだのを始めてみた気がする。そして、 自嘲とはいえはカルコ その表情と同時に

カルコンが立ち上がった。「話は終わりだ、始めるぞ」

ずに木を両断する事もできるようになった。 修業を始めてから3ヶ月。 くなっていった。 剣を重いと感じることもなくなったし、 ロイは身長も伸び、 日に日に身体も大き 術を使わ

「ふっ!!」

地面を蹴ったロイは続いて梢の根元に足をかけ、 一蹴りで、数メートルは跳んでいる。 更に上へと跳んだ。

だ。 閉じればすべてがそこにある。 でもロイの覚悟は微塵も揺らいでいない。 つあった。 間聞き続けた波と海鳥の音は聞こえない。 頂上まで来ると、 りを指すのではない。人々の笑い声そのものがロイの故郷だっ の風程度では消えはしない。潮の香も波の音も聞こえなくても目を 冷たい風が耳を切り裂くような音だけが耳に響く。 木の頂点を左手で掴み、 ロイが失くした故郷とは自然のうね 身の内に炊ける怒りはこ 既に遠くの憂愁になりつ 海の方を眺めた。 。それ たの 5

「よし、いいぞ、降りて来い」

普通に飛び降りたら間違いなく両足が折れるだろう。 樹の下でカルコンが言った。 のだから。 っていくら筋力を上げても体の構造そのものが変わるわけではない て衝撃を逃せばどうにかなるような高さではない。 優 に 2 ,30メートルはあるだろうか。 受け身を取っ **熱** の術によ

ちる。 る。 落下スピー ドを殺 で上手く体の向きを変えると続いて隣 しかしロイは両足を空に出した。 3 人 一 衝撃を逃がすのも忘れない。 トルほど落ちたところで樹の幹を右足で蹴った。 しながら地面へと着地する。 ロイの体が足から真っ逆さまに落 の樹を左足で蹴る。 地面にゴロゴロと転 そのまま 空中

· うっしゃ!」

今自分が下りてきた樹の天辺を眺めた。 立ち上がり、 ガッツポーズをした。 体中に つ いた砂を払いながら、

言い放った。 カルコンはロイのもとへと歩み寄ると、 表情をほとんど変えぬまま

いかな 明日から実践型の修業に移る」 まさか、三ヶ月ほどでここまで上達するとは いが、 なかなかの熱使い になった。 さあ、 • もう今日は休め。 • 俺ほどとは

集中させ、 また樹の頂上へ跳ぶ。コツを掴めばそれほど難しくはない。 ニューを変えたりしない。 したカルコンを見てやめた。 イメージ。 イはまだいけますと言いたげな表情をしているが、 足に血の全てを集める感覚。足が2倍にも3倍にも膨ら あとは空へ向かって跳ぶだけだ。 ロイは有り余った活力を開放するために、 カルコンはどれほど言っても一日のメ 早々と踵を返 神経を

翌日、 を斬り倒 株と化していた。 ガイガンと闘った広場の近く。 していった。 ロイは汗を流しながら、 ロイの周りの木は、 ひたすら一刀の下、 全て切り

「そうしたら、切った木を一箇所に集めろ」

んだ。 隅のほうの切り株に座ってるカルコンが言うと、 に木を転がしたり引きずったりしながら切り株の広場の真ん中に積 カルコンの指示通り円錐型に組み上げる。 ロイは何も言わ ず

「よし、それでは修業だ。その木を燃やせ」

が手をつない 高さはロイ 思わずロイの は ? を見た。 の身長を2倍にしたくらい。 でようやく囲めるくらいだ。 口から声がもれ た。 ロイ の目の前には組み木があ 外周に至ってはロイ1 ロイは躊躇して、 カルコ వ్తే 0人

IJ ユ や の 流石にこれは無理じゃ Щ の葉が全て落ちた頃から、 ない ですか? ロイは木をひたすら切り、

なった。 ぶってしまったり、 も火は勝手に燃え広がっ と困難を極めたが、 しいことではなかった。 しばらく 一度火がつけば後は熱を広げていくだけだ。 乾燥させてから燃やす特訓をしてきた。 始めて2ヶ月で何とか燃やし尽くせるほどには 枝を燃やすだけでも2週間かかっ ていくので、 着火さえできればそんなに難 始め てしまったり 何もしなくて のうちは くす

近づいているとはいえ、 目を閉じ、 のだと読み取 宿っている。 ルコンはじっとロイのほうを見ていた。 しかし、 この量は不可能だ。 両の掌を組み木のうちの一本にゆっくりと乗せた。 ij ロイはその目を見て、 頷くと組み木へと歩み寄った。 木の幹は冷たい。 そんなロイの抗議にも耳を貸さず、 カルコンが自分を信頼している その目には確信と冷静さが ロイは目を閉じる。 春が カ

術者といっ だから、 常に術を使って自分を守るようにしろ」 ても所詮人間だ。 自らの出した火に身を焼かれて ま

は今までの修業とカルコンの言葉の一つ一つを思い出してい た。

通り己の身を焼く」 術は効率よく使え。 物質 の燃える温度にはそれぞれ法則がある。 前にも言っ たが、 限界を超えるとその術は文字 まずそれを理解

ぱちぱちと弾ける音がして、 範囲が徐々に広がってゆく。 火はロイの両手が接している部分よりも奥から出てい を掌のさらに先、 組み木の内部の方へと注い ロイが勢いよく目をあけ、 ロイの掌の先の樹が黒くなった。 だ。 た。 全ての意識 その 火は その

「ロイ!」

十分な熱のある方へと四方八方上下に広がっ

てゆく。

カルコンは切 わない汗が流れていた。 り株から突然立ち上がり叫 ロイはカ んだ。 ルコンの方を見ない。 その頬には今の季節

でも集中を切らせば火はすぐに消えてしまうだろう。

「上の方から燃えるように操作しろ!」

し出す。 えてゆくイメージ。 再びカルコンが叫んだ。 水をすくい上げるように両手を上に掲げた。 ロイは灯っている火を凝視し、 熱を上へと伝 手を前に差

ンは再度叫んだ。 火はロイの意志にしたがって、 徐々に上の方へ昇ってい **\** 力

「下にある火を弱められるか!?」

勢いよく手前へ引いた。 す。左手を炎の方へと向け、 を下げることも可能という事だ。 に操るということ。それは物質の温度を上げるだけではない。温度 ロイは地表付近で燃え続けている炎を目を凝らして見る。 握りこぶしをつくる。そしてその手を 目を閉じ、 先ほどの感覚を思い出 熱を自在

盛っている。その火も次第に燃えるものを求めて、 カルコンが驚愕の表情をたたえた。 の少しではあるが弱くなった。 頂上付近の猛る炎だけが激しく燃え バランスを崩した組み木が崩れた。 作り出した地表付近の炎はほ 地面へと近づい

た。 煤に成り果てた。 ロイの玉の汗が冷たい風に乾かされた頃、 積まれていた木々はロイの腰ほどまで高さを減らし、 その火はくすぶり、 黒い炭と 消え

ಕ್ಕ た炭に注がれ ロイはその場に仰向けに倒れた。 しかし、 こていた。 視線は意識を失っている弟子ではなく、 カルコンが倒れたロイへと歩み寄 ロイが燃やし

ゆっくりと口を小さく開いた。

「ばかな・・・・・」

頬には一筋の汗が流れている。

とはいえ、 やはり限界だった

は弟子に対する称賛も、 かさずに、 目線だけで睨むようにロイを見下ろした。 心配する感情も何もない。 61 つも通り

情のない視線だった。

カルコン!」

聞き覚えのある声がした。ギンが3人を従え駆けてくる。 した炎を見て駆けつけてきたのだろう。 必死な形相をしている。 ロイが熾

「何があったんだ?ロイは無事か?」

カルコンは肩をすくめ、 ギンはロイのそばにしゃがみこみ、カルコンを一瞥して問いかけた。 静かに答える。

それを聞いたギンは先ほどからの厳しい表情を崩すことなく、 「ああ・・・。だが、術の使いすぎだろうな。 この通りだ」

カル

コンを睨んだまま後ろの3人に言った。

3人は同時に頷くと、 「ロイを連れて行って休ませてやってくれ」 ていった。 ヘルゲンがロイを背負い、 3人で来た道を戻

75

• • • • • •

ギンは3人の姿が見えなくなっ ンを睨んでいる。 の切り株に腰掛けた。 の切り株に座るように促した。 眉間にしわを寄せた厳しい顔のまま、 カルコンが素直に座ると、 たのを確認すると、 カルコンに近く 自分も傍 カルコ

「どういうつもりだ?」

表情同様厳しい口調でギンが詰問する。

「何の話だ・・・?」

いた。 カルコンは肩をすくめ、 の人差し指を激しく上下にトントンと動かし、 低い声で返す。 ギンは自分の腿の上の右手 苛立ちを露わにして

「俺は普通に修業をしたまでだ」

ない。 のか?術の限界を超えると、 しらばっくれるな。 そのロイに対して、この修業はあまりにも危険すぎる。 ロイはまだ修業を始めてから半年と経っ 術者は死ぬんだぞ!」 てい 忘れ

ギンは再度カルコンを睨んだ。 術の限界。 熱"や"風"を自在に操ると言う代償はとても大きい。

りあげ、 そんなギンの激しい口調に物怖じすることなくカルコンは口元を吊 冷静に答える。

めてはいるがな」 として、 「ここ半年足らずで、 弟子を強くする為にしただけだ。 ロイはみるみるうちに才能を開花させた。 確かに、 予定をかなり早

ギンはいきなり立ち上がると、 えながら言った。 カルコンを見下ろし、 極力怒りを抑

「本当に、それだけの理由か?」

そ の言葉を聞いた途端、 カルコンは俯くと、 肩を震わせた。

クッ クック 全てお見通しと言うわけだ」

長い付き合いなんだ、 ・ロイを潰すつもりだったのか!?」 お前の性格ぐらいは熟知してるさ。 カルコ

ギンは映ってはいない。 た。 カルコンは座ったまま俯いている。 お互いの姿勢は変わらない。ギンは立ったままカルコンを見下ろし、 見開かれたその目はギンの方向を確かに見ているが、 ゆっくりとカルコンが顔を上げ その目に

さ なに、 ロイを試しただけだ。 危なくなったら止めるつもりだった

その途端、 辺りの木の葉が舞い上がった。

くロイは命を落とすところだったんだぞ!」 試した、 だと?ふざけるな。 お前のその身勝手な嫉妬心で、 危う

顔つきに変わった。 カルコンは膝の上に両肘を乗せて顔の前で指を絡ませると、 真剣な

ったが、共に力を求めたあの時のお前にな」 才とでも言うべきか。・・・・・・本当にそっくりだ。師こそは違 まるで昔のお前を見てるようだよ。 「嫉妬心・・・か。 確かにそうかもしれ 溢れんばかりの才能。 んな。 あい つを見てると、 進化の天

ギンは怪訝な顔つきになり、 始めたばかりの青葉はまだせわしなく動いていたが、 しずく遅くなっていた。 カルコンの意図が読めない 風は静かに流れる。 木々から芽を吹 のだ。 その動きは 少 き

簡単に倒せる。 そして・・・ そばにいたからだ。 としてない。 オと呼んだも お前は俺の理想だった。 あの修業・ のは数いるが、俺は俺自身が天才だと思った事は一度 力さえあれば、 お前がいたからだ。 お前のような才能が欲 • 俺の家族を皆殺 ロイはお前以上の才能 常に俺より力があるお前が しかった。 しにした魔物も を持って

カルコンは積もっている燃えカスを見た。 ギンもそれに続い て首を

俺がこの ベ ルに達するのにどれだけかかっ たと思う? 3

間という誰にも平等なはずのものを超越する力だ」 をロイは半年足らずでやってのけた。 師の下で修業の最終試験として、 わかるか?これが才能だ。 これと同じ事をした。 それ 時

されている。 太陽が西へ沈もうとしていた。 大地は薄暗く、 青い葉も赤黒く照ら

なあ、 ギン。 途方もない力が欲しくないか?」

吸い込まれそうなほどに力強い。 カルコンが顔を上げ、 今度はまっすぐにギンの顔を見た。 なぜか余裕のある笑みを浮かべて その目は

「どういうことだ?」

ギンは何も言わずに黙ってカルコンの話を聞いている。 お前でも、退治しようとすればただではすまないだろう な力を持っていて、魔獣のような膨大な体力に守られて 家族を殺し、 俺たちの故郷を滅ぼした魔物。 奴らは術よりも強大 いる。 例え

「だが、俺は奴らを超える力を手に入れた」

ギンは突然カルコンの口から飛び出した言葉を理解するのに時間 かかった。 が

「バカな・・・・・不可能だ」

得的な力。 うな組織を組み、 することなど人間には不可能だ。 人間が使うのが精霊術ならば、 さらに魔獣や魔物が擁する膨大すぎる体力。 集団になる必要があったのだから。 魔物が使うのは能力。 だからこそ人間はジエル 術とは違う生 それを凌駕 トンのよ

ディアボロス」

カルコンの 俺が作っ た組織の名だ。 口から、 ギンへ の返答として固有名詞が飛び出した。 魔物どもを根絶やしにする為の、

• • • • • •

同じ村に住んでいた。 ンの脳内には14年前の光景が蘇えってい ボンゴほどでないにせよ、 た。 ほとんど人の行き ギンとカル

け。 生きるために人から奪った。 それから1年間、 かうこと そして自衛団に殺されて残ったのはギンとカルコンの2人だ のない 小さな村だった。 二人で血肉をすするような生活を共にしてきた。 最初は5人いた仲間たちも病と飢餓で しかし、 その村は魔物に襲わ ħ

っていたギンに対して、 そして偶然近くに住んでいたギンの師に助けられた時、 放った。 涙ひとつ見せること無かったカルコンは言 泣きじゃ

魔物どもは、 俺が必ず根絶やしにしてやる」

カルコンは立ち上がった。

どうやって、と聞きたそうだな。 教えてやる」

ギンの表情はいっそう険しくなった。 塵も気にしな いで嬉々として話し続ける。 カルコンはそんなことなど微

「魔天転器

またしても固有名詞が飛び出した、 だがその言葉には聞き覚えがあ

る

を調べ、 この世界へ来る唯一の方法だ。 俺はジエルトンが残した様々な文献 「この世界と魔界とをつなぐ高エネルギー発生装置だ。 ついに1年前、そのありかを突き止めた」 妖怪たちが

「 何 故、 魔天転器を?」

理解した。 って能力が2つある。その内のひとつは契約よって他者への譲渡が 可能となる。 決まっている、 俺はそれを行った」それを聞い 契約だ。 知っているか?ギン。 た途端、 妖怪には魔物と違 ギンは全てを

魔天転器のありかと言うのは • まさか

カルコンは笑う。

少なく、 そう、 ボンゴだ。 人がいなくなっ あの場所は本当に良かったよ。 ても怪しむものはほとんど いない。 外部との交易が ただ、

ったがな」 魔天転器の発動の仕方は分からなかったから少し工夫をさせてもら

「それじゃああの魔物は・・・」

ギンは目を見開いた。

た 偶然に知り合った。 それからは全ての魔物が支配できるようになっ 「そうだ、俺がけしかけた。 数年前、 特殊な術で魔物を操る一族と

ンとを囲み始めた。 風が舞い上がった。 ンはくつくつと笑った。 魔物を殺すために魔物を使うのはなかなかの矛盾だがな、 ンとも当てはまらない。 静かに横たわっていた木の葉が、ギンとカルコ その様は、ギンの知っているどんなカルコ まるで妖怪か何かのようだった。 とカルコ

「そんなことをして、どうするつもりだ」

あ、ギン。昔みたいに俺達で組まないか?」 を一匹残らず根絶やしにする為に。だからお前にも言ったんだ。 「決まっている。俺が世界の王となり、この世界を支配する。 魔物 な

ギンはこみ上げる感情がよく理解できなかった。 だがひとつだけ理 解できた。 ロイの全てを奪った元凶はこの男なのだと。

気がつくと、 剣を抜いていた。 随分と、ふざけたことを、言うじゃない カルコンもそれに続く。

こうなると思ってたぜ。 なんせ、長い付き合い だからな」

行かない。 ジエルトンの誇りに懸けて、 お前はここで私が止める」 そんなことをさせるわけには

俺は世界の王になる。 お前には阻ません」

構えていた。 ローブを投げ捨て、 剣を構える。 ギンは上段に、 カルコンは正眼に

「見せてやろう、俺の能力を」

出す。 そういうとカルコンは左手の人差し指を剣で触れた。 赤い血が流れ

!!

成した。 点は、 重力に従うことはせず、カルコンの目の前で、 同時に、ギンは全身を包む肌寒さを感じた。 小さな球を形

で俺は自在に熱を集められる。分かるか?つまり、 っての絶対の弱点、 で作った球に留める。 術を使わなくてもこの熱球に触れているだけ から得た能力。この熱球は自動的に周囲から熱を奪い、 ヒートボールだ。 魔天転器でこちらに来た唯一の妖怪、 " 限界"が無いということだ」 俺には術者にと 能力者の血 ガイガン

にやっと笑ったカルコンに対して、 燃えろ」 ギンの額には一筋の汗が流れた。

カルコンは足元に落ちている枝を、ギンへと蹴った。 で熱を帯び、火の塊へと姿を変える。 それは空気中

だが、 その火はギンへ届くことなく、 ギンの前で左右に分かれ

風、から

辺りが突風に包まれる。 カルコンめがけて奔った。 間髪入れずギンは刃を振るっ た。 風 の刃が

ふん

気流を生み出す。 熱球がカルコンの前で赤く光った。 ていった。 風は、 カルコンを切り刻むことなく、 その熱と、 外気の気温差が上昇 上空へと舞

< < < · • • わかるか?ギン。 真空波は俺には届かん

度を上げ続ける。 熱球によって外気の温度を下げ続け、 限界のないカルコンだからこそできる技だ。 熱球によって自分の周囲 の温

「つまり・・・」

ギンは瞬間的にカルコンの懐に入り、 を受け止める。 剣を振った。 カルコンがそれ

「そうだ、剣と剣の勝負と言うわけだ」

ギンが後ろに跳んで身を引いた。

「そうか・・・」

ギンの周りに風が集まる。 ギンから外側に向くように吹く風はギン

を中心とした斥力となった。

「これで、 お前の刃など私に届きはしないさ」

それを可能にするのは天賦の才であり、 たものだ。 カルコンと同じ常時発動型の技。 術である以上限界はあるのだが、 それはカルコンにはなかっ

しかしカルコンはくっくと笑う。

やはりな、 やはりそうくると思ったぜ。 カリー スと同じ手だ」

その時、ギンの眉間がピクリと動いた。

・・・カリース先生」

の下に送ったあの忌々しい女さ」 そうだ、 俺達の恩師。 お前を選び、 俺をコラヌの様な耄碌じじい

「まさか・・・お前」

ギンは怒りを最大限に抑えながら、 声を絞り出した。

るだろう。 お前 たんだがな。 の考えてるとおりさ、 ・そう、 優秀な風の術者を2人も殺さなければならないとは あの女は俺が殺した。 ギン。 あの女が死んだことは知って お前と同じように誘

・残念だ」

「きさまぁ!!」

たが、 ギンが怒りに任せて剣を振る。 ランスを崩した。 の肩口から振り下ろそうとして、 熱で肉体を強化しているカルコンはそれを止め、 風で剣速は目にも止まらぬほどだっ 風に阻まれた。 剣がはじかれ、 瞬時にギン

「はっ!」

ギンは飛び上がり、 カルコンに向けて刃を振り下ろした。

" サウザンド・アックス"

が奔った。 た風を全てなぎ払うことは出来ず、 無数に走る真空波。 カルコンの生み出した上昇気流は、 カルコンの体にはいくつもの傷 ギ ンの放っ

天才『千本刀』のギンの力、 「くつ、無数の風は、 千本の刃を相手にする事に匹敵する。 か これ が

が、膝をつくことはしない。 傷から出る血を熱に酔って乾かし、 固める。 足元がふらつきかけた

「はあ、はあ・・・」

しかし、 攻撃をした側のギンは地面に片膝をついている。

てん」 「だが、 詮術には限界がある。 悲しいな。 いかにお前が一騎当千の力を持っ お前がただの 人間である以上、 この俺には勝 ていても、

で剣を握りなおし振り上げると、 カルコンにも既に口元をゆがめる余裕はなかっ ギンへと詰め寄っ た。 た。 傷だらけの 両腕

「 死 ね」

剣をギンの頭へと振り下ろす。

「お頭ぁ!」

速力の突きは空を切った。 ってきた。右手で剣を抜いている。 ロイの叫び声が響き渡った。 コンを狙っていて、カルコンはそれを避けるために後ろに跳ぶ。 家で伏せっているはずのロイが駆け寄 その突進は凄まじく速く、 カル

「どういうつもりですか、師匠!!」

で、敬意などは一切含まれていなかった。 ロイは自分の師を鋭い目つきで睨んだ。 そ の敬語はあくまで事務的

となってはロイの方が足が速い。 審に思い、 ロイは家に連れ帰られてすぐに目を覚まし、 飛び出してきたのだった。 3人も同時に家を出たが、 3人から聞 いた話で不 今

「ロイ・・・・・来ると思っていたぞ」

カルコンは傷だらけの両腕を開いて天を仰い だ。

「お前なら賛同するだろう?俺の魔物を滅するための計画に!

?

前の村を襲っ まあ、 わかるまい。 た魔物共が」 とにかく俺について来い。 憎い のだろう? お

カルコンの下につけば、 ロイにはカル コンのいっている意味がまったく分からなかっ 魔物を倒すというロイの目的に近づく。 そ

「騙、されるな、ロイ!」

れだけは分かった。

ロイの背後で息も絶え絶えにギンが言った。

「魔天転器を、 使わせるために、 魔物を、 け しかけたのは、 つ

だ!

犠牲になった父親。 る水鉄砲。 ロイの脳裏にあの惨劇が蘇る。 体が吹き飛んだ知人達・ 全てがなくなった生まれ故郷 天を泳ぐ魔物、 • そして、 そこ 村を守るために から繰り出され

温度が高くなる。 ロイはカルコンを睨んでいた。 足元の草木は枯れ、 その怒りに反応するように、 土は乾ききっていた。 周囲

「どうして・・・!?」

カルコンは少しも悪びれる様子も無く答える。

だ。 「俺が支配者になるために必要だからさ。 なんせ一つの村を俺たちと同じにするんだからな。 心は痛んだよ、 なあ、 実に痛ん ギン

る。別人だと言われた王がまだ信用できた。 カルコンはにやりと笑い、 の男はロイの知るどんな師の姿とも違う。 ギンを見た。 ロイは目を細める。 饒舌で、 悪意に満ちてい 目の

「俺はこの世界の王となり、 魔物を駆逐する。 大事のための小 さな

はカルコンを睨んでいる・・ 頭の中が真っ白になった。 のはずだ。それなのに、目の前にいるのは自分の敵。 いるのは自分の師のはずだ。 手が震える。 半年以上自分を磨き続けてくれた恩人 · ? 体が寒い。目の前に立って どうして自分

ようやく絞り出した言葉に返って来たのは嘲笑だった。 そのためにはどれだけ人が犠牲になってもいいってい うのか!?」

ボンゴの村人は何百分の一だ?お前は知らないだけだ、 の惨状を。 「考えてもみろ、 して俺の下で修業に励めばお前は強くなれる」 俺についてくれば教えてやる。この世の真実の姿を。 ロイ。今までどれだけの人間が魔物に殺された 今の世の中 ?

「だからって・・・」

ロイが剣を振り上げる。 大気中の熱がロイに集まっ

どうして簡単に他人を犠牲にできるんだ!

許せなかった。 ・・いや、 目の前の男はもはや師ではない。 あの惨劇をただの一部だと言い切ってしまう師が。 ロイにとってはただの

敵だった。

ロイが先ほどと同程度のスピー コンも剣を構える。 ドでカルコンに向かっ て突進した。

ンはロイを見下し、 剣が二人の前で交差した。 蔑む。 剣ははじかれ、 ロイはカルコンを見上げ、 またクロスする。 睨 ٤ 力

え上がった。 カルコンが左足で木の枝を蹴り上げる。 剣先に触れるとその枝は

「・・・・・・つ!?」

ロイは一歩下がる。

る の持久力はまだ無い。 ロイにとって、炎は熱く感じないのだが、 第一、先ほどの修業でもう底をつきかけてい 熱で体を守り続けるだけ

だが、 先ほどまでギンと戦っていたカルコンもそれは同じはず

**、駄目だ、ロイ・・・」** 

唐突にギンが呟い イは耳を傾けた。 た。 戦い の最中、 ギンに目は向け ない もの Q 

「やつは既に、術者じゃあ、無い」

訝しげな顔をギンに向けたロイにカルコンが答える。

ようになった。つまり、 「俺は妖怪ガイガンの能力を受け、 術の限界など俺には無 熱を自在に周囲から集められる

労はない。 嘘ではな の体勢をとった。 いのだろう。 ロイは剣の柄の部分を両手で持って体を右に捻 時間がかかれば不利になる。 その証拠にギンは消耗し、 カルコ ンの顔に疲 וֹיֻ 突き

「いくぞ!」

た。 身の血が煮えるように熱い。 目の前にふ を殺すことになり、 脚力に任せた猛突進。 ロイは全身のバネを一 に炎が現れた。 避けられれば自分が死ぬ。 もう後戻りはできな 気に開放し、 そのせいで一瞬カルコンの姿を見失っ もう目の前には剣を構えたカルコンが 剣を突き出 ſΪ 鼓動が加速する。 当たれば自分の師匠 した。 全

左の脇腹に強い た。 足が地面から遠ざかっ 衝撃を感じる。 てい アバラの折れる音が全身に響き渡っ

喉が焼けるように熱くなり、 ロイは5メー トルほど離れた樹の幹に体を思い切り叩 喉の奥から血が溢れる。 きつけられ た。

ガハッ」

突きは避けられ 力で突きを避けてロイの左に出て、 り声を上げている。 コンはにやりと笑っている。 た。 あの炎でロイの視界を攪乱し、 カルコンの周りで、 蹴りを繰り出したらしい。 今にも消えそうな炎がうな 熱で増幅した筋 カル

まだまだだな、 ロイ

っている物に気がついた。 の足を指差した。 右手に剣はなかった。ロイはゆっくりとその右手を掲げ、 ロイは両腕をだらりと下げていて完全に無防備になって 炎が消えたその瞬間、 カルコンは自分の足に刺さ しし カルコン る。 そ (ന

の剣だ。 剣がカルコンの左腿を貫いている。 蹴られた時に咄嗟に 刺 た 1

くつ、 そ。 キサマ! よくも」

ロイは血の滴る口をにやりとつり上げ、 言い放った。

まだまだだな、 カルコン」

が。 カルコンの理性を引き裂いたらしい。 みよりも、 悔しかった。 だから一矢報いたかった。どうやらそれは成功したようだ。 何よりも自分の弟子に出し抜かれ、 自分の人生がこの男のされるがままになっていること 見下されたことが、

「ふざけるなぁ!

鋼でできたロイの剣は、 手を当てて熱で乾かすと、 カルコンは瞬時に足から剣を引き抜いた。 固体としての形を失い、 両手でロイの剣を強く握った。 勢いよく噴き出す血を左 雫となっ て地に落

はああああ

ち た。

その様を、

ロイは全身がばらばらになりそうな痛みの中で見

た。

に戻る。 先ほどまでカルコンの背後で光っていた赤い そしてそれを強く握り締めた。 球がカルコンの手の 中

ಠ್ಠ 眼球が焼けてしまいそうだった。 何百倍もの大きさの熱球が現れた。 カルコンが両腕を頭上に掲げると、 その熱球はあまりにも熱が高すぎて、 そこから先ほどの何十倍、 辺りが一瞬にして高温に包まれ 直視する事も適わない。 しし 10

「死ねっ!」

メテオ・フレア

球は砲弾のようにロイに向かって発射された。 カルコンが両手を伸ばしたままのロイのほうに掌を向けると、 赤い

きない。 あまりにも大きすぎるエネルギー。 とても自分の体を守ることは いでいた。 ロイは悔しさと無力感、疲労で指一本動かすことができな 村のみんなの敵が目の前にいるのに、 どうする事もでき で

ただ死を待つのみで

• • お 頭 」

ていた。 食い止めている。 いに熱が止んだ。顔を上げたロイの目の前には、 ギンが両手を熱球を押さえるように突き出し、 金色の髪が躍 風でそれを う

諦めるな!」

ギンが叫んだ。 その言葉が、 ロイの胸に深く突き刺さる。

いたことがある、 ロイはハッとした。ギンの口からは血が滴っている。 まだお前にはやらなくちゃ 術の限界 ならないことがある。そうだろう!?」 0 修業の時に聞

に近づいてくる。 そのエネルギーに耐えかね、 がはっ」 今にもギンを飲み込みそうだ。 ギンの風が弱々しくなる。 熱球が徐々

くそっ、 ここまでか」

ギンが血の流れる口で呟いた。

おおおおおお

その時、 男の低い声がステレオで聞こえてきた。

お頭ぁ 遅くなりました!」

勢力を落とすことはない。 け止めている。 ヘルゲン、オルソー、 熱球は5人から少し遠のいた。 アンゴラの3人が、 ギンの横で熱球を風で受 が、 それでも微塵も

おい、 ロイ!」

ヘルゲンが叫んだ。

たりはできない。 いいか、俺達はこれを止めることはできても、 お前がやるんだ!」 跳ね返したり消し

あんな凄まじい熱を風で押し返すことなどできるはずが無い。 一時的に止められていた熱球はしかし、じりじりと詰め寄って

やるんだ、ロイー・・ • ・・やれつ!!」

ギンが血を吐きながら叫んだ。その言葉を受けた口 変えて立ち上がり、熱球に向かって突進した。 落ちた周囲にその熱をばらまき続ける。 火球のせいで気温の イは、 目の色を

死ぬわけには いかない! 体が燃えているみたいだ。

カな

ていて、 熱の火球。 るようにぐったりしているのが見える。 その熱球の向こうで、 眩暈の止まない頭を手で押さえていた。 それが自分の目の前で霧消し、 カルコンは先ほどのギンのように片膝をつ ギンはオルソー に抱かれ 全てを飲み込む灼

確実に殺せるはずだった5人全員が残らず生きていた。

ギンがオルソー めた俺の最高の技だ。 今のは、能力と術を合成させた、 に支えられながら顔を上げた。 お前などに破れるはずが・ あのカリー スさえも死に至らし その顔は弱々しくも

ゆっ 微笑んでいる。 カルコンは怒りの表情で、 甘く見たな、 と立ち上がり、 カルコン。 んだ。 ロイは、 唇を噛み締め、 私などはるかに凌ぐ天才だ 拳を握り締めた。 そして、

ij

叫

キリシエ!リック!ザバン!」

その瞬間にカルコンの背後に3つの人影が現れた。 り返ると、3人は左ひざと右拳を地面についた。 一人は若い男、そして一人は筋骨の逞しい中年の男。 カルコンが振 人は若い女、

「アジトに戻る」

カルコンはそれだけ言うと、眩暈をおこし、ふらついた。

「カルコン様!」

若い男が近づき肩を貸す。カルコンと3人はロイたちに背を向けた。

女が長い髪を揺らしながら振り向いて言った。

「命拾いしたわね」

そして、現れたときと同様に瞬時に消えていった。

態が続いていた。 癒え、普段通りの生活をしている。 あの事件から2週間が経過した。 くこともままならないほどの疲労に見舞われたが、 あれからしばらくの間、 しかし、 ギンはいまだに昏睡状 それもすっ ロイは歩 かり

「お頭・・・大丈夫かなあ」

「俺達は、どうなるんだろうな」

資格を得るのが通例らしい。 断もつかない。 子は新たな師につくか、 に成り立っているジエルトンでは、師匠が死んでしまった場合、弟 オルソーの呟きに対してヘルゲンも呟いた。 独学で訓練し、試験に合格して弟子を持つ しかし昏睡ではどうすればいいのか判 完全なる師弟制度の下

出すように呟いた。 を組み、 ロイは、 何かを考えている。 眠っているギンのそばの椅子に腰掛けてい そして時折拳を強く握り、 ಶ್ಠ 顔 何かを思い の前で指

「カルコン・・・」

その様子をドアの外で見ていたヘルゲンは、 二人の元に戻った。

「ロイのやつ、日に日にやつれてやがる」

「師の裏切りだ。心の傷は大きい」

「 · · · · · .

だが、 このままってわけにもいかねえよな

3人は、 目線を合わせると、 急に立ち上がっ た。 そのまま、 ギンの

部屋へと歩いてゆく。

「おい、ロイ」

ルゲンがギンに配慮をした小さな声でロイを呼ぶ。

「なんスか」

「「」、ご・ロイは感情のないくらい目でそれに応えた。

行くぞ」

「どこへ?・・・って、ちょっと!」

と運び出された。 ロイの体はいとも容易くヘルゲンに持ち上げられ、 抱えられて外へ

「やるぞ」

っている外の丸太の椅子に腰掛けている。 と、肉弾戦用の薄いグローブをはめた。 ヘルゲンはロイが素振りをするのに使っていた野原でロ アンゴラはいつもロイが座 イをおろす

「いやっス」

「あ?」

?めんどくさい」 「だから、イヤです。 何でそんなことしなくちゃならないんですか

ばされた。 ロイの襟首を掴まれ、足が宙に浮き、 ロイはそれだけ言うと、 家のほうへ行こうとヘルゲンに背を向けた。 3メートルほど後ろに投げ飛

な痛みが走った。 ズザアアアと言う擦れる音が耳を叩き、 頬にやすりがけされたよう

「いってぇ、何するんスか」

ゲンの怒りはピークに達し、拳を振り上げた。 ロイが生気のまったく感じられない目をヘルゲンへと向ける。 ヘル

ど一切ない、殺すつもりの拳だった。 の体が横たわっていた地面には、小さな穴が空いていた。 ロイは反射的に後転し、ヘルゲンの拳を交わした。 先ほどまでロ 手加減な 1

ばいいでしょ」 ああ、 もう!何がしたいんスか!そんなに殴りたきゃ勝手に殴れ

ロイは服についた砂埃を払いながら立ち上がった。

ゴッ

てて、 ロイの体が、 握ったり開いたりをくり返している。 ロイの体が地面を転げる。 右側へ飛んで行った。 ヘルゲンは、 ドシャアアと言う派手な音を立 ロイの頬を殴った右

ロイは上半身を起こすと、 赤くはれた左頬を手で押さえた。 頬骨が

つける。 面は明らかな左右不対称を作り上げていた。 んば 太陽を背にしているヘルゲンが叫んだ。 かりの鉄拳だっ た。 幸い折れてはい ロイは ない も ヘルゲ の Ó ンを睨み ロイ

「ダセえんだよ、お前!」

その声に、ロイがびくっと肩を震わせた。

べきことは引きこもってうだうだやることじゃあねえだろうが!」 「悔しいのはわかる。 そりゃあそうだろうよ!だけど今お前がする

ロイが頬を押さえながらうつむいた。

に塞ぎこんでて何かが変わるのか?変わりゃしねえだろうが!」 師匠には裏切られりゃあ落ち込むもだろうよ。 確かに家族も知り合いも親しい人みんな吹き飛ばされて、 だがな、 そんなふう その上

ロイがうつむいたまま叫んだ。

あんた達に のあんた達に何が分かるんだよ!」 何が分かるんだよ。 ただ、 魔物に人生を壊された。 だ

表情をしていた。 が自然と流 顔を上げ、 しい量が流れる。 れ出て、 ヘルゲンを睨んだロイの目には涙がたまって ヘルゲンも、 平らな右の頬と、 椅子に腰掛けていたアンゴラも暗 山をつくっている左の頬に等 しし そ ίÌ

わかんねえよ。 なんせ俺達は親の顔すら知らねえんだから

ロイから見て、 るようにも見えた。 怒っているんでも悲しんでいるんでも無く、 ヘルゲンは逆光で、 その表情が分からなかっ ただ懐かしんで

理する なまず 境遇を共にする仲間がいた。 い飯 のだから仕方がない みたいなところだったよ。 魔物に親を殺された俺達は、 確かに1 00人近い子ども達を10人程度の大人で管 んだろう。 毎日一緒に生きる仲間達が 軍隊のような管理、 孤児院で育てられた。 だが、 あそこには同じように 豚の飯のよう まあ、

だが、俺達が12歳の時のある日

空腹の子ども達は皿を片手に一列に並んでいた。そんな中、 大人の一人が叫んだ。 無駄口を叩けば飯抜きになる事を知っ 「昼飯の時間だ。 全員自分の食器を持って一列に並べ」 ていた

「痛いよ~、ヘルゲン、アンゴラ~」

た。そのドアの外で、ヘルゲンとアンゴラが待っている。 オルソーは臭いトイレの個室の中でおなかを抱え、 うずくまっ てい

ルソー。 「だたら拾い食いなんてやめろって言ったんだよ。 俺たちまで飯抜きにされちまうぞ」 早くしろよ、 才

「待ってくれよ」

「分かってるって」

ンゴラは急ぎ足で食事の配られる集会場へ行った。 30分ほど過ぎて、 腹を持ち直したオルソー、そしてヘルゲンとア

そこには、まさに地獄の光景が広がっていた

るその子供たちを大人たちは一人ずつ あーと言う小さな呻き声が部屋中にこだまし、 れた床は足を進めるたびにピチャピチャと音がする。 まだ生きてい 口から泡の混じった血を流し、白目のまま痙攣する子ども達。 真っ赤に染め上げら 個ずつ麻袋に詰めて

「かはつ、がつ・・・おえつ」

· · · つ ! ! . .

その時、 かしながら、ピチャピチャと音を立てながらこちらに近づいてくる。 アンゴラが嘔吐する音で、大人たちはこちらを振り向いた。 突風 が吹き荒れた。 口を動

大人たちが目を閉じ、 ていた。 次に開いたときには3人の子供たちの姿は消

戦争による疲弊で、 これ以上食料を調達できなくなっていたらし

ゲンは語った。 声が震えている。 目を閉じ、 一人ひとりの顔を思い出すようにヘル

に人を守る義務を作ってくれたんだ」 いや、あの状況では死んだ方が国のためにはよかったのかもしれな 「身寄りのない俺たち3人は死のうがどうしようが誰も困らない。 だがな、お頭は俺達を生かしてくれた。 俺たちを生かし、

ヘルゲンは一度言葉を区切った。自然とロイの顔が上がる。

かじゃなく・・・。 たときにギンが救ってくれた。ロイの目的。 初めてギンにつれられてきた時、無性に嬉しかった。死が迫って 前の目的はなんだ!?復讐か?逃避か?それはお前が決めるんだ!」 「だから俺たちは強くなって、弱さにあえぐ人々を救う。 ロイは涙を拭った。 それはきっと復讐なん お

「俺は、 この力で魔物に脅える人々を助けたい」 お頭や・・・カルコンに強くしてもらったんだ。 だから、

ヘルゲンが嬉しそうに叫んだ。

れた空だ 「そうだ!俺達には無限の空が広がっている。 お頭が風を与えてく

ロイは立ち上がった。 大地を踏みしめ、 拳を握り締めると、 神経を

集中させた。

「一発は一発だからな!」

「ふっふっふ。よし、来い!.

ヘルゲンが構えると、足元に風が巻き起こった。

「行くぞ!!」

周囲の熱が上がっていく

はあ、はあ、はあ

ロイとヘルゲンは野原に仰向けになると青空を見上げていた。

はにやっと笑う。二人は抱え上げられ、家の中へと引きずられてい アルゴンとオルソーが二人の顔を覗き込み、呆れた顔をした。二人 とも顔はもうぼこぼこで、一回りも二回りも大きい。

家の中のギンの部屋。昏睡状態のギンは確かに微笑んでいた。

「お頭が、お頭が目を覚ました!!」

我先にとギンの部屋へ掛けると、部屋に押し入った。 ロイのその言葉を受け取った3人は、 一斉に椅子から立ち上がった。

「お頭!お頭!分かりますか!?」

ロイの問いかけに、 ギンは目を開け、 首を4人の方へ回した。

「大丈夫、なんですかい?」

う。 ヘルゲンの問いに、 口を少しあけ、 小さな掠れた声で「ああ」

「夢を、見ていた」

ギンが天井を見る。 りとしていた。 長く眠っていたせいだろう、 視界はまだぼんや

ギンは一度目を閉じ、椅子に座っているロイの方を見た。 っ た。 まれ、 最後には吸い込まれそうな青い空へと飛んで言ったよ・・ 大きな羽を持った若鳥の夢だ。 だが、その鳥は何度行く手を阻まれようとも羽ばたき続け、 声を雨に遮られていた。 私はそれを見守ることしかできなか その鳥は羽ばたきを大きな山に阻

「ロイ、お前に風はまだ吹いているか?」

「はい!」

ロイはその言葉の意味を悟り、返した。

「お頭、本当に大丈夫なんですか?」

その目にはロイの安堵の涙がたまっていた。 ギンは軽く微笑む。

「大丈夫だ。 お前たちに風が吹いている限り、 私の命も潰えはしな

ل ا

たときのような悲しみの涙ではなく、 ロイの目から涙が止め処なく溢れてくる。 喜びの涙だった。 しかしこれはボンゴを出 ヘルゲンが

## ロイの肩に手を置く。

間にロイはギンの身の回りの世話を任されていた。 それから、 ギンが起き上がれるようになるまで3日かかっ た。 その

「よし!ロイ、一緒に来てくれ」

るはずではないのに、 3日後、ギンはかつての透き通った声を取り戻していた。 しようとすると、 ベッドから降りようとしたので、 ロイが制止 まだ歩け

もの自分の椅子に座ると、 ロイはしぶしぶ肩を貸し、 「大丈夫だ。 とりあえず外まで肩を貸してくれないか」 目を閉じた。 ロイを小屋の外へと導いた。 ギンはい

「ふう・・・!!」

を纏い、体を宙に浮かせた。 センチ離れている。 ロイが熱を移す時のように全神経を集中させる。 歩くような格好だが、 ギンは集まっ 足は地面から数 た風

「ロイ、行くぞ!」

「え?」

めた。ロイはギンについてゆくために駆け始めた。 それだけ言うと、 ロイのジョギングくらいのスピー ドで空を舞い

「ちょっと、どういうことっすか!?」

悪びれない態度で答える。 ロイはギンの風に阻まれないように大きな声で叫んだ。 その問い に

体に慣れさせないといけない」 リハビリさ。 術はこの通り使えるみたいだけど久しぶりだからね、

なるほど、とロイは呟き。ひとつの疑問を抱く。

「何で俺もついていくんですか」

「私が倒れたら、誰が運んでくれるんだい?」

ギ ンがロイの耳に十分届く声で叫ぶ。 ロイは呆れた。

. お前もよかったら術を使うといい」

ンはそう加えたが、 熱の術は低スピー ドで長距離だと逆に疲れる。

これは自力で走るしかないと考えているところに、 よし、 スピードをもっと上げよう」 ギンが叫んだ。

そのまま、鳥ぐらいの速さで飛んでいった。

「オニ〜!!」

にした。空は青くどこまでも澄んで、 していた。 ロイはそう叫ぶと、 仕方なく術を使いながらギンに 木々は枝を力いっぱいに揺ら ついてゆくこと

が並べられていた。ギンが定位置に座るように促す。 夕闇に包まれていた。扉を閉めると、食指を動かすにおいが鼻を突 いた。 食卓に目を向けると、珍しく3人が料理をしたらしく、 イがふらふらになりながらギンに続いて小屋に入った時、 辺りは

そう余裕そうに言うと、まだ息を切らせているロイを一瞥した。 「いやあ、久しぶりに訓練なんかしたなあ。 イは口をとがらせ、目を逸らした。 疲れた。 なっ、 ロイ П

い る。 と口に運び出した。 食べないと、目の前にあるものを食べられてしまうので、 でやめた。 と言いたかったが、修業が足りないとか嫌味を言われそうだったの 「こっちの方が燃費悪いんだからしょうがないじゃないっすか」 ギンも食べ出したが、今の口イにその体力は無い。 隣を見ると、3人が自分たちで作った料理をほおばって しかし、 ゆっくり

おおかた食事が済んだ頃、 ギンがロイに話しかけた。

ギンも目覚めた今となってはロイがここに残る意味は無い。ここに その言葉を聞いてロイははっとした。 いたところで術の修業ができるわけでもない。 「ロイ、 魔物から人々を救う』 お前はいつ出発するんだい?」 正直ここを出て一人で生きていくなんて考えたことも無か という目的を果たす事も出来ない。 確かにカルコンもいなくなり、 更に、ここにい ては

俯くロイに対してギンが言う。

自分の力を磨かなくてはいけないよ」 ちできなくなってしまうだろう。 このままディアボロスが力を付け続けたら、 カルコンはそう遠くない間にジエルトンに宣戦布告する。 だから、 ロ て。 ジエルトンでも太刀打 お前は世界を見て、

ンには敵わない。 はおろか自分自身でさえ守ることはできなかった。 わかっている。 ここにいても守られているだけ。 自分一人ではギン それではカルコ

わかってます、でも •

果たして魔物が出ている外の世界でロイの力が通用する ガイガンを目の前にして足がすくみ、 には自分の力を過信できるほどの経験が無かった。 実戦と言っ したくらいか。 言ってしまえば2戦全敗のようなものだ。 カルコンと対峙して剣を腿に の か。 たら

てはい 3人は立ち上がって、食器を片付けていた。 イの人生の中で大きな分岐点になることが3人も分かっているのだ。 迷う気持ちは分かる。 ギンの真剣さを感じ取っているということだろう。 ここが口 けないだろう」 だが、 カルコンを止めるためにもここに ロイの分まで片付け て

だが、 非力な自分に何が出来るのだろうか •

めて来た夜と同じように倉庫の中へ入っていった。 その様子を見てギンは溜息をついた。 ゆっくりと立ち上がると、 初

5分ほどたって、 出てきたギンは剣を握っていた。

れともうひとつ話しておく。 ロイはギンが倉庫から出した剣を右手でギンが腰に携えてい お前 の剣はカルコンに融かされてしまったからな。 私の剣を振ってみなさい」 代 わりだ。 る剣を そ

「えつ?軽い

左手で受け取った。

自然と左手が頭上に上がってしまっ

た。

けだ。 普通の剣と同様の重さだと思い、 剣はおそろしく軽く、 自然と腕が上がってしまったというわ ロイは腕に力を込めた。 しか

そうだ、 術者にとって、 通常の剣は戦闘 の時邪魔になる。 だから、

だ 例えば私の剣が軽い物質で作られているように、 特注品にするわ け

逃がせても、 ないわけだ。 かったことにも納得がゆく。 なるほど、これでカルコンの剣がカルコン自身の発する熱で融け 劣化は免れない。 熱の術では確かに融けない程度に熱を 融点の高い金属を使っていれば問題

ずそこに行くことを目的とするのは」 ら、実際に出向かないと作れないわけだね。 出向いて作ってもらうんだ。 「ジエルトンの協会本部の地下に鍛錬場があってね。 術者の体に合っ どうだろう、 たものを作るわけだか 術者はそこに とりあえ

的のある旅 世界を救う"なんて漠然としたゴールの見えない旅ではなく、 目

るようにしておくから。 そろそろ拠点を動かさなければならないけど、 「無理だと思ったらいつでも私の下に戻ってくると ちゃ んと連絡はとれ しし 私たちも

「はい、分かりました」

ロイは背筋を伸ばし、そう答えた。

それを眩 朝焼けがロイ しそうに見つめると、 の体を包み、 西の方向に長い影を作っていた。 目を閉じた。 ロイは

返っている。その暗がりの中にロイとロイの恩人達の姿がある。 背後に広がる森からは朝早いせいか鳥の鳴き声は聞こえず、 1)

「ロイ、覚悟はいいかい?」

ロイは力強く頷き、 ギンの問い への肯定を示 した。

頭を軽く叩いた。 ルゲンがロイの方へと歩み寄り、 ロイの茶色い髪が少し揺れる。 自分の胸 いくらい の高さのロイ

カリュ 山は高くはないが広い。 野垂れ死ぬなよ

二人は拳を突き合った。 ロイは歯を見せてにこりと笑った。 ロイも成長期の後半に差し掛かったとはい ヘルゲンも同様に笑う。

ギンもロイのほうに歩み寄ってきた。 に掌を出させた。 やはりヘルゲ ンの手も背もロイよりずっと大きい。 首のネックレスを外し、

これをあげよう」

ギンはにこっと笑った。 されていた。 ここに来てから首も一回り太くなったらしく、 そのネックレスは、 の剣状突起ぐらいの位置に石が触れている。 私が師匠からもらったものだ。 真ん中は大きく、両端の二つははやや小さい。 細いチェーン状の物で、 ロイはつられて笑うと、それを首に回した。 女物だが、 勘弁してくれよ 石のような物が三つ通 鎖は短かったが、 胸

す。 ギンは左手の中指にはめている銀色の指輪を目の前にかざした。 ルゲン、アンゴラ、オルソーも同様にする。 ロイも同じようにかざ

詠唱を終え、手を下げると、 るこの者を見守り給え」 ギンはロイの肩に置いた。

ここに新たな旅立ちが約束された。

気高く、

強く、

勇気あ

「はい」 「常にジエルトンの誇りを忘れるな。 心はいつも共にある」

日を受けながら、 ように、 ロイは力強く答えた。 鳥達が合唱を始めていた。 歩き出した。 4人に深く礼をすると、 両脇の森からは、 振り返り、 旅立ちを祝福する 右頬に朝

「あ~・・あち~!」

っ た。 ない。 がすことは造作もないが、それに使うエネルギーの消費は抑えられ 太陽が容赦なくロイを照り付けていて。 ン達に笑われる。 ギンところへ戻ろうか。 旅立ってわずか三日で、 ロイの中では葛藤が渦巻いていた。 ロイはホームシックにかかりつつあ いや、こんなに早く戻ったらヘルゲ ロイにとって熱を体外に

るくなった水のみ。 安定に揺れていた。 広すぎるせいか人があまり通らないため、 ので、捨てることなく、 ないようになってしまった。 のままなっていた。 木の実や果物の水分で何とか渇きを潤していた。 カリュ ロイの脳裏では、 冷たい飲み水が喉を潤す感覚が蜃気楼のように それもこの三日で雑菌が入り、飲むことは出来 しかし、ここにあるのは太陽の熱にやられ とっておいてある。 しかし、 煮沸すれば何とかなりそうな 道は悪いが木の実は自然 今は、樹になっている ーの山道は こてぬ

「くっそ~、疲れた~」

ロイは、 溜息を付いて果物を戻した。 つを手に取り、かじった。 イはもうひとつ取りだして食べようとしたが、 ロイは布の袋から昨日採っておいた果物を取り出すと、 側の石に腰掛けた。 拳大ほどの大きさで、少し酸っぱい。 ちょうど木の陰になっていて、 袋の中をちらと窺 少し涼 

ここ2 ると、 そこらの物を採って食べるしかない。 小屋から持ってきた食べ物は昨日食べつくしてしまっ 見たことのないものは毒が怖いのでやめておいた。 の こるもの の暑さではなかな 小屋周辺と山頂近いここではなってい が限られてくる。 か遭遇する事は出来なかった。 大体食べられるものは知って 動物でも狩ろうかと思っ る果物が違うの た ので、 そうす たが、 もう

すがに虫を食べようとは思わない。 ロイに吸い寄せられるようにい くらでも寄ってきているのだが、 さ

徘徊していて、こちらと違って獣は夜目が効くから太刀打ちできな ここにいるといつまでも休んで居たくなる。 ロイは膝に手を置き、前かがみになると、 くては。 目標が分からなくなるから、同じところをぐるぐると廻って 夜の森は危険だとガイに教わった事がある。 ロイはキョロキョロと周りを確認しながら歩き始め 勢いよく立ち上がっ それよりも早く歩かな 危険な動物が

を焼く。 み千切るようにして食べ始めた。 次第に模様が分からなくなるほどに黒く焼けていき、 たくなるような臭いだったが、空腹の今のロイは気にならなかった。 た血を木の葉で何度も拭いた。 それから術を使って火をおこし、 っていたナイフで剥ぐと、細かく切って皮をはいだ。ナイフについ なんとそこには体長1メートルほどの蛇が入っていた。 肩に担ぎながら坂を下っていた。 顔もどことなくほころんでいる。 ロイは西の夕日をちらと見ながら、 太陽は西に傾き、 ロイはそこに腰掛け、 辺りを見回した。 見ると、ちょうどよく平らな大きい石が しばらくすると異臭がロイの鼻を突いた。 それは鼻を覆い 暑さも和らいできた。 鼻歌を歌いながら袋の口をあけると、 暗くなる前に寝る場所を探すこ ロイは、 大きくなった袋を ロイは肉を噛 その鱗を持 肉

ばとられてしまうので仕方なく食べていた。 うしておかな 全てすっかり食べ終わると、 めのうちはとても口に入れることなど出来なかったが、 痛そうに顎をさすりながら横になり、 いえるほどでもなく、 小屋でもたまに蛇は出された。 食糧不足のときの緊急だけで、 りと 獣が狙って近づいてくるからだ。 硬かったが、 辺りの骨を森の中へと投げ捨てた。 無いよりはましである。 眠ってしまった。 確かに「美味い その後ロイは 食べなけれ は لح

「おい、こそこそしてないで出て来い!」

辺りを沈黙が包む。 声を張り上げる。 0秒ほど続 周囲にいるのは動物ではなく、 いた後、 そのロイの言葉に動きがぴたりと止まった。 ロイは痺れを切らして行動を起こした。 ロイの額から一筋 言葉を解する人間だという事だ。 の汗が流れた。 その沈黙が2

「出て来ないならこっちから行くぞ!」

その喉元にはロイの長剣が突きつけられていた。 が付いているその陰はあわてて火を消している。 飛び込むと、その影の襟の部分を掴み、グイと引っ張った。 ろう草陰のひとつに投げ込んだ。その場所から自然と火が上がり、 でつかみ神経を集中させると、枝が発火した。それを誰かいるであ 辺りを明るく照らす。 その中に黒い影がうごめいた。 ロイは草陰に ロイは剣を抜 くと、すばやく頭上の枝を切り落とした。 それが消えた時 それを左手 服に火

何の真似だ?」

を開けてロイを見上げていた。 さの残る少年の立ち振る舞いに驚いたようで、 ロイは目を細め、 少し顎をひいて威圧感を出した。 その男はぽ 1 6歳 かんと口 のまだ幼

ガサガサ、と言う葉がすれる音が増した。

「早く出て来い」

ていた。 突きつけられている男を含め、 えなかったのは、 ようやく いその衣装は容易に闇に溶け込んでいた。 観念したのか、 ロイが睨み返すと、 その衣装のせいだっ 同じ格好をした6人の男が出てきた。 呟く声が聞こえてきた。 7人はじっと黙ってロイ たらしい。 気配は感じるが姿が見 いまだロイに剣を のほうを見 真っ

おい、 お前 が言えよ」「 丸焼きにされちまうぞ」 ヤダよ、 怖そうだしよ」 見たか? さっ

は後ずさり、仲間の足元まで下がった。 7人に剣を向ける。 イは白い額の眉間に皺を寄せ、 先ほどまでそれを喉元に突きつけられていた男 左手で頭をかくと、 一歩下がり、

そこのお前、言え!どうして俺を狙った!?」

もりながら返した。 座り込んでいる男を剣で指し、威圧するようにそう言うと、 男はど

弱そうな集団が盗賊には見えない。 ロイの目つきが先ほどの数段悪くなった。 「えつ、えつと、 俺達は、 あの、その • とてもじゃないがこの軟 Ļ 盗賊です

「盗賊?カリューにいて何の仕事がある?」

らだ。 カリュ ーに人は通らない。 果物の採集以外に人が入る理由はない か

行ってたんですが・ そ れは・ • ちょ っと前までお頭が麓の街ケムトに稼ぎに

ので自分で行動したりはしないだろう。 ないのだろう。 ここまで統率の取れていない 1人で盗みに行くような激し その"お頭" いタイプのようだ。 のだから、その はギンのように物静かな感じではなく お 頭 ギンはものぐさな " とやらは今い

それで、その" お頭。というのは?」

で、 敵意は無さそうなので、 っていた男は立ち上がっ 声を低くし、威圧感を出すのも慣れてきた。 ロイは剣を納める。 というか戦意そのものがもうないようなの た。 それを見て安心したのか、6人の足元に座 どうやら7人の盗賊

それが、 週間ほど前にケムトに行ったきり戻ってこなくて

先程よりス が男のひ弱さをかもし出してい ムー ズに喋るようにはなったものの、 ر چ 頬を伝ってい る汗

の一人が、 ロイが左拳を顎に近づけて目線を下げ、 前に出 てきた。 考えていると、

貴方は ケムトを目指してい るんですね?」

はない 目はいかにも温和そうに見える。 ロイは焦点を男に合わせた。 スキンヘッドは威圧的だが、 やはりどこからどう見ても盗賊で 細い その

ままでは我々は飢え死にしてしまう」 「恐らくお頭は捕らえられています。 是非、 お助け願い たい。 こ

7人が揃って頭を下げた。 ロイの眉間の皺が増えた。

それに俺に何のメリットがある?」 「ふざけるな。 自分たちで何もしないで『助けてください』 だと?

しかし、 我々にはそれだけの力量が・ <u>.</u>

ってきた者達が異常なのかもしれない。 人と、世界を救った人物が作った組織の者たちだ。 ろうか?確かにロイが今まで会ってきたのは世間から隔離された村 勇気すらないなんて。それとも、この世の中の人間は皆そうなのだ ロイは失望した。 大の大人が7人揃って、一人の人間を助けに行く ロイが今まで会

背後から襲う気だと推測したロイは、 を柄にかけた。 そうなので歩くことにした。 るのが通常だろう。 先ほどとほとんど変わらない。ここは休んで明日の早朝に歩き始め ロイは踵を返し、 「情けないな。それに気に食わない。もっと必死になってみろよ」 荷物を背負った。まだあたりは暗く、 しかし、 すると、 いつまでもここにいたら怒りを募らせ 7人が短剣を抜いた音がした。 左手の親指で鍔を上げ、 月の位置も

ああ、 さようならお頭

その言葉に驚き振り返ると、 に剣をかけていた。 スキンヘッドの男をはじめ全員で喉元

ちょっと、 やめろ!」

ょ ロイは7人の下に歩み寄り、 と言った自分が必死になっているようでは本当に恰好がつ 必死に叫んだ。 今しがた「必死になれ かな

の言う通り、 お頭がいなくては我々に生きる道はありません。 ここで必ず死ぬことにします」 貴方樣

ていた。 スキンへ ツ ドの男は糸の様に細い両目から涙を流し、 ロイ の方を見

くから」 <</li>. 分かった、 分かっ たよ。 街で" お 頭 " に つ しし て聞い て

要もなく・・ でも助け出してくれない んでしょう?それならばこの命など、 必

まえ~~!!」 分かったってば、 助け出す!助け出すよ!分かったから、 剣をし

で拭うとそれが嘘みたいにニッコリと笑っていった。 7人は剣を鞘に納めた。 一度に叫びすぎたせいだろう。 スキンヘッドの男は涙を黒装束の袖 ロイははあ、 はあと粗く呼吸をし てい

私の名前はリュウコウといいます」 では、よろしくお願いします。旅のお方。 ああ、 申し 遅れ

この態度の変わりようは・・・。

やってるんだ」 あんたら、盗賊団と言うより詐欺師団だな。 で、 何で盗賊なんて

これは。 流行の後ろにいる6人も嬉々とした顔をしているから立派な詐欺だ、

リュウコウが照れくさそうに言っ ええ、 我々は、 まあ言うならば恋敵 でしてね」

た。

はあ?」

ですから、 お頭に惚れて集まっ た連中なんです」

お頭って、 女なのか?」

だとしたら随分と平和ボケした話だ。

ですから」 の彼女が『あたしと結婚したければ部下になれ』 「ええ、そうですよ。 黒くて長い髪が似合う素敵な方でしてね。 なんて言ったもの そ

ボケはボケでも完全な色ボケって事か、 لح ロイは呆れた。

この魔物が出始めてい るっていう時に

頬を赤らめて いたリュ ウコウが怪訝な顔をし て首をかしげた。

してね、 拠はありません。 ませんよ。 というかそもそも私は魔物に襲われたと言う話を聞いたことがあり 貴方がどこからいらしたのかは存知ませんけど、 お 頭 魔物は生きているという噂は立っていますが、しかし根 の捕 まあ、 まったのはそのせいだと思います」 その噂の影響でケムトの警備が強化され この辺り

ギンは『結構襲われている』 魔物自体に知恵があるのかもしれない。 者ならカルコンが狙って襲わせているのかもしれないし、 いから語られていないのか。 それともギンが間違っているのか。 と言ったが、 大きな町は襲われ あるいは てい 前

「で・・・その"お頭"の特徴は?」

それを聴いた瞬間、7人の目つきが変わっ ロイの肩をぐっと掴み、 叫んだ。 た。 髪の立っている男が

またライバルが増えるのか!」 お前、 そんなこと聞いてお頭に手を出すつもりだろう! ?クソ~、

そういうと、膝立ちになり、 両手で顔を覆っ て仰け反り、 苦悩のポ

ーズを取った。

•

まったく、 返す言葉もない。 どこまでもその" お 頭 " にぞっこんら

違う。 何か特徴が分からないと見つけようが無いだろう?

「それは確かにごもっともです」

男だった。 そういって答えたのはさっきロイに剣を突きつけられ たひ弱そうな

さを見せる例えるならバラのような方なのです!!」 お頭は美しく、 強くて厳しいところもあるけれど、 その中に優し

どもらなかった。 心してしまった。 この男、 こんなにスラスラ喋れたのかとロイ

この7人と話しているとおかしくてふきだしてしまいそうだが、 明け いせ、 るどころかもう一度暮れてしまう。 だからそんな主観的な特徴じゃなくて 番話が伝わりそうなリ 日

ウコウにもう一度訊ねた。

ですから、バラのように美しく

それはもうい

な様なことが続くのだろうか。 思わず溜息をついてしまった。 人間関係って大変だ。 これからこん

なんだかな、と思いつつ、ロイは苦笑いをして頭をかいた。 に焼き付けるために私は髪を剃ったのです。 に黒くて長い美しい髪もしています。 ちなみに私と知り合ったのは12の時ですよ。 何が正しくて、何が誇張した表現なのか分からない。 「まあ、背は貴方より少し低いくらいです。 ちなみにその美しさだけを目 これぞ・ 年齢は今年で1 先ほども申したよう • もはや 9です。

ば好んでつけているアクセサリーとか・・・・・ 「俺より背が少し低くて、長い黒髪なんだな?ほかには 例え

敵で、素敵で・ でしてね、 も下げていましたよ。そのお父上と言うのはケムトでは立派な商人 大事に育てられたのだと笑って言っていました。 「そういえば、亡くなられたお父上の写真をロケットに入れ お頭は小さい頃から遊んでもらえはしなかったものの、 またその笑顔が素 て 7

成る程、 ちらと見た。 ロケットか。 ロイは自分の首にかかっているネックレスを

「ああ、そういえば忘れていた。 お前はどんだけ探りを入れるつもりだ~~ その お 頭 " の名前は?

完全に無視してリュウコウの方を見た。 凄まじい苦悩っぷりを発揮した髪の立っている男が復活した。 の体をがくがくと揺さぶる。 相手にしていると話が進まない ので、

ロイは忘れな 弱そうな男はロ シルク、 キリクってい とり ように頭の中で連呼した。 います。美しくて清らかない のほうに顔を向けた。 います。 あなたの名前を教えてください 朝焼けに照らされたその シルクね、 い名前でしょう? シルク。

顔はどこと無く爽やかな感じがするのだから不思議なものだ。

「ロイ=クレイスだ」

「ロイさん、お頭を シルク様をよろしく頼みます」

ロイはわかったと返事をすると、踵を返し、 右頬に太陽のぬくもり

を受けながら歩き始めた。

「このまままっすぐ行けば道があります。その道に沿っていけば夜

にはケムトに着くでしょう!!」

た。 キリクの叫ぶ声が聞こえた。 ロイは振り返らず、左手を挙げて答え

いた。 ちりとした体格の男が出てきた。 ほどあって、もちろんいくら力をかけても開けられないだろう。 大人10人が両手を広げても端から端までは手が届かないであろう 道なりに来たロイの正面に鉄で造られた大きな扉があった。 らに10分以上の時間を費やした。 にも伸びている。 を進めた。 灰色の壁が見えてからその巨大さが理解できるようになるまでにさ かけていた。 の横には対比で相当小さく見える部屋があり、 イの眼に灰色の壁が映った頃には、 近づくと、見上げた首が痛くなるくらい高かった。ちょうど 途中からけもの道が均された道に変わった。 ロイは肩に下げていた袋を持ち直し、 ここを通って東西には行き来があるのだろう。 その壁は街を囲む防壁になって キリクの言っ ロイが近づくとがっ 壁に向かって足 た通り日が沈 道は西と東 横幅は 扉

何か身分を示すものは持っているか?」

がいるらしい。背中に冷や汗が流れるのを感じた。 できないことを確認した。 ロイの方を見ている。 ロイはほとんど何も入っていない鞄をひっくり返し、 どうやら街というのは入るために手続き 門番は訝しげに 身分など証 明

たが、 門番がすっと近づいた。 ロイの左手を見ると、 ロイはたたき出されるのかと思い、 口を開いた。 身構え

その 指輪を見せてみろ」

に戻っていった。 とロイを交互に見つめると、 ロイは中指にはまっている指輪を外して門番に渡した。 無言で指輪を口イに返し、 門番はそれ 小さな部屋

の二つを近づ 石が握られている。 2分ほどして、 けた。 門番が出てきた。 門番はもう一 度ロイから指輪を受け取ると、 手にはなにやら拳ほどの大きさの そ

えっ

音も無く、 門番が持っていた石が光りだした。 黄色い淡い光で、

しばらくお待ちください ジエルトンの方ですか。 失礼しました。 只今門を開けますので、

ないが、 ロイには意味がわからない事ばかりであっ 聞くしかな いので門番に尋ねた。 た。 聞く は

「この指輪でどうして通れるんですか?」

門番は表情を崩さずに答えた。

せん。 扉はからくりで開くようになっているらしい。 の責任者や幹部、 入れると協定で決まっているのです。 この石に反応する銀色の指輪を持つものは許可証が無 盗まれたり、 それと私のような門番だけです。一般人は知りま 壊されたりされぬようご用心ください しかし、知っている ギイイィと言う重苦 < のは国権 ても街に

「さあ、ケムトの街にお入りください」

しい音をたてて扉が開いた。

そうロイを誘導し、 ロイが中に入ると再び大きな音をたてて門が閉

**゙すげえ・・・・・」** 

広がる。 た。 きょろきょろと左右を見回しながら道を歩いていると、 っと歩いてきて疲労はピークに達しているのだが、 と思っていたが、 種の芸術性さえ感じさせた。 びる石畳の道路があり、その両脇にレンガ造りの家が建てられてい 夜の闇に包まれ ので、 波が押し寄せてきた。 話には聞 隙間無く道を形作っている家々と足元 その強固な建物に感動すら覚えた。 いて ている街並みが広がっていた。 どうやらそれは改めなければならないようだ。 いたものの、 ロイは自分に芸術を感じる心など無い ロイは木造以外の家を見たことがな 少し歩くと左右に道が に広がる石畳はある 中心にまっすぐに それ すら忘れ 正面から黒 ず

りを続けながらロイの方へと近づいてくる。 ロイは剣をつかみ、 人の波だと気付いた時にはロイはその波に巻き込まれていた。 臨戦態勢を調えた。 黒い それが近づいてきて、 波はドドドという地鳴

「えつ!ちょ、 ちょっと、 何かあったんすか?」

らい走らされ、 その波に巻き込まれ、踏みつぶされないようにと10 いる男と話すことが出来た。 門が近づいてきたとき、 ようやく隣で一緒に走って 0 メー

「なにかあったんですか?」

「 モンスター だ!町の中央広場にモンスター が出たんだよ!

「モンスター?魔物か魔獣?」

逆方向へと走り始めた。 盛る炎が見える。 りの人の多さにめまいさえ覚えた。とにかく、 男はコクリと頷き、スピードを落としたロイを引き離し ロイが今まで見たことが無いほど多くの人で構成されていてる。 応用で、 ロイは両足に熱を込め、後ろ方向に大きく跳んだ。 家の屋根へと登る。黒い人間の頭髪が作っているその波は その先には夜とは思えないほど明るく燃え 屋根伝いに波の進む 木を のぼる技の て l1 った。

「魔物か・・・?」

ようやく波が途切れ、 地面へと降りると、 目の前にある広場へと走

#### ゴオオオオ

える。 あり、 燃え盛る炎が音をたててうなっていた。 広場は円形になっている。 炎の中にも関わらず蒸発することなく水を放射し続けてい 度胸試しだろうか、 その広場の中心には ちらほら人の姿が見 噴水 た。

゙でかっ!!」

街を囲んでいる壁よりも遥かに高さのある大きな赤い竜が炎を吹 出していた。 はずっ それは近づい しりとしている。 その炎は周囲の建物をにまでうつって てい くロイ の姿に気がつくと、 ロイの体はその竜の足 首をこちらに突き の爪ほどしかな い ් ද 首が長く、

キシャ アアアア

げ出し、 耳を劈く咆哮があたりに響いた。 ロイを含めて3人だけになった。 先ほど周りにいた人々も慌てて逃

「いって~、くそっ」

ロイは耳を押さえながら剣を抜くと竜の体のほうへと走った。

「シルク!!」

突然叫び声が聞こえ、 イの視界が黒くなった。 そう思った途端

後ろへ突き飛ばされた。

と、それを遮るようにして少女が叫んだ。 うと顔を上げると、そこに立っていたのは長い黒髪の少女だった。 がんがんする。 ロイは立ち上がって服を払う。 なんと怒鳴ってやろうかと口を開く ロイは顔をしかめる。 どうやら誰かに突き飛ばされたらしい。 石畳に頭を強く打ちつけたらしく、 文句を言お 後頭部が

「あなた、危ないじゃない!」

危ないのはお前だろうと言いたかったが、 のかもしれない。 りは幾分か年上のようだが)からしてみればロイを助けたつもりな 少女 (と言ってもロイよ

「ぷっ」 ロイが深刻な面持ちで言うと、 俺なら大丈夫だ。 その魔物は俺が倒すから・ 数秒間、 静かな空気が流れた。 どいてくれ」

少女が吹きだした。

がつかなかったが、 そう言い放って振り向いた。 ンスター のことならモンスター ハンター のシュー ト様に任せなさい」 らに視線を向けた。 何言ってんの?あんたみたいな子供が行ったって死ぬだけよ!モ そこには男が1 黒髪の少女の存在に呆気にとられて気 人立っていた。 男はちらとこち

てくれたまえ ああ、 その通りだ。 シルク、 そこの少年を連れて少し下がっ てい

「はい」

シルクと呼ばれた少女は嬉しそうに頬を赤らめ て返事をすると、 

イのほうへと歩み寄ってロイの腕を掴み、引っ張った。

「ほら、ここにいるとシュート様の邪魔なのよ」

歩行に合わせて、 波のように流れる黒髪を見て、手を引かれながら

ロイは考えていた。

シルク・・ ・シルク、え~~と あっ、 そうだ!」

ブツブツと独り言を言い、 突然叫んだ。 シルクはびくっとしてロイ

の方を見た。

「な、何?」

アンタ、" お頭"だろ。 リュウコウやキリクたちが心配してたぞ」

シルクはこれ以上に無いほどの驚いた顔をした。

「何であいつらのこと知ってんの?」

引きずる手は止まったものの腕は掴まれたままだ。 その力は華奢な

体つきにしては強かったが、 ロイは何食わぬ顔で答えた。

カリューの山で会ったんだよ。なんだ、 あんた捕まってたわけじ

ゃないのか。どうして戻らないんだ?」

突然ロイを掴んでいた腕がほどけた。 ロイが掴まれてい た手首を見

ると痣になっていた。

「いてて・・・ん?」

シルクは唇を噛み、ロイをにらんだ。

迷惑なのよ。 勝手に婚約者になって、 勝手にあたしについてきて

•

そう言うと、 そっぽを向 ίĬ た。 ロイには小刻みに震える肩

クの感情を表すものは見えなくなった。

そういうつながりだったのか。 じゃあ7人も婚約者を?

いえ、 キリクだけは親 の代からあたしの家に仕えているの。 後

人はパパが勝手に決めたパパの跡継ぎ候補よ」

が シルクの父親。 人だということだが、そんな連中は結婚相手を親が決めるのだろう 世間のことに疎いロイには分からない。 既に他界しているとリュウコウは言って い た。

た。 は体を起こして地面に座ると、再度ぶつけた頭をさすりながら言っ とりあえず確認のために言っておく。シルクがロイを睨んだ。 「それでさっきからアンタの首にかかっているのが父親 の写真か?」 ロイ

ウコウが言っていたがかなり凄い商人だったらし いじゃ ない

シルクはロイを睨み続けたまま言い放った。

シルクの目は潤んでいた。それは家々を燃やし続ける炎に照らされ そんなパパをケムトから奪い去ってしまったんだから」 て宝石のように煌めいていた。ロイは俯き、呟いた。 「そうよ、 いつもいつも人のことばかり気にかけていたの。でも神様は残酷ね たの。 誰に パパはこの2万人もの人が住んでるケムトの街を支え でも優 しい人だったわ。 自分の事なんか後回しにして

ただろうな」 か。 そんなものがいたら俺からみんなを奪ったりしなかっ

シルクは驚き、 る家々を見た。 視 その目はかすかに潤んでいる。 線をロイから外し、 魔物によっ て燃やされ続けて

### ギャオオオオン

立ち上がると、 シュートは筒状の物を手にし、魔物に向けていた。 はっと見た。 ロイの尻は吸い の大きな怒声が轟く。 その大きな魔物に比べて小指の爪ほどに見える人間、 寄せられたように地面に密着する。 剣を握りしめた。 ロイとシルクはその声の方をするほうを するとえり首が勢い良く引か ロイは勢い

「いってぇ・・・なにすんだよ」

頭を掴み、 体を地面に押し付け ているシルクを睨みつけた。

けじゃ 腰に当て、 見かけによらずなかなか力がある。 な いというわけらしい。 言い放った。 シルクはロイを解放すると、 だてに元盗賊団の頭目だっ 両手を たわ

になるだけよ それはあた ト様はプロ のモンスター ハンター なのよ!あなたが行っ しのセリフよ。 素人が手を出すものじゃ な 11 ても邪魔 ね。 シュ

「ふざけんな。 あん な棒で何しようってんだよ

シルクは信じられないという顔でロイを見た。

「あなた、もしかして銃を知らないの?」

「ジュウ?」

シルクの顔が「信じられない」という表情になった。

「呆れた。どんな田舎の村から来たの?」

ボンゴだよ」

田舎であることは否定できない。シルクは首をかしげてい ロイはぼそっと言い放った。 田舎といわれてい い気はしな

・・・知らないわ。そんなところ本当にある 。 の ?

そう言われたロイのほうが信じられなかった。

おいおい、そりゃあアンタの知識が足りないだけじゃ な いのか?」

そんなはずはないわ。 あたしはパパにタンタニア大陸の全ての街

と国と集落を覚えさせられたもの」

ようやくロイは合点がいった。

ボンゴはここ200年ほど外との交流がほとんどなかった

から、記録にはないのかもな」

シルクはため息をついた。

あっきれ た。 そんなことにも気付かないなんてよっぽどのど田舎

ね

むっとしたロイは口を尖らせていった。

「うるさいな。 それ でその" ジュウ" つ てのは何なんだよ

思い出したようにシルクが答える。

って のは、 あ の筒の中に入っている金属の弾を火薬で打ち出す

ものよ。 商人の護身具から剣がほとんど消え去ったのよ。 に持っているのは前時代的時代遅れな武器ってわけ」 人の体も貫通するほど強力なの。 あ れが開発され つまりあなたが手 てからは

· ぐっ・・・」

吹き飛ばすのよ。 し・か・も!シュート様の銃は改良型で、 見てなさい!」 圧縮した空気で相手を

そういって目をやったシュートは銃を魔物のほうに構えてい 「魔物よ、 もと来た場所。 冥界の彼方へ還るがいい

ズドン

腹の部分に当たり、 耳を劈く音が空気を震えさせる。 魔物は後方に吹き飛ばされた。 銃身から出た空気は巨大な魔物の

「すげつ・・・!」

ギンでもあれくらい かのように感じた。 まで最強だと思って いた精霊術が突然脆弱なものになってしまった のことが果たしてできるのだろうか。 ロイは今

## ギャオオオオオオ

える、 残っていた。 去っていた。 かり消えていて跡形もない。 は霧のように消え去っていた。 魔物は切り裂くような悲鳴をあげた。 体を貫くような咆哮。 そこにはホルスター その長い慟哭が静まった時、 焼けた痕跡もどこにもなく、 周りを見ると、 に銃をしまうシュー 大地が、 激しかった炎もすっ 空気がビリビリと震 トの姿だけが 魔物の姿 全て消え

コツ、コツ、コツ・・・

シュー し誇りと勇気に満ちていた。 トがこちらに近づいてくる。 その整っ た顔は無表情で、

夜が明ける。

大丈夫か、少年」

にこっと笑いロイの方を見たシュ トはロイに手を差し出した。 そ

の笑みはギンのそれとは違い、 どこか裏のありそうな感じだっ

立ち上がった。 なんとなく気に食わなかったので、 ロイはその手を借りずに自分で

「シュート様!!カッコよかったです!」

「ああ、ありがとう、シルク」

先ほどの高飛車な物腰とは打って変わって一人の乙女の顔となった きらきらと光っていた。 シルクは、シュートに近づいた。 その姿は朝焼けに映し出されて、

「君の名前は?」

「 コ イ

ロイは短くぼそっと呟いた。

はっきりいって魔物と戦うのは危険だからね、 ロイはむっとし、 「ロイ、か。僕はシュートだ。 言い返そうとした。 君は剣の心得が多少あるだろうけど、 言い返す事はかなわなか やめたほうがいい」

### グギュ ルルルル

シルクは呆れた顔をして首をすくめていた。 腹の虫が限界を訴えていたからだ。 シュート は再びくすっと笑う。

あげよう」 いいよ、 僕も一仕事して腹が減ったし、 ついでに朝食をおごって

それに続く。 踵を返すと、 商店街の方へと歩いていった。 シルク、 そしてロイも

夜が明けて、 白んだ空にはうすい雲がいくつか浮いていた。

シュー 我夢中で食べていた。 とサラダだった。 トらと共に入った喫茶店で出されたのは、 ロイは久しぶりに見るまともな飯を前にして、 拳大のパンが3

「うま~~ い。 おばちゃん、すげえぞ、これ」

りと笑った。 皿を運んできた女性に向かって叫ぶと、 40後半ほどの女性はにこ

那にいってちょうだい」 「坊やは世辞が上手いねぇ。 でも料理を褒めるなら奥で作ってる旦

た。 カスを気にしながら食事をとっていた。 シルクはというと完全に引 そう言うと、飲み干されたロイのグラスに水を注いだ。 イが食事を終え、手を止めたころを見計らっ てシュートが切り出し いていて、手を止めて眉をひそめながらロイのほうを見ていた。 ロイの食事に唖然としていたシュートは机に飛び散っているパンの 嵐 のような 

君はボンゴというところから来たんだってね」

グラスの水を飲みながらロイは知っているのかと尋ねたが、 トは首を横に振った。 シュ

が、君の為に言っておく。 ないんだろう?」 とをすると身を滅ぼすぞ。 しては長すぎる。 「腰に提げている剣を見ると君は多少腕に覚えがあるみたいだ。 護身用には持っているが、 はっきりいって魔物は危険だ。 それにその剣。 君のような少年が持つに そんなに振ったことも 余計なこ

きたいことがあった。 たっぷりであった。 シュートは顔の前で指を組んでいる。 屈辱を感じたが、 言い返すよりも先に聞 その目は口元に反して威圧 ίÌ てお

なでかい のその銃っての見せてくれよ。 魔物を一撃で吹っ飛ばしてさあ」 さっきのあれすげ えのな。

ど見せたとお それを聞 これはまだ試作品で、 いたシュー りだ」 トは溜息を吐き、 世界中で僕しか持っていない。 ホルスターごと銃を出し 威力は先ほ

· へえ、あんたがつくったってことか?」

設計したのは僕だ」 まあ、 そういうことになるね。 もちろん製造したのは技術者だ が、

どの戦闘を思い出し、これさえあればわざわざ体を鍛え ふーんとシュートの話を聞きながら口 きたあの日々がとても矮小なものに感じられた。 を学ばなくてもい いんじゃないかと思った。 イは銃を凝視し 毎日を修業に費やし て て剣の扱い ١J 先

「副作用とかないのか?」

シュー 一転して真面目な顔になったロイ トは肩をすくめて答えた。 にシルクは少し驚いたようだっ た。

かかる。 これは動力を使って圧縮した空気を入れているから再装填に時間が ないよ。 あとは燃料費かな」 ・・・強いて言えば弾を買うのに金がかかることか

科学という人類の膨大な年月の結晶と、 源が費やされ てようやく力として使うことができる。 材質と言う貴重な地球の

では、精霊術や能力はどうだろうか?

精霊術 実際に使えるロイすらも" はずもな ない。しかし、 きるといっていたが、それはありえないとロイは考えている。 の対価は術者の生命力だ。カルコンは精霊術を科学で証明 ίį 精霊術の正体などロイがここで考えても答えは出る 熱 , も " 風"も人外の技にしか感じ られ 術を で

水鉄砲。 持つものを能力と呼び、 を操る魔物だっているはずだ。 そしてカルコンの持つヒートボー ルの能力やボンゴを襲っ ではな 能力と精霊術に明確な区別はない。 のだろうか? 本当にそうなのだろうか?本当はただ妖怪や魔物の 人間 の持つもの精霊術と呼 唯一異なるのは限界がない きっと h でい **ф** るだけ الم た魔物 う事  $(\mathcal{D})$ 

道 路 脅かした。 考え込んでいた口 の上を走っていた。 ロイがガラス越しに外を覗くと、 イを店の外での八工の羽音の何倍もの大きい音が 大きな鉄の塊が石畳の

なんだ!あれは!!」

た。 それはそうと、 またしても表情が一気に切り替わった あれは車と シルクは何も言わず、 いってね。 君はもう少し社会勉強をしたほうが 僕の銃の燃料と同じもので動 相変わらずのあきれ顔 ロイにシュー で ĺ١ トは溜息を <u>ا</u> ا 61 イを見ている。 て いるんだ。 う しし

シルクが大きく頷いて同意した。 イは見逃さなかった。 ロイに手渡した。 その時、 シュートは小さな紙にペンで字を シルクの表情が凍 りついたのを口

碍にするわけ らないことが多すぎる。 さすがにむかっ腹が立ったが、確かにロイはシュ 尋ねてこれを渡せばきっと仕事をくれる。 「ここに行くといい。僕 にもいかない それに仕事も斡旋してくれ の知人の商人でね、 ので、 黙って頷 にた。 紙に書い • • I 字は読めるよね?」 トの言う通り知 ている親切を無 てある住所 を

を斡旋 していただきたい。 ル・ グリン、 中央3番街221 シュート」 4 こ の 少年に仕

机に視線を向けて 紙にはそう書 てあった。 いた。 顔を上げるとシルクは下唇を噛みながら、

どうかした か?

暗い シュートはシルクに何か囁く。 ロイが訊 顔をして ねるとなんでもないと早口でまくし立て、 た。 シルクはその言葉に頷きながらも、 首を横に振っ た。

気付 一人に礼を言って口 て いる街を眺めながら紙に書かれた住所 イは喫茶店を後にした。 太陽が頂点に近づき活 へと向 かう。

らしい。 が減り、 ていた。 扱いされた。 中央街は先ほどまでロイがいた東街とはうっ つーつが信じられないぐらい大きく、そのすべてが高い塀で囲まれ いらしく、 それと引き換えに車の数が倍ほどもあった。 つまり、 傍から見れば浮浪者に見えるロイの格好は人目につきやす ボ | ル・グリンの屋敷にたどり着くまでに5回も空き巣 この辺りには金持ちが多く住んでいるということ てかわっ さらに家の一 て歩行者の

· やれやれ、やっと着いた」

髄に響く鐘の子が鳴ってから2 た屋敷の戸口に備え付けられている鐘を鳴らした。 ロイは5回、 空き巣扱いされた。 ,3分して門が開けられ 人に聞きながら、 ゴーンと言う脳 なんとか到着 た。

「何の用だ?」

大きな鉄の門を開けて出てきたのは初老の男だった。 イを軽蔑した目で見、物乞いだと思ったらしく言い放った。 ここはお前のようなみすぼらしい者が近づいてい い場所ではな その老· 人は 

老人は皺の入った手でしっしとやると、 門を閉めようとする。 とっとと出て行け」

゙ ちょっ、ちょっと待ってくれよ!」

を老人に見せた。 けだと思 そこまで言うか、 い、ロイ とロイは泣きそうになっ は慌てて男に近づいて、 シュー たが、 ここで引 トから渡され l1 たら負 た紙

「 · · · · · .

老人はその髪をまじまじと見つめ、 貌を見た。 眉を吊り上げてちらとロイ

「 入れ」

ぶっきらぼうにそう言うと、 紙を懐にしまい、 ロイを中へと招き入

迷路 男が椅子にどっ の ような屋敷の廊下を通り、 りと腰掛けていた。 案内された部屋には中年太り 肘掛に肘をつき、 かにも金

持ち風 プにいるのだそうだ。そのグリンは怪訝そうな顔 だ会社を見事成長させ、築き上げた財力でケ 正面に立っている。 は眉根を寄せてその文面とロイを見比べた。 事の老人はグリンに近寄り、先ほど懐に入れた紙を渡した。 の男だ。 名前はボ グリンは人差し指をロイに向けた。 ール゠グリン。 その商才で親から引き継い ムトの ロイは所在なげに男の でロイを見る。 商人連合のトッ グリン 執

「名前は何と言うのかね?」

ないな。 少々高く、 フム、 して、 わかった。 頭に響く声だった。 ロイ。君は何が出来るのかね?」 ほかでもないシュート殿 ロイはすぐに自分の名を言った。 の頼みとあっては断 れ

にシュー グリンの言葉はどちらかと言うと諦めのように聞こえた。 剣の腕なら トは影響力が大きく、 • ロイはみすぼらし く見えるのだろう。 それ

それを言うと執事とグリンは顔を見合わせた。

「フッフッフ・・・ハハハ」

グリンは大声で笑い出した。

したらそれに意味はない 面白いことを言う坊やだな。 んだよ」 剣 の 腕がいくらたったって銃を前に

「でも・・・」

も顔を上げた。 る精霊術はあまり多用すべきではない。 と精霊術を披露するべきか。 はコストだけだが、 ロイは言いかけてやめた。 この男にとって金は湯水と同じだろう。 現時点で分かっている剣が銃 しかし、一応ジエルトンの秘密とされ ロイは拳を握り しめながら より勝る点 となる

には俺の力量不足だったと言っておきます」 ください。 じゃ ぁ テストに落ちたら雇ってくれなくてい 俺をテストしてください。 それに俺が受かったら雇っ いです。 シュー て

グリンはニヤニヤ笑いをやめて言った。

そうか、 そ れは 面白そうだな。 力はなく、 ではこうしよう、 服に色をつける弾を持 こ の屋敷 私 の

だ?」 下を3 人配置する。 撃たれずに木刀で3人とも叩けたら合格。 どう

らえる。 もし、 執事は動揺していたが、 これで勝てれば剣が銃に劣らない証明にもなり、 ロイ にとっ ては願ってもないことだっ 雇ってもも た。

お互いの目を見合うログ「それでお願いします」

お互いの目を見合うロイとグリンを執事だけがおろおろと見比べて

っ た。 中庭の広さは一般 隠れる場所もないので、 的な家ほどで、 ロイには明らかに不利だった。 ペイント弾の射程と同じぐら だ

「さて、それでははじめるか」

ように両足に熱を集めていた。 三人が正三角形の形で取り囲んでいる。 ロイは先ほどグリンから借りた木刀を握り締めていた。 ロイは一蹴りで切り込める そ の周り を

「始めつ!」

走る。 を撃ち出した。 鈴の音が開始の合図だっ 薬莢が弾ける音が鼓膜を叩き、 た。 同時に周りの三人は一斉にペイント ロイに向かって弾が 弾

「・・・遅い」

ペイント弾だからか、 ロイにはそう感じ取れた。 先ほどシュ トの改良型の銃を見たからか、

姿を見失っていた。 ペイント弾が空中でぶつかり合った。 ない。 弾を撃った三人はおろか、 見物をしているグリンすらその その中心にいたはずの ロイは

た。 突然三人の男のうち一人が倒れた。 とわかったのは、 やられた男ではなく倒れてない二人の男の方だっ ロイが男の腹部を薙いだからだ

二つの銃 ろに下がると、 口から弾がロイに向かった飛び出した。 その弾を二つとも木刀で受け止めた。 ロイは一歩だけ後 周囲に赤い

## イントが弾け飛ぶ。

グリンが驚きのあまり椅子から立ち上がった。 そしてペイントが地 面に落ちきるよりも先に男が一人倒れ、ロイが最後の一人の男の後 叩き伏せた。 ろで剣を振り下ろしていた。それは男の肩口に当たり、 男を地面に

腰を抜かし、床に尻もちをついていた。 ロイはニッと笑ってグリンを見た。 グリンはといえば驚きのあまり 「・・・どうでしょう?雇ってもらえますよね?」

ようで、 役目だ。 た。 ドとして働いたのはわずか5回。 ロイがグリン とは言っても仕事はほとんどない。この2ヶ月でボディ 暗殺を目論む者がいる。 のボディ ガードとして働き始めてから2ヶ月が経っ グリンはケムトを代表する商人の それからグリンを守るのがロイの ー ガー

えてくれた。 着る物と食べる物、 グリンは相当ロイが気に入ったらしく、 なみにグリン に子供はいない。 そして屋敷の中に部屋をを用意してくれた。 妻とは昔に死別したのだと執事が教 わが子のように 物を教え、 ち

る ざまざと見せ付けられた。 受け入れるチャンス 品やら何やらが詰められており、グリンの今日の商売への意欲をま 既に車が停めてあり、 その日は遠い国から旅商人が来ており、取引をするからとグリン 夏真っ盛りだというのにひんやりと冷たい水道水は心地がよ ケムトでは商人とは町を守る役割でもあるのだろうか。 座っていた。 ある日のこと。 の発展を常に第一に考えているようだ。 ロイを呼んだ。 **へ間はひと月に一回ほどしか来ない。** とグリンは豪語していた。 ロイは急いで後部座席に乗る。 ロイはすぐにグリンのもとへ行く。 イは太陽と同時に目覚め、 運転席には運転手、助手席にはグリンが既 旅商人、 ひいてはケムトを栄えさせることに繋が シルクの父親といいグリンとい 特に今日のような遠い場所から それゆえに外の文化 そこにはケムト 水道で顔を洗って 家の門 商人は皆町 を多分に の外には -の名産 61 た

グリンさん。ご一緒していいですか」

目のせい そういって車に駆け寄ってきたのはシュー で強く拭きつける風がその黒髪を揺らしてい トだった。 ؏ 季節 の変わ 1)

おお、 シュー 後部座席は狭くてすまない がそれでも良け

ばぜひどうぞ

も大量の荷物を挟んでいるが)に座った。 シュートはありがとうございますと短く言ってロイの横 (と言って

ュートはこの街では救世主のような男だ。 相変わらず上から目線で話す、という言葉をロイは飲み込んだ。 イはこの2ヶ月のうちに流れに身をおくことも学んだ。 ロイ。 久しぶりだね。 どうだい、 敵に回すのはまずい。 仕事には慣れ たかな? シ П

「そういえば、今日はシルクは一緒じゃないのか?」

シュー に助手席に座っているグリンが答える。 トは一瞬気まずい顔をして溜息をついた。 シュ 代わ 1)

あの娘には困ったもんだ。 私ではないというに

グリンが続けた。

話術、 私はあの男にだけは絶対に敵わないと思っていたし、それでもい ようになった私が真っ先に疑われたのだよ」 鉄塔を建てようとしていたときに、 と思っておった。 人の犠牲者が出た。 ロイが首をかしげていると、 シルクの父親がこ どれをとっても完璧な上に、誰にでもわけ隔てなく優しい。 しかし去年の春、 そしてその時資材を提供し、 の街の大商人だったことは知っておろう? それが崩れてあの男を始め50 中央広場に街のシンボルとして 後に名を轟かせる

なるほど・

どうりで2ヶ月前、 クの表情が翳ったわけだ。 シュー トがグリンのことを話したとたんにシ ル

始私を疑ったままだ」 まあ、 街の大半の者は不慮の事故と言ってくれるが、 あの 娘は

グリンは深 い溜息をつく。

定できない僕じゃあ彼女の心を動かせないようですが」 僕も諭 しているんですけどね。 まあ、 その場にい なかっ たから断

いさ・ そのうちあの娘もわかってくれるだろう」

着きま たよ

物を下ろすように指示を出した。 り替えた。 重苦しい雰囲気を運転手の声が打開した。 車が止まると、すぐさま下り、 既に来ていた部下達に荷 グリンは表情をパッ と切

キシャ アアアア

だ。 足にはかなわない。 ロイとシュートは声のした方を見た。 ロイは駆け出した。 ロイは全力で走り、 シュートも同時に駆け出したが、 獣の咆哮。 一目散に声の咆哮へと急い 魔獣か魔物に違い ロイの

「 きゃ ああああっ

見えた。 広場の方から悲鳴が聞こえる。 同じように。 道路の家の屋根に飛び乗り、 同時にはじめの夜と同様に人の波が 広場を目指す。 はじめの夜と

キシャ アアアア

は耳を覆う。 大きく開き、 ロイがその青い竜のような魔獣の目の前に立ったとき、 ロイの目の前で大きく吼えた。 耳を劈くその声に 魔獣は口を

「うるせー!」

剣を抜いたロイはその首に切りかかった。 更に口を大きく開け、 ロイを飲み込もうとするその魔獣の首を避け、

あれええつ!?」

手ごたえは全くなかった。 るだろうかと思っていたロイは、その抵抗感のなさにバランスを崩 着地の際に左手をついてしまった。 硬そうなその皮膚を傷つけることができ 手首が痛む。

丰 アアアア

「え?!」

大きく息を吸い込むと、 本日三度目の咆哮。 青い竜はロイが切り落としたはずの首を振る。 溜めた息を一気に吹きだしてきた。

「うわっ」

で着地した。 その突風にロイは吹き飛ばされ、 魔物とロイはお互い向かい合う形になる。 その魔物二体分くらい の距離の所

「まさか、こいつ・・・」

は剣を抜かない。 ロイは一気に距離を縮め、 拳を握り、 その首に再度躍りか その長く、 あまりにも無防備な首を殴 かる。 ゕ 今度

スを崩したロイの体までもがその首をすり抜けた。 またしても イの攻撃は手ごたえがなかった。 それどころかバラン

でもどこかにあるはずだ」 「・・・これは実体じゃないってことか?これが能力だとしたら、

もう一度ロイを吹き飛ばそうと魔物は息を大きく吸う。 た首の下をロイは悠々と抜けていき、 その胴に剣を突き刺した。 その反り返

グギョ オオオオン

の姿がかすみのごとく消え去った。 魔物は心臓が揺さぶられそうな悲痛な悲鳴をあげた。 次の瞬間、 そ

「ロイ、 倒したのか!?」

シュートは肩を弾ませながらロイのほうへと詰め寄ってきた。 ロイ

は頷く。

銃を取り出した。 とそこは人が1人ギリギリ通れる位の穴が空いていた。 シュートは顔色を変え、 大した相手じゃなかっ 先ほどまで魔物がいた街の壁を見る。 たらしい」 シュー トは 見る

の魔物は狡猾だ。 機を待って攻撃してくるつもりかもしれない。

僕が行く。 君はここにいろ」

そういうと駆け出し、穴へと急いだ。

•

時、同時に炎も消えていたし、何も燃えてはいなかった。街の人々 感がして穴へと駆けた。 の話だと、魔物が出るときはいつそうだと言う。 どうにも解せない。 始めの夜にシュートの銃によって魔物が消えた ロイは何か嫌な予

はあ、 はあ、 は あ

はその運動に由来しない汗が握られており、 こだましている。 山の斜面を息を弾ませながらシュー トは走っ ている。 耳には先ほどの悲鳴が 握られた手に

• ・無事でいてくれよ、 IJ

越え、一定の距離をとりながら涼しげな顔で走っている。 その背後、シュー な位置にロイはいた。そのまま声をかけようかとも思ったが、 の悪い予感がそれを妨げていた。 倒木をシュートと同じように跳び トが無我夢中でなかったら確実に気づかれるよう ロイ

く、うずくまっている魔物に注がれていた。 山頂に達し、 視界が開けた。 しかし、 シュー の視線は風景ではな

大丈夫か、リート!」

ただ、 いる。 であろう。 シュートは駆け寄り、魔物を抱き寄せる。 した顔で見ていた。 その魔物は大きさは人間と同程度で、その姿は熊の様である。 それが熊でないとわかるのは、 もちろん、気付かれないように木の陰に隠れて 手足があまりにも細長い ロイはその光景を唖然と から

ピクリとその魔物が体を動かす。

て Ļ 気がついたか・ • よかったぁ。 ゴメンな、 怪我させ

られた傷だ。 見るとその魔物の肩に傷があり、 血が流れていた。 先ほどロイ

シュートっ

我慢の限界を感じたロイはシュー した面持ちで振り返る。 トの名を叫 んだ。 シュ トが緊張

どうしてここへ ?

シュー はぐうの音も出ないような表情でロイを見る。 ロイ ·は肩を

震わせて叫んだ。

のヒーロー にでもなりたかったのか!?」 街 の人達を騙してた のか その魔物を利用して、 街

な。 れば討伐と称して殺されてしまうだろう」 拾って小さい頃からこっそりと世話をしている。 シュートは真剣な眼差しに戻り、 「否定はしない。 リートはその未熟さゆえに親に捨てられた魔物だ。 こうでもしなければリートは生きていけないから 魔物を抱きよせながら答えた。 ここが人に見つか それを僕が

全く悪びれた様子もない返答にロイはシュー そのかいがあって、この数ヶ月間、この山に近付いた人間はいな シュー トは街 の人々にこの山こそが魔物の住処なのだと説 トを指差して言う。 いてきた。

「 お 前 の しでかしたことを町の人達に暴露する」

怒りをたたえたロイの発言にシュートはピクリと眉を動かす。

来た君、 守り続けてきた僕と、故郷も定かでなく、浮浪者のようにこの街に 「それは結構だが徒労に終わるだろうよ、 どちらの言葉が信じられるとおもう?」 ロイ。この数か月間街を

いた。 やしないだろう。 ロイは奥歯をかみしめた。 シュートの言葉には一理ある。 ロイは少しの間だけ目を閉じ、 **罵声を浴びせてやりたい衝動に駆られ** 言いふらしたところで誰も信じ ゆっ くりと剣を抜 た

「斬る」

げ、 その瞬間、 魔物をかばう。 シュ の顔色が真っ青になった。 ロイの前に両手を広

事だけで命を斬り捨てるの やめろ!!こいつは俺の大切な友達なんだ。 か!?」 お前は魔物だとい う

ロイは躊躇なく剣を抜き、振り上げる。

が見知ってい の友達は全員魔物に奪われた。 いっそ哀れだな、 た人全ては一夜で滅ぼされた」 シュート。 魔物が友達だなんて笑えもしない。 友達だけじゃ ない。 家族 だもだ。 俺

魔物から人々を救う』 なんて目標を立てても、 あの

高く構えた剣を振り下ろす。 惨劇から一年が経過した今でもその怒りは収まるもの して庇った。 シュ - トは魔物を抱きかかえるように ではない。

その時、 っ た。 シュー 魔物が小さく声を上げ、 **!** ダ 1 ジョ 剣を振り下ろすロイの動きが止ま ウ・ ブ

「喋った・・・!」

驚くロイにシュートは言い放った。

れに意思を持った命なんだ」 「魔物は賢い。言葉を教えれば話すし、 字を教えれば書く。 それぞ

溜息をつき、剣を納めた。 ロイはシュートと魔物を見比べた。 踵を返し、 何か考えるように目を閉じ 街の方へと足を進める。

「ロイ・・・・・」

これじゃああいつと同じなんだよな」 気が変わった。 魔物ってだけで全て殺そうとする

ぶつぶつと呟き、もう一度シュートと魔物の方を見た。

は容赦 ・・・・・でも、その魔物が人を襲うようなことがあったとき

見ていた。 ロイは山道を下ってゆく。 その様をシュー トは何をするのも忘れて

言った。 その昼、 ロイが立ち去った後、 IJ トの手当てを終えたシュ トは

うにない。 しばらく街に近づかないほうがい 飯は自分で取れるだろ?」 ίį それと僕もしばらく来れそ

てしまったのだから。 自分のことを見限ったのだろう。 シュートは首を横に振った。 ウン・・ デモ、 ヒトリハヤダヨ・ リートは絶望する。 シュ トの「 イツ ショニイテ? オシゴト」 シュートはきっと を失敗し

「ツギハ、ツギハチャントヤルカラ・・・

た またしてもシュ ートや首を横に振る。 そしてリー トに微笑むと言っ

たら戻ってくるから・ 「そうじゃな 61 خ ただ、 な?」 今はまだ危険かも れない。 しばらくし

声がする。 シュートは立ち上がり、 山道を下ってい Ś 背後からリ の叫び

しかし、 刺さった言葉はシュートの心を縛りつけるように痛めたが、 ヤダーシュー シュートは振り向くことなく下り続け ト!イッショニイテヨ! た。 その背中に突き その痛

みがリー

トに伝わることはなかった。

その夜、 なくあふれ出 IJ して トは いる。 山頂でうずくまっていた。 その目から涙がとめど

トリニシナイ シュート、 シュート・ ッテ ・・・イッタノニ!」 • ・イッ ショニイテクレルッテ、 匕

らし、葉はかなたへと舞って行った。 その時、 一人の人間が立っていた。 IJ **|** の体中の毛がなびいた。 目を向けるとそしてそこには 巻き起こった風は木々を揺

絹も風そのもの 髪、そして見たこともないような薄い絹を身にまとっている。 胸に無性に手を伸ば 後光のように射していた。 風が止むまで、リートは身動きひとつ取れなかった。 の人間へと注がれていて、目をそらすこともかなわなかった。 のようになびいている。 したくなっ なぜかよくわからないが、 た。 その姿は神々しく、月光が その そ の視線は 人間の左 髪も 青い そ

を置 その 人間はゆっくりと滑るようにリー てその唇を開いた。 トに近づき、 IJ の額に手

苦しみを怨め なるドビルジャベリンの子よ。 痛みを怨め、 憎 みを怨め

に意識が遠

魂を、

憎しみに溶け込むような恍惚とした気分が全身を駆け巡る。 声が響いている。 リートは自分の頭に何かが刺さったような気がした。 思いの一切が の人間は少しだけ微笑み、 「ウラメ、ウラメ」と・・・。 リートの顔を覗き込んでいる。 頭の中で 目の前

「ウラメ・・・」

ートがその言葉を発した時、すべてが消えた気がした。

# は部屋のベットに横になり、 天井を見上げていた。

# それぞれに意思を持った命なんだ。

シュー った魔物たちと共存できるはずもない。そう考えていた。 みながらも魔物の撲滅にだけは賛同していた。 トの言葉が頭を何度も掠める。 ロイはこれまでカルコンを怨 人間を滅ぼす力を持

「でも、それは人間だって同じなんだよな」

街の人々が口にしていたそれらの言葉はどれもこれも人間の視点だ。 天井に向かって呟いた言葉は跳ね返ってロイの心に響いた。 カオスやジエルトンらによって奪われた。 人を喰らう。 しかし魔物にだって心は在るという。その魔物は住処を数百年前に 魔物は人を殺す。 魔物はザイガを人間から奪う。 そして今の世の中 魔物は この

人間が魔物におびえる世界がある。

けた戦争に果てはない。 そうしてお互いが滅ぶまで永久に殺し合いが続いていく。 人は魔物から全てを奪った。 だからこそ人間からすべてを奪い 生存をか た ίÌ

けな いんだろ」 どうしてただ生きるだけなのに、 こんなにも悩まなくちゃ

. . . . . . . . . . . . .

突然激 剣を取っ たが、 い音が響き、地面が揺れた。 その剣は腰に装着される前に止まった。 ロイはベットから起き上がり

「どうせリートだよな・・・・・」

部屋のドアが激しくノックされ、 ける前にグリンが血相を変えて部屋に入ってきた。 ても轟音が響き、 そう思い、 剣をベットに立てかけ、 地鳴りがする。 開けられた。 その音に、 また横になる。 男の叫び声が重なった。 こちらからドアを開 しか Ų

「ロイ、魔物じゃ。 すぐに向かってくれ!」

き、手を止めて訊ねた。 ロイは慌てて剣を取り、 腰に差そうとしたが、 おかしなことに気付

「シュートは来ていないんですか?」

グリンは俯き、答える。

「それが・・・」

シュート殿を連れてきました!!」

にでも襲われたような大きな爪痕があった。 こにはぐったりと横たわっているシュートの姿があった。 使用人の声がした。 グリンとロイは急いで声のした方へ駆ける。 胸にクマ そ

直ちに医者を呼んで治療させます!」 「空気銃は紙一重で避けられ、反撃を食らってしまったそうです。

使用人の言葉に、 なってしまった。 しかしロイにはその言葉の意味がよくわからなかった。 「頼んだぞ、ロイ。 グリンが頷く。そして振り返り、 街の者たちを魔の手から救ってくれ ロイに言っ わからなく た。

魔の手?なにが?それはどっちの手だ・ ?

混乱するロイの耳にシュートの呻き声が届く。

「ロイ、いるか・・・?」

こえないように答えた。 ロイが駆け寄り魔物のことを訊ねるとシュー トはか細く、 周りに聞

トだ。 だが、 僕のことがわからない様子だった。 まるで何か

に取り付かれたかのようだ・・・」

振り返った。 ロイは頷き、 立ち上がる。 背後から「僕も行く」と言う声が聞こえ、

立ち上がったシュ その背後で、 ロイは何も言わず屋敷の扉を開け、 シュー ートの足はふらふらで、歩くこともままならない。 トは気を失い、 外へと駆け出した。 崩れた。

むき、ロイのほうを睨んだ。 のように表情 しかし、瓦礫 イがそこに駆けつけたとき。 のある顔つきではなく、 の山の中心に佇むリートの姿があった。 その場に人影は見当たらなかっ 獣のように凍った目で、 先ほどの人間

「ニン、ゲン・・・!」

髑髏に変わった。 そう呟くと、 更に、 近くの瓦礫を掴んだ。 ロイ が瞬きをした瞬間に、 リートは髑髏の山の上に立っている。 拳大の瓦礫は一瞬で髑髏の リートの足元の 瓦礫が全て

# あれがリートの能力か?

その一瞬の変化に戸惑いながらも今までに見てきた竜の姿を思い出 していた。 攻撃も出来ない。 その姿は映像のようなもので、 だが・・・ 当たってもダメージはな

の動揺が、 あることはわかっているが、 リートは髑髏を手に取り、 ロイの抜刀を一瞬遅らせた。 次々とロイに投げ始めた。 その形はロイの恐怖心を揺さぶる。 それが瓦礫で そ

「つう、・・・くそっ!!」

げる。 髑髏が顔に、 その筋力を持って、 塊を全て叩き落せるはずもなく、 ロイは剣を抜き、 腹に、 手足に当たる。 リートは目にも留まらぬ速さで次々と髑髏を投 なんとか応戦しようとするが、 魔物という人を遥かに凌駕した 体に痣が次々に浮き出、 その重い石 血が

き出した。

流石に耐え切れなくなり、 剣を抜き、 度は髑髏は大きな岩に形を変え、 かっているのだが、 い無数の岩が四方八方から飛んでくる。 もちろん幻であることはわ なんとか叩き落そうと身構えた。 瓦礫のひとつでも頭にあたれば大怪我をする。 左右に跳んでそれをかわす。 ロイに襲い掛かった。 すると、 逃げ場のな

「がつ!」

左のこめかみに大きな圧力を感じ、 から頬を伝って血が流れているのを感じる。 左の方を睨んだ。 ロイは右側に倒れた、 ロイはすばや こめ く立ち上 かみ

- グフフ<sub>」</sub>

た れにロイが気を取られている間にロイの左に回り、 立っていた。 そこにはリー と言うわけだ。 トが立っている。 つまりその姿や、 岩はリートの能力による幻覚で、 しかし確かに髑髏の上にもリートは 瓦礫を投げつけ

「・・・・・・くそっ!」

戦闘に特化 なのかもしれない。 能力を最大限に生かす方法を知っている。そしてその知能はやはり、 魔物は賢い、というシュートの言葉が真実味を帯びてくる。 しているものだ。 ならば今の姿は魔物の本能というやつ 自分 の

「なんでだよ、リート・・・」

の中だけで呟くと、 IJ トをもう一度睨み、 深く目をつぶっ た。

悪く思うなよ、シュートー

剣を振り下ろす。 目を開き、 掛かった。 しかし、 のほうへと走った。 IJ トは間一髪でそれを避け、 そしてリー トの脳天めがけて

「・・・はっ!!」

Ļ 一瞬にして、 リートは後ろに飛びのいた。 にしてリートの懐に飛び込み、 あたり一面に熱気が立ち込める。 ロイは一瞬にして体勢を立て直す 剣を突き刺した。 身の危険を感じたの

! ?

でいる。 剣は空を切っ たようにリー ロイの手には皮を突き、 肉を貫き、血が噴出す感触は残らなかった。 トの体を通り抜け、 ロイの手がめり込ん

っ た。 を確認した。 殺気を感じたロイは左に飛び退く。 血が吹き出て宙を舞う。 ロイは自分の血液越しにリ 右頬に三本、 爪 の

いつのまにか4体のリートがロイを囲んでいた。

「・・・なるほど」

流れ出る血を左の掌で、 「はっ!」 ロイは剣を正眼に構えなおした。 - ト本体が目の前で同じ構えをしている。ロイは左のこめかみから 右の頬から流れ出る血を左手の甲で拭った。 能力で作られた三体の映像と、

めた。 かる。 び上がった。バク宙し、 時に、 地を蹴り、 つきたてようとしている。 だが、 背後に気配を感じ、 またしてもはずれ。 同時に残る二体が地面を向いているロイの体の背中に爪を 一番左にいた一体に切りかかった。 爪を振り下ろして隙のできた一体に切りか 自分の運のなさに自嘲気味に口元をゆが 右脚で蹴る。 ロイは残った左足で地面を強く蹴り、 しかし、それも手ごたえな 手ごたえなし。

終わりだ!」

を鳴らし、 抜くと、 中に残った。 リートの左肩めがけて剣を突き立てる。 り上げる方が圧倒的に早かった。 なおもロイを攻撃しようとするが、 吹き出た血が血だらけのロイの顔に飛び散った。 トは顔をゆがめながらその場に倒れた。 こんどこそ鈍い感覚が手の それよりもロイが剣 グルルルと喉 剣を

の魔物は絶命する。 あとは振り上げた剣を勢いよく振り下ろすだけ。 それだけで目の前

ズドン

た。 畳の地面を転がってゆく。 ロイが振り下ろすよりも更に早く、 ロイの手から剣は吹き飛び、 10メートルほど宙を舞って、 人のいない町に轟音が響き渡っ 石

だ。 ロイは驚きのあまり声もなく痺れる手を見て、 その音源を強く睨ん

シュート!・・・なぜここに!?」

シュ た。 るූ 銃を構えたシュートが立っていた。 恐らくあれがロイの剣を撃ち、 は胸をかばいながらふらふらとこちらに向かって足を進め 吹き飛ばしたのだろう。 その銃からは硝煙が上がっ てい

シュー 突然唸り出したリートは立ち上がり、 駆け出した。 「シュー は銃を構え、 切られた左肩をだらんと下げ、 シュー トオオオ リートと向き合った。 シュー トの方へまっしぐらに しかし・ 右手を大きく挙げる。

シュート、 マモッテクレルッテイッタノニ!!」

ゆっ うに両腕を大きく広げた。 そう叫びながら走る魔物を前にして、 くりと瞬きをし、 泣きそうな目で呟く。 目を細めると銃を放り投げた。 IJ トを受け 入れるよ

ゴメンな、リート\_

シュ おも腕を振り上げようとするリー リートの動きが止まる。 の胸に3本赤い傷が走っ トに、 た。 間髪いれず血が吹き出る。 シュートが抱きついた。 な

シュー いた。 吹き飛んだ剣を拾い上げ、その様を遠目に見ていたロイは目を見開 「ゴメンな、 IJ トがその場に倒れた。 トの刺々しい殺気がみるみるうちにおさまっていく。 トがその肩をゆすった。 リート。 一人ぼっちにさせちまって」 胸から血が噴出し、 地面を赤く染めて

ヤダ、 ヤダヨシュート、 オイテカナイデ!

目を閉じ、手を傷口にかざした。 ロイがすぐさま駆け寄り、 シュー トを揺さぶるリー トを突き放した。

「ぐわああああ!」

シュートの悲鳴が響く。 しようとした時、 ロイが叫んだ。 IJ I トが再び殺気を取り戻してロイに攻撃

「 違 う、 傷口を塞ぐだけだ!どいてろ!」

シュー 法だった。 シュー トの傷を熱する。 しばらくすると血が止まり、 はほんの少し目を開け、 カルコンが自分の腿を止血したのと同じ方 左手でリー IJ トがシュ の顔を触っ ートに駆け寄

### 突然、 陣の風が吹いた。

を見た。 月が何倍も大きくなったように錯覚した。 りが闇の空を照らしている。 何をしている、 IJ トよ。 お前の憎しみはどこへ行った」 ロイは立ち上がり、 それほどまでに青白い光 振り返ると、 それ

お前は・ 誰だ!?」

た少年は、 青い髪と薄い衣。 赤い巨大な鳥に乗り、 目を合わせることも憚られるほど神々 ロイを見下ろしている。 い姿をし

ルコン・

お前がロイか。

カルコンがしきりに言っていたぞ」

か?」 讃えた目で睨むと、その少年はロイなど見ずにリー すると奴もディアボロスの一味に違いない。 「人間に飼いならされた哀れなる魔物よ。 自由がいらないと言うの ロイが怒りと憎しみを トを見ている。

上げた。 リートは 人間のようにシュートのみを案じ、 立ち上がって少年を見

カラ」 「イイ、 シュー トトイッショニイキルコトガ、 オレノ" ジユウ" ダ

少年はふんと鼻を鳴らし、再度ロイを見た。

末裔。 アイティオン=カノ 誰だと聞いたな、 覚えておけ」 下賎な民よ。 トリアス。 僕の名はレギュラス。 操 " の術を持つカノトリアスの レギュ

レギュラス」

ロイは口の中で呟いた。 あの少年がカルコンの話の中に出てきた。

魔物を操る術者。だろう。

「お前が、ボンゴを襲わせたのか!?」

ロイは肩を震わせて叫んだ。

고 S S

反対にレギュラスは小さく笑う。

仇とでも称してカルコンを討ち、 「愚かな。 大義の前のほんの小さな犠牲。 ザイガを滅亡させるつもりか?」 小さなお前が何を言う。

祖母の、 したあの光景。 目を閉じればいつまでも映っている。 母の、 尊敬する父の笑顔。 そして・ 村人一人ひとりの笑顔 すべてが無に帰

ロイは目をゆっくりと開き、言い放った。

ルコンに言っておけ。 お前が正しいと信じ込んでいたものは全

時に辺りに熱風が起こる。 部間違っている。 レギュラスは明らかに不快そうにロイを睨むと、 お前の弟子がそのすべてを否定しに行くとな」 何かを呟いた。 同

## ケキャ アアア

で 赤い鳥が叫び声を上げたそれは家一軒を翼で抱きこめるほどの巨大 くちばしは鋭く黄色に光り、 目は爛々とこちらを睨んでいる。

その鳥が素早く下降してきた。

ジジジという音を立てて石畳が唸り始めた。 りかかる。 驚くレギュラスめがけてロイは跳び上がった。 はしだいに収まっていき、 ている。 ロイは左手を大きく振った。 その怪鳥がロイに向かって熱気を巻き起こしているのだ。 秋口の夜風が改めて空を舞った。 ロイの周囲を取り巻いていたその熱気 辺りは陽炎が立ち込め 剣を抜き、 怪鳥に切

飛べ!!」

っていた。 ロイの剣は空をきる。 見上げると、 ロイを見下ろし、 レギュラスを乗せた怪鳥は遥か上空に飛び上が しかしロイは体勢を崩すことなく地面に着陸 必。

様を見ているがい ちは魔物を駆逐し、 見ていろ!じきにディアボロスが目的を達成する日が来る。 お前は何も出来ない。 ただ、 世界が変わりゆく 僕た

レギュラスは怪鳥に何かをささやく。 と去っていった。 怪鳥は叫び声を上げ、 西の空

っ た。 だらけで倒れるシュートと、それを心配そうに気遣う魔物の姿があ は隠しようもなかった。 街中が騒然として なぜ発狂し、街を破壊したのか・ トが目覚めるまで気が気でなく、仕事も手につかなかった。 ロイは迷惑を掛けたくないと言って、魔物をつれて街を出た。 いた意識不明のシュートを屋敷に運び、 して魔物を庇うのか、どうして魔物はシュートに懐いているのか。 騒ぎが静まり、 いた。 人が大量に集まってきただけに、 ロイのたっての頼みで、 グリンが中心街に着いたとき、 ・・。全くの謎。グリンはシュー 手当てした。 弾圧されかかって その裏切り そこには

ったものの、 医者の話では初期治療は(荒っぽく、 は行方をくらまし、一人はいまだ重体で生死の境をさまよっている。 たが、何一つ進展はない。唯一真相を知っている二人のうち、一人 をすればケムトの住人全員を敵に回しかねない。 その答えを否定しようにも、住人の大半は反感を持っており、下手 落胆したように自室の窓から外を眺めているグリンに執事は言った。 は解らないとのことだ。 やは ij 我々は騙されていたのでしょうか?」 傷自体が大変深く、 出血量も多い。 傷は残るが結果として) よか 事件から三日経っ 意識が戻るかどう

グリンはふぅと溜息をついた。 進展をさせなけ るものとして、 ところへ行ってしまう。 と飛んでいった。 の事態が続いたことはこれまでにない。 このまま尻尾を巻いて逃げることは出来ない。 れば シュートもロイも、 長いこと生きてきたが、これほどまでに不 ため息は風の一部となって窓の 溜息でさえも自分の知らない しかし、 ケムトの街を守 何か

えば エル グトル の娘、 シルクはどうした?」

ります。 かったと使用人が言っていました。 自宅に倒れていたとのことです。 • 失敗でしたな」 現在病院に搬送され、 ここ3日何も食べて 意識もあ

グリンを疑うも当然だろう。 大のライバルでもあった。 大商人エル クトル。 グリンが最も尊敬する人物であると同時に、 そんな2人の関係の中起こったあの事故

だが、 男を[ 父親が生前に立てた婚約者] と称して送り込んでいたグリン その直後、 って出た。 それからグリンは償いと言うわけでは のうちは「それで気が晴れるなら」と考え、護衛の為に何人もの 付近の盗賊集団が快く思っていないと聞いた。 そして、ライバルの一人娘を守る責務を自分に課した。 シルクは盗賊と称してグリンの仕事の妨害を始めた。 ないが、 ケムトの守護者を買

葉巧みに街に引き込み、 さほど腕がたつわけではない少女を盗賊団から回避させるため、 に残らせた。 護衛の7人には盗賊団の牽制のためカリュ

シュー やって来て、その日のうちに出てきた魔物を倒 これにはシュートを利用した。盗賊団の動きのほんの少し前に街に の事件が起こるまでは・ シルクをお姫様とするのならば、さながら憧れ 一番苦心したのが、 たところだろう。 トを慕っていた。 実際、 どうやってシルクを街に引き込むか、 全てが上手く回っていたのだ。 グリンが想像するよりも遥かにシルクは の白馬の王子様と言 した。 顔も頭も 3 日前 だっ ſΪ

シュー 団とシルクと 人々を利用していたのと同様に、グリンもシュー 、々のようにシュートを責めることは出来ない。 トの詐欺はシルクの耳にも当然入ったのだろう。 の抗 争を回避させることが出来た のだから。 トを利用 シュート グリン が 街

形だけ のヒーローでなければよかったのだが・

今から娘に会い に行く。 車を出してく シュ も病院

に連れて行きたいが、それは出来んからな」

執事は頭をたれて部屋を出る、 へと向かう。 すぐに車が用意され、 グリンは病院

コンコンッ

「どうぞ」

ガチャ、キイイ

な窓があり、そのそばに白いスーツのかかるベッドがある。 木製のドアがうち開きに開かれた。 トに身を起こして座り、窓の外を見る黒髪の少女の姿があっ その12畳ほどの部屋には大き そのべ た。

「グリン・・・・・!!」

ドアを閉めた。 リンは溜息をつくと、 アの側に立つ初老の男を見て、 廊下にいる執事に二人で話がしたいと言って 敵意むき出しの表情で睨んだ。

はない」 好きにすればい ほっほっほ、と笑ってみせるグリンを見て、シルクは下唇を噛 「それはちがう!おぬしの父親は事故で死んだ。 そんな顔をするでない、 わかったわ、 パパみたいにあたしも殺すつもりなんでしょ いわ、 もうあたしには何も残ってな 折角の美人が台無しじゃ わ ぞ しがやっ L١ んだから!!」 た事で う!?

グリンは真面目な顔をしてシルクを見据えた。

「嘘よ。そんなの嘘に決まってる」

シルクは口の中で嘘と何度も呟く。

わしが今日ここに来たのは、 おぬしに謝るためじゃ

「え?」

シルクは怪訝な顔でグリンを見た。 リンは床に両膝を突き、 頭を

床に当てた。ゴツンと言う音が響く。

「すまん、本当にすまん」

「え?え?」

ルクはわけもわからずおろおろとする、 グリンは膝を折ったまま

を許すことも憎むことも出来ないでいた。 葉が嘘だとは考えにくい。だからこそ、 全て話した後、もう一度グリンが謝る。 シルクも何を言えばいいのかわからない様子だった。 今まで目の敵にしていた男 そのままグリンは顔を上げ 今の言

「えっと・・・・・顔を上げて、グリンさん

かったが、 懺悔するようにグリンは背後から光の差し込むシルクを見た。 老獪ゆえに謀略を練り、若者の心を深く傷つけた。 グリンは申し訳無さそうに顔を上げる。 目には涙がたまってい クは自分の三倍生きた男の涙を見て、 何を言えばいい 膝の上に置いた手を見ながら口を開いた。 その罪の意識に のかわからな シル た。

は事故で死んだんだって事もちゃんとわかってた。 「・・・グリンさん。 んでないと悲しみに押しつぶされそうで・・ しね、本当はグリンさんがやったんじゃないって分かってた。 あたしも謝るわ。ごめんなさい。 • でも、誰かを憎 パパ

でもね、 じゃなくたって、あたしの愛しい人だもの」 と申し訳無さそうに立ち上がり、シルクの顔を見た。シルクが言う。 グリンは鼻をすすり、裾で涙を拭った。 ってただけなんだって。それじゃあ前に進めないんだって・ 「シュート様が目覚めたら、 に負けちゃって。それで気づいたの。 いはずなのに、どうしても憎めなかったの。そしたら悲しみ シュート様のことだけは憎めなかった。 あたしに教えて。 あたしは悲しみを憎しみで覆 シルクが「立って」と言う モンスター ハンター 今度はちゃん と憎

こえる。 そして恥ずかしそうに笑った。 リンは肩をすくめ、 執事が「仕事の時間です」とドア越しに声をかけた。 親友の娘とゆっくり語り合う時間 ドアを開けた。 微笑む。 背後から声がする。 シルクもくすっと笑った。 コンコンとドアをノックする音が聞 きない のかり グリンは

グリンはドアノブに手をかけたまま振り返った。 グリンさん!!」

ありがとう」

ずか一年後に一生を終えた。 グリンは目を見開く。 されていた。グリンが22歳、 の最愛の人。 いるのはシルクなのに、別の女性の影が重なった。今は亡きグリン 昔から病弱で、二十歳まで生きられるかと医者に宣告 風になびく黒髪と年頃の美しい少女。そこに 彼女が18歳の時に結婚し、そのわ

グリンは溢れ出しそうな涙を溜めるように上を向き、大きく深呼吸 て目をつぶった。

今でもこうすれば会うことができる。 瞼に映る愛しい人。

っでは、

また」

た。 グリンはシルクに微笑んでそう言うと、ドアを開け、 部屋を後にし

パパ、グリンさん、ありがとう」

再び窓を見て、 今まで愛してくれて。 守ってくれて・・ 風を浴びた。その頬には一筋の涙が流れていた。

ゆっくりと目を開けた。 に風が舞 時を同じくしてグリン邸。 い込んでいた。 その風に誘われるようにして、 日ざしを避けるようにして作られた部屋 シュー

シュー がついた。 いたシルクの家のたたずまいに似ている。 トは部屋を見渡してすぐさまここがグリン邸であることに 質素ながら格式があるつくりで、 どことなく間借り

まったこと、 そしてすぐに思い出す。 、ぐに頭を回転させた。 街人を騙していたことがばれてしまったこと。 自分がリー 1 によって受けた傷で倒れ 7

# ここにいてはいけない。

! ! \_

階段を登る足音が耳に飛び込んできた。 に見える入道雲は、 大きく開けた。 でがくがくと震えている。 シュートはベットから起き上がった。 けた自分はよくても懲役刑、 とこの部屋に近づいてくる。 しかし背筋を凍らせるのに十分に強く聞こえてくる。 風は止み、 押しつぶされそうな圧迫感を放っていた。 汗ばむような陽気が全身を襲った。 奮い立たせるように両足を叩くと、 それは死神の笑い声のようにかすかに、 下手すれば死刑になりかねな その両足は運動不足と恐怖と そして、 その音はゆっ 街人を騙し続 ίÌ 遠く 窓を IJ

シュート!!待てっ!!」

その背後からの叫び声と同時に窓枠に足をかけた。 そのまま振り向

きもせずに跳び降りる。

て屋敷 着地の瞬間に辺りの芝がなびいた。 ことはなかったので、足の痺れの回復を待たずに、 っていたらしく、 下が芝生だったとはいえ、長い間動かさなかっ の塀の方へと駆け出した。 衝撃がビリビリと伝わってきた。 2階から地面まで3~ た両足は相当弱 転がるようにし 幸い足をくじく **4メート** 

その時、上から声が響いた。

まってやることは出来ん 「待つんじゃ、シュート!外は危険じゃ!ここを出たらお前をか !!! <

シュー た。 ンが叫んでいた。 トの足がぴたっと止まる。 シュートは体をグリンのほうへと向け、 飛び降りた窓からは血相を変え 訊ね た

「どういう・・・事ですか?」

手は震えていた。 を使わずに済むかもしれないというほんのわずかな希望 右手は部屋の机の上においてあったホルスター を触れ その様を見て、 グリンは悲しそうに事の顛末を話 て の中、 しし . る。 その そ n

ある。 じっと黙って聞いていたシュー 片もない言葉が脳 グリンは押し黙った。 ない事実です。それを償わず、このままのうのうと生きてゆけと?」 用しようが僕はこの町の何万人もの人を騙した。  $\neg$ それでは、 わしはこ 僕の罪はどうなると言うのです?あなたが僕をどう利 の罪を償い と言うわけじゃ。 裏によぎっ 若いからいいじゃないか。 たい たが、 んじゃ」 トは顔を上げ、 おぬ 口には出さなかっ しを利用していた罪が私に グリ そんな説得力の欠 それは疑いようの ンに言っ た。 シュ も

「それでは」

は悲しそうにグリ

ンを見て、

と言っ て踵を返した。 グリンは窓枠に手をかけ、 身を乗り出

シルクのことはどうなる!?」

歩を踏み出したシュートの足がピタッと止まる。

シルクを騙したことは罪ではないのか!?それを償わずに死ぬの

シュートがもう一度グリンのほうに振り返った。

はそれを投げ出すと言うのか!?」 「あの魔物もそうじゃ!一緒にいると誓ったのではない のか?お前

だ。 ゴホゴホと咳き込む。声を張り上げるのは老体には相当応えたよう

「シルクと リートは今どこに?」

間髪いれずシュートが尋ねた。

シルクは今こちらに向かってきておる。 あの魔物のほうは

・ロイと一緒に消えたまま、まだ行方が分からん」

さい そのように見えた。 シュートは足元の風になびく草を見つめた。 「分かりました。 ・・・でもけじめはつけたい。手錠をかけてくだ 突然顔を上げると、グリンに向かって叫んだ。 少なくともグリンには

グリンは目を見開いた。 使用人の一人をシュートの下へ行かせ、 しかし、シュートの目を見て、 手錠をかけさせた。 静かに頷い

本当に ١١ のか?

シュートは先ほどまで眠っていた部屋に連れて行かれた。 の中に居たグリンに問われ、 静かに頷いた。 その部屋

シルクが先ほど到着した。 応接間に行こう」

首を振って言う。 にその女性を神々しく見せていた。 齢の女性を見る。 使用人の一人が扉を開けた。 でつながれた両腕に驚き、キッとグリンを睨んだ。 大きな窓から光が差し込み、 シュートは自分のほうに振り向い シルクはシュートを見て、 さながら後光のよう グリンは その

の指示ではない。 シュ ト自身の依頼でな」

に座る。 その 重く響いた。 シュー トはソファ に誘われ、 やり取りをじっと聞いていたシュートの背中を使用 グリ ンと使用人は部屋を後にする。 腰を下ろした。 閉じる扉の音がいやに シルクはその向かい側 人が押した。

沈黙が流れる。 をうかがうと、 シュー 今にも泣き出しそうな顔で俯いていた。 トが申し訳無さそうにチラッとシ ル クの表情

## これが僕の罪なんだ。

だが、その夢のような時間もこれで終わり。 シュー すぐに変わった。 来させた。 ら出ればそれで良いと思っていた。 トは思う。 シュー トには出資者が必要だったからだ。だが、それも 最初は彼女が富豪の娘であることを知ってついて 利害なんかじゃなく、 純粋に一緒に居たかっ ここに来るまで、 街か た。

目の前 しかし、 シュートは目をつぶった。 の人。言葉に出来ないほど傷つき、 この表情がシュートの罪を再認識させる。 シュー トを怨んでいる。 明るく、 愛し

シルク、お願いがある」

その顔を見つめている事がかなわなかった。 シルクが顔を上げた。 スター から銃を抜く。 その目には涙がたまっていたが、 ハンマーを上げ、 シルクに差し出した。 つながれた両手でホル シュー トは

これで僕を殺してほしい」

シュー う形に動く。 シル クが驚いたように目を見開いた。 トはー 聞かせる。 それは聞き取ることも出来ないほどにか細い声だった。 度大きく深呼吸をした。 シルクの目を見るように自分 震える唇が『どうして』 ح 1 ا

僕が罪人だからさ。 罪の果てに待つのは罰。 僕は罰を受けなけ ħ

ばならない」

生きて行ける。 ぼんやりと見える彼女の顔にはどんな色が浮かんでいるのだろうか。 シルクの目を見ているものの、 リートのことはあいつの勘違いだ。 そして街人たちは僕が死ねば納得するだろう。 もはや焦点は定まってい それにあいつはもう一人でも なかっ そし

シュー トは一度言葉を切り、 心を落ち着かせた。

解放してくれ」 そして僕を最も怨む君に僕の命を捧げよう。 さあ、 僕を大罪か

ち、 シュ に当たるように頭を下げた。 銃口をこちらに向けている。 トの手からおもりがなくなった。 すぐに死ねるように全身の力を抜く。 シュー トは目を閉じ、 シルクはシュ 銃口が眉間 トの銃を持

### パシン

と涙を流していた。 ートは驚いて顔を上げ、 火薬の爆発音はしなかっ た。 痛む頬に両手を当てた。 その代わりに左頬に痛みが走る。 シルクはボロボロ シュ

とを知らずに流れ続ける。 シュートは茫然とシルクを見る。 「許さないわよ!全部捨てて逃げるなんて絶対に許さな その目から溢れる涙はとどまるこ L١

そんなのは償 死んで全部終わりにするなんて、ただ逃げてるだけじゃ いでもなんでもないわ!!」

頬を押さえたまま言った。 ルクは嗚咽を漏らした。 涙がぽたぽたと零れ落ちる。 シュ トは

その気は失せた。 瞬言葉を飲 僕にどうしろっ み込もうとしたが、 ていうんだ?僕は 顔を上げたシルク 僕に の目を見ると、 は

が焦ってあたふたする。 止まりかかっていたシルクの涙がまたしても溢れ出した。 僕には君に怨まれてまで生きていく理由がない」 シュー 1

今度はその動きを目で捉えていた。 「だからつ、 その銃で僕を撃ち殺してくれ!!」 左手が上がり、 振り下ろされよ

うとしている。 うとしたが、 シュー 長年の経験から、 トはそれを必死にこらえた。 シュートの手が無意識に体を守ろ

#### パンッ

再び乾いた音が響く。 ている事だろう。 自分では見えないが、 両頬とも真っ赤に腫れ

てあたしが怨んでるって思い込むの?」 どうしてあなたはそうやっ て いつもし 人で抱え込むの?どうし

「・・・・・・え?」

シュー の思考が止まった。 顔を上げる。 ただシルクの嗚咽だけが

シュートの脳に響いている。

「だって、僕は・・・君を・・・」

「怒ってるわよ!!」

間髪いれずにシルクが叫 んだ。 その目にたまった涙が止め処なく

ふれ出す。

死んで生きる希望をなくしていたあたしに光をくれた。 言って欲 あたしはあなたに信頼されたかった。 しかった。 でも、 怨んでなんかいな あたしにだけは本当の事を 11 තූ あなたはパパが あたし

きる喜びを教えてくれた。 だから、 だから・ •

つのまにかシュートの目にも涙が滲んでいた。 の女性は いっそう美しく見えた。 涙を通して見た目

だけど どうすれば いんだって言ったわね。 勿論絶対ってわけじゃ

ンルクが頬を赤らめる。

合っていけるはずだから」 あなたはあたしに罪を償いたい。 きっとあたしたちならお互い支え 「あたしと一緒に生きて欲しいの。 あたしはあなたに恩を返したい。

らを見ている。シュートは静かに口を開いた。 シュートの頬に一筋の涙が流れる。シルクを見ると、 微笑み、こち

約束する・・・・・絶対に」

シュー 近の小さな洞窟の中に入った。 いたかごに入れていた。 いる。じっと壁の方を見据え、ロイに背を向けている。 トが目覚めた日の昼。 かごをいっぱいにして坂道を登り、 ロイは木から果物をもぎ取り、 中には毛むくじゃらの魔物が座って 頂上付 持って

「なあ、 上手く溶け合っていて美味い。 そういってかごに入っていた果実の一つをかじった。 リート。 もういい加減喋ってくれよ。 これで3日経つぞ 酸味と甘みが

「なっ!一緒に食おうぜ」

そういってかごを差し出す。 たままこちらを見向きもしない。 しかし、 IJ は相変わらず背を向け

やれやれ、困ったもんだ。

だっ た。 た物を食べてはいるみたいだが。 街に入れるはずもない。 シュー トの容態を探ろうとしたが、不可能 殺気立っていた。ロイも一緒にいるところを見られてしまったから、 事件から3日。 街に近づくとシュー 置いといたバスケットは空になっているからロイが持ってき おまけに無理やり連れてきたこの魔物は一言たりとも喋ら トと魔物を探せと、 街人たちは

に行く。 「リート。 お前はどうする?」 多分そろそろシュ ı トが目覚める。 そしたら俺はケムト

「 · · · · . . .

ロイは溜息を付いて果物をほおばった。 その時、

「ロイ〜〜!-

だった。 ガサガサと草を掻き分ける音がする。 ロイは立ち上がって洞窟の中から出た。 そして草を踏む3人分の足音 グリン邸の若い使用人たち

おお、 ロイ。 やっぱりここに居たのか。 シュ トさんの言う通り

だ

チラッと振り返ると、 「どうしてここに?」 IJ トがこちらをうかがっ

7

なるほど、気にはなっているんだな。

連れてくるように、と」 シュートさんが目覚めた。 それでグリンさんがロイと魔物を街に

が合うと目線をそらした。 今度はバッと振り返った。 IJ トは少し顔を綻ばせたが、 ロイと目

く分からないけどそういう力があるんだろう?」 「分かりました。準備が出来次第行きます・ 了解した。ああ、あとあれだ。魔物は人間の姿に変身しろよ。 と伝えてくれ」 ょ

「ああ、わかってる」

た。 なかったので、元々持っていたものを使わなければならなかった。 「行くぞ、リート」 ロイは洞窟の中に戻り、リートに声をかけると、自分の荷物を担い ロイは頷いた。それを確認すると3人は踵を返し、坂道を下っ 荷物の中身はここに来た時よりも軽い。水は少ししか手に入ら

そのまま一瞥もせずに山を降りた。 いる。後ろは見なかったが、足音がしたので、どうやらついて来て いるらしい。 ロイはふっと笑って足を進める。 太陽は頂上より少し傾き始めて

「グリンさん・・・久しぶりです」

に入り、 グリン邸の門の前に群がる人々は予想以上に多く、ここに商人の姿 に変身させたリートと入るまでに15分もかかった。 ハアハアと肩で息をしながらロイは屋敷の玄関でグリンに挨拶した。 扉を開けると、グリンが出迎えてくれた。 何とか門 の中

おお、 トが目覚めてな。 ご苦労だったな。もう聞いていると思うが、 して・ 今朝シ

グリンは ロイの後ろに立つ長身の男に向き直った。

あろうな?」 おぬしがリ ト か。 シュートから聞いておる。 もう大丈夫なので

前に出たらまた暴走するかもしれないので、その時はロイが全力で 止めなければならない。 リートは何も答えず、ロイが代わりに答えた。 もっともシュー の

が入ると、立ち上がって駆け寄ってきた。 で紅茶を飲んでいた二人の陰があった。その内の一人は、 応接間は一階の奥の部屋にある。 シュートは今客間に居る。 シルクも一緒だ。 その扉を開けると、 さあ、 行こうか 大きな窓の側 ロイたち

- リート!!」

廻って背中を押す。 ロイの後ろでリートの体がびくっと震えた。 シュートはリートの両腕を掴んだ。 ロイは IJ の後ろに

かったから少し間を置こうと思ってただけだったんだ。 「ゴメンな、リート。お前を一人にして。ロイがバラすかもし ホントにご

震えるシュートの肩にリートが手を置く。

ケニシタカラ。 ウウン、 リートガアヤマルンダヨ。 ゴメンネ」 シュー トヲコンナニキズダラ

シュートが顔を上げ、にっこりと笑った。

「そっ 許してくれるのか・・・。 よかった」

二人が抱き合っている間に、 いつ、どうするって?」 ロイはシルクの方へと歩み寄ってい た。

シルクは口元に近づけていた紅茶を上品に置き、 答えた。

一生かけて償うって言ってくれたわ。 けど」 これからどうなるかは分か

· そっか」

それよりアンタはどうするの?このままここに居続けるわけじゃ でしょ · う?」

**゙そうなんだよな・・・・・** 

あたしは盗賊になる気はないから」 まあ、 それはいいとして、 キリクたちは呼び戻しとい たわ。

ロイは 10秒ほど考えて、 ようやく人物像が浮かんだ。

「ああ、 キリクとかリュウコウたちか。 グリンさんの作戦だっ

たいだな」

ロイが忘れていたことに眉を少し吊り上げ、 微笑んだ。

パパが勝手に決めてた婚約者なんて。 に代々仕える使用人の子よ!?どうしてあたし信じてたのかし ロイは3ヶ月前のことを思い出していた。 やはり盗賊というにはバ 「そうね、あたしもほんとのことを聞いたときはびっくりした だいたいキリクはあたしの家 わ。

カすぎるというロイの考えは間違っていなかったようだ。

シルクは頬を膨らませ、 外を見ながら悪態をついた。

「そんな人達に監視させられてたなんて気味が悪いわ」

ロイがふきだし、それをシルクが怪訝そうに訊ねる。

「いや、何かあんたらしいなって思ってさ」

その時、 えた。鍛えているとはいえ、16歳で細身の ったようだ。 シュートがロイの体を抱えあげ、体の場所を自分と入れ替 ロイの耳元でシュートが囁く。 ロイは軽く、 楽に上が

「変なこと吹き込むなよ」

どうやら楽しげに話しているのが妬ましかったらしい。 分かりやす

ι'n

グリンが話しかける。 向き直る。 して、 シュ シュートが答えた。 ı Ļ ロ イ。 ロイはシュー これからどうするつもりじゃ? トの腕から開放され、グリンに

「ひとまず山にいようと思います。 IJ トも俺もここにはいられ

「でもっ!!」

シルクが立ち上がって声を上げた。

シルク、 駄目なんだよ。 君が許したとしても街の 人々は許さない。

数日、 が許してくれるまで待つしかない」 数ヶ月、 ひょっ としたら数年かかるかもしれないけど、

• ·

シルクは押し黙っていた。 いとも思う。だけど・ • 言いたい 事はわかる 認めざるを得な

まだまだ長い人生があるんだしの」 なに、これから決めていけばよいことじゃ。 お前達は私と違って

その視線に気づき、言っ シルクは静かに頷いた。 グリンは少し微笑み、 た。 ロイを見る。 ロイは

バーカギルのジラークってとこを目指してるんですけど

としそうになった。 部屋の中の全員の視線がロイに集まる。 シュートは「頭大丈夫か」と言いたげな顔でロ シルクは驚き、 カップを落

イを見ている。 グリンは目を大きく広げている。

「ロイ、 所だぞ?」 おまえ正気か?バーカギルなんて歩いて1 年以上かかる場

その言葉に、 ロイはバッとシュー トを見る。

ええつ!そうなのか!?」

シュー トは呆れ顔で溜息を吐く。

はホントちっぽけな丘だぞ。 バーカギルまで行くにははその 「そういえばおまえは世間知らずだったな。 カリュー なん て地図で 何百倍

も歩いて、何倍もの山を越えなくちゃならないんだ」 ロイは唖然とした。 世界が広いという事は知っていたが、 それほど

までとは

まあ、 まあ しかし本当に行くのかね ?

いや、 先生に言われたんで」 まあそこに行くまでに世界を見て来いって師 とは 違

なるほど・ まあ行けない わけではない からな。 ほかに目的が

に行くといい」 その砂漠を東に抜けて、 無ければ行けばよかろう。 れるはずじゃ。 とはいえ砂漠越えもまた難儀じゃからの。 北に行けば、 ここから北東の方に砂漠が広がっ 上手く大陸中央の 山を避けら まずは北 てお

「なるほど。ありがとうございます」

ロイは頭を下げた。 グリンはまたシュー トに向き直り、 訊ねた。

' それで、いつ頃出立するのじゃ?」

• ・できるだけ早く、 明日の明朝にでも」

シュー トは少し考え、言った。 シルクは黙ってシュー の横顔を見

つめている。

. じゃあ俺もその時一緒に出ます」

グリンは顎をさする。

じゃ。 ずいぶんと急じゃの。 それでは今夜は宴じゃ まあ、 な。 確かに行動は迅速にが商人のモッ それまでゆっくりしているとい -

シュー は 死に宥めていた。 鼓を打っていた。 今まで食べたことのないような豪華な食事が並び、ロイはずっと舌 いつもの笑顔に戻っていた。 トと ロイの送迎会は人数も少なく壮大とは言えな しかし、しだいに受け入れ始めたのか、 シルクはずっと浮かない顔をして、 シュー トが必 いもの 最後の方 Ó

月が空の上に上り詰めた頃、 各々就寝場所へと分かれていっ 料理はすっかりなくなり、 た。 場は解散と

そして朝日が昇る その少し前

「ロイ!ロイ!!シュートを見ていないか!?」

目を覚まし、 よく開き、 グリンが血相を変えて入ってきた。 まとめ終わった自分の荷物を肩に担いだとき、 扉が勢

「まさか、いないんですか!?」

グ リンが勢いよく首を縦に振る。 ロイ · は 急 い で剣を腰に差し、 部屋

を出た。

り出しそうなロイに言った。ロイが舌打ちをする。グリンが少し遅れてホールに出て、今にも走「あのバカ!まさかもう・・・」

「ロイ、渡したいものがある。裏に来てくれ」

街を出れば広がるのは草原。 いていた。 西に向かってシュートと大柄の男は歩

シュート、 ホントニヨカッタノ?ナンニモイワズニシュッパ ッシ

ない印象を受ける。 その男は ij トが変身した姿だ。 しぐさや表情が何処となくぎこち

. . . . . .

た。 それ以降リートは何も聞かず、シュートの速さにあわせてただ歩い シュートは答えない。 その答えを振り切るようにして足を速める。

かな道に似つかわしくない音が聞こえてきた。 右手には草原。 左手にも草原。 ただ一本の道を歩く。 ふと、 その静

ゴトン、ゴトン

きて、 ると、今来た道から土煙が上がっている。それはしだいに近づいて その音はしだいに大きくなる。 「シュート 少しずつ茶色の馬の姿が確認できるようになった。 シュートとリートは振 り返った。 馬車だ。 す

は幌がかぶせてあり、 馬車にはロイが座っており、馬の手綱を引いている。 結構大きい馬車だ。 後ろの荷台に

しだいに大きくなり、二人の前で停まった。 ロイの姿を確認し、 シュートとリートは顔を見合わせた。 その姿は

「ロイ、どうしてここが?」

皆には一度山に戻るといったし、こんなに早く追い ロイはニカっと笑って答えた。 つけるはずがな

グリンさんがこっちだろうって言っててな。 まあ、 全部お見通し

だったわけだ」

そうか、 とシュートは軽い溜息をつく。 そのシュー トにロイが尋ね

クに別れを告げなくてよかったのか?」 「どうしたんだ?わざわざ黙っていなくなることないだろう。 シル

シュートは真剣な目でロイを見据える。

には言えないよ」 「言ったろう、僕は罪人だ。その業までかぶって生きろなんて彼女

なみにこれがロイとリートの始めての会話だ。 リートは黙って二人の話を聞いていたが、 ふと ロイに尋ねた。 ち

「 コノバシャハドウシタノ?」

ロイはリートのほうを向き答える。

な。 駄賃だって言うからな」 「グリンさんにもらったんだ、 高価だからって断ろうとしたんだが、 砂漠までは乗っていくとい シュー に届け物をする つ

「届け物?」

皮製の小さな袋を取り出した。 ロイは思い出したようにポケッ それをシュートに投げる。 トの中をゴソゴソと探ると、 茶色い

「これは・・・?」

シュートがそれを受け取るとずっ しりと重い 感触が した。 中を見る

と、宝石が入っている。

路銀にするといいってさ」

シュートは中をじっと見る。

「・・・・・・どこまでも世話になるな」

ロイは小さく笑いながら言った。

ケムトに戻ってきたらうちで働いてくれればチャラにする、 って

さ

「そうか」

利のないことはしない。さすがは商人だ。

トはそう思いながらその袋を大事そうに懐にしまった。

「これからどこへ行くんだ?」

ロイが唐突に尋ねる。 シュートは顔を上げ、 答えた。

も対話できるかもしれない。 て考え直そうと決めたんだ。 僕の故郷が西にある。 リートの生まれた山もね。 そう二人で話し合ったんだ」 • • ・それに、 IJ トの仲間の魔物と 度原点に帰っ

「そっか。でもシルクのことはほんとにいいのか?」

い。彼女にとってもそれが一番いいはずだ!」 い質すように言われたんだろうけど、 しつこいぞ!どっちにしろ君には関係ないことだ。 僕は彼女を連れて行く気はな 大方誰かに

そう言うと、踵を返し、ロイに背を向けた。

もう行くことにするよ。 「僕にこれを渡し終えたなら用は済んだだろう?それじゃ せいぜい君も道中気をつけたまえ」 あ 僕は

慌てて後を追う。 不機嫌に早口でまくし立てると、 その背中に向かってロイが叫んだ。 ツカツカと歩き出した。 IJ も

シルクのことが好きなんじゃなかったのかっ シルクのことを裏切るのか!!お前は自分の心まで騙すのか ! ?

シュー なかった。 トの足がぴたりと止まる。 3秒ほど、 3人ともまっ 動か

゙好きに決まってんだろ!!.

シュー かな重みを伴ってロイに響いた。 トが叫んだ。 空気がビリビリと震える。 シュ の思い は 確

でも側に駆け寄ってこの両腕で抱きしめてあげたい 奇跡でも何でも良い。 今すぐにでもこの罪がなくなるなら、 つ

その声は重く、 深く、 厚く、 空気に紛れて世界 の 一 部になった。

「でも・・・それでも僕は・・・

だってさ、シルク」

「え・・・・・?」

せながらも、 シュートがゆっくりと振り返る。 淡い期待を胸に抱いて。 そんなはずはないと心に言い聞か

- シルク・・・・・」

た。 そこには馬車から降り、 こちらに歩み寄ってくるシルクの姿があっ

「ちゃんと聞こえただろ?」

でいた。 ロイがシルクにそう告げる。 した。 シルクはゆっくりとシュ シュ トに近づき、 トは目に涙を溜めて立ちすくん その両腕を首に回

「シルク、どうして?」

涙ながらに尋ねたシュー トにシルクは微笑む。

あなたと一緒にいられるのなら、 あなたは間違ってる。 あたしは誰よりもあなたのことが好きよ。 罪でも何でもかぶってみせるわ」

ったが、 シュー トがシルクの体に腕を回し、 確かに思いは届いていた。 抱きしめた。 そこに言葉はなか

が今まで見たこともないほど穏やかで、そして幸せそうだった。 は一緒に行くことにするよ」 その長い抱擁が終わり、 ような気分にもなる。 「ロイ、 しく思う半面、自分が失ったものを思い出し、 ありがとう。 そう感じてしまう自分がいやだった。 ここまでシルクを送ってきてくれて。 シュートがロイに向き直る。 深い闇に落とされた その顔はロイ 僕たち

シルクの顔がぱあっと笑顔に変わる。 「送ってきてくれてってのは違うんだよ」 明るく眩しい 太陽のように。

# ロイは馬車から降りた。

すわけないだろ?」 一流 これはお前達の馬車だ。 の商人が戻ってくるかも分からない俺にこんな高価なものを貸 次に来た時に返してくれればいいっ てさ。

らこれは商人としてではなく、3ヶ月育てた子への親としての愛情 は底のほうで眠っている。 が分かる。シュートの分よりも少し重い。 「そういうわけだ、これはお前達が乗ってってくれ」 ロイは肩をすくめる。それに合わせて肩の荷物が上下し、 商人は利益のためにしか動かない。 グリンがくれた銀粒の袋 中の重み だか

シュートはフッと笑う。

「なるほど、グリンさんらしいな」

ロイも笑った。

ははっ、 違いない。 ほんとに、最高の人だよ」

とつだけ。馬車の荷台の幌が開き、 がたごとと音をたて、 馬車が行く。 二人の男女が手を振った。 その道に残ったのは少年の影ひ

じゃあな、 ロイ!また会おう!!」

男は叫び、女は手を振る。 で見送った。 はまるで二人が出会った朝日が別れを惜しむかのようだった。 辺りは夜が開け白んだ空。うすい雲が浮いていた。 少年は片手を少し挙げ、 馬車が消えるま

が続き、 ている。 呼ぶほどにも荒れてはいない。その中に一本の道が続いていた。 変わらない光景が、 せ細っているというほどでもない。 百年も人が歩き、 大地が広がっていた。 その先端は地平線の彼方へと消えていた。 茶色い髪に少し汚れた白い肌。 そうしてできた道。 少年の覇気を失わせていた。 草原と言うには赤茶けた土が目立 その少年の前方にも背後にも道 その道を、一人の少年が歩い 華奢な体つきであるが、 その延々と続く つが荒野と ゃ 何

「あっちい~~」

ろ涼しくなっても良さそうだが、 太陽は容赦なく少年を照りつける。 かりに太陽は無休で働いていた。 そんなことは関係ないといわ 夏ももう終わりを迎え、 そろそ んば

「カリューのときよりも暑いな」

るのか、 周囲には誰も 口にすれば暑さが和らぐのか、 いない。 少年は一人の寂 しさを紛らわせようとし ブツブツと言っている。 11

<sup>・</sup>村はまだか・・・?」

男で、 数日前 くるはずなのだが・ その男の話によると、 にこの道で旅 ロイがグリンへの紹介状を書くと、 • の行商人とすれ違った。 もうすぐガルガイアと 食料やら水やらを色々く ずいぶ いう村が見えて んと気前 の 61

でいた。 ロイはそう思 それ がゆっくりとこちらへ近づいてくる。 い返して空を見上げた。 背後の空には大きな鳥が飛ん

「あれは・・・・・鳥か?」

違和感は近づくごとに鮮明になる。 背中に生えた大きな翼。 そして小さな角と牙が生えてい 遠くから見る分には鳥と相違ない。 その生き物には たからだ。 人のような頭部

「魔物だ!!」

せ、 そ は気づいては の魔物は翼を大きく動かしながらロイのほうへ近づいてくる。 正しくは いない。 ロイの進行方向をひたすらに目指していて、 こちらに l1

魔物が羽ばたくたびに風切り音が聞こえる。 のだった。 ついたと思ったのだが、 ロイにはその姿に見覚えがあった。 正しくは人間のような体に羽が生えている 先ほどまでは鳥に顔 が

「ガーレイシャ!!」

ガーレ ていく。 いた。 ジエルトンの 人間の数倍の力を持ち、 イシャはロイには気づかない様子で、 r e a 1 W 0 音波で物を破壊する魔物。 rld」の挿絵に似たような魔物が ロイの頭上を通り過ぎ

ガーレイシャとの差は一向に縮まらなかったが、 ガーレイシャはジエルトンが「要注意」としていた危険な種族だ。 を目指しているのだろう。 が見えてきた。恐らくガルガイアはあの森の中にあり、 解できる魔物もいるのだろうが、あの魔物はそうは見えない。 特に ロイは左手の剣を握 くそっ」 りしめながら走った。 リートのように人間と和 しばらく走ると森 魔物はそこ

を阻む。 見えた。 その森には奥行きはなく、平地の部分を森が覆い囲んでいるように は折り重なって鳥が飛ぶ空を奪い、 数分走って到達した森は見た目よりもずっと鬱蒼としていた。 「はあ、 はあ 森の真ん中にはいくつ まるで城壁のようだとロイは直感的にそう思った。 • かの木造の家が立ち並ぶ村があった。 草は生い茂って獣や人の行く手 しかし、 木々

た。 様は警戒 膝に手をついて息を整える。 顔を上げると、 じて いるふうにも仲間を呼んでいるふうにも見えた。 先ほどの魔物が村 突然頭上から羽ばたく音が聞こえて の周りを旋回している。 その き

「どっちみち村を襲う気のようだな」

枝を魔物に向かって勢いよく投げつけた。 にないので、木の枝を切り、 ロイは剣を抜く。 しかし、 魔物の高さまではどうやっても届きそう 術を使って燃やした。 その燃えている

ゲギャ?

次の第二撃に備える。 とに驚いたのか、少し飛び上がった。 剣を構える。 周りの気温が上がり、 魔物は奇声を発すると、ロイに向かって飛びかかって来た。 枝は魔物には当たらなかったが、 ロイの件と魔物の爪とが交差する。 驚かせることには成功したようだ。 足元の草がしおれた。 魔物はロイがその爪を止めたこ ロイもまた体勢を立て直し、 ロイは

けるだろう。 わざわざ相手が飛びかかってくるのを待たなくても真空波で切り裂 「こんな時、お頭みたいに風の術者だったら楽なんだけどな

ゲギャアアア

魔物は叫びながら飛びかかってくる。

う音と共にその音も止んだ。 が先ほどの音の正体だろう。 その時、 地面が揺れた。 風を切る音がロイの耳に飛び込んだ。 首元には大きな矢が3本刺さっている。 目の前にいた魔物がロイの目の前に落 そして、 ドスッと言 これ

、大丈夫か、少年?」

3人、 村の方から叫び声が聞こえた。 の二人は巨大な剣を背中に背負っていた。 こちらに駆け寄ってくる。 そちらを見ると、 人は手に弓矢を持っており、 ロイは魔物が動かない 屈強そうな男達が

ことを確認すると、 剣を納めた。 男達に向き直る。

弓を持つ男がそう言った。 こうして射殺すことも出来なかっただろう。 「危ないところだったな。 ロイは少しむっとして言い返した。 しかし、君が注意を引いてくれなけ 礼を言わせてもらう」

「別に・・・俺一人でも大丈夫でしたよ」

男達は目を合わせ、大声を上げて笑った。 悔しさを感じていたが、なんとか押し殺した。 ロイ はケムトの時と同じ

「それで、こいつはどうしてこの村に?」

が言う。 男達の笑いがようやく収まった。 にじみ出た涙を拭いながら弓の男

「君は、この辺りの出身じゃないんだね?」

「ボン・・・・・ケムトから来ました」

もう一度嘲笑される勇気は出ず、ロイはそう答えた。 男は頷き、 続

ける。

とその取り合いをしていると言うわけさ」 「この辺りの森の水源はとても豊かでね。 私たちはもう何年も魔物

なるほど・・・どうりで武装が行き届いているはずだ。

「そういえば、君はこの村に滞在するんだろう?ついてくるとい の家に招待しよう」

いた。 5倍近くも高い見張り台がある。 かなく、そのすべてが木で作られている。そして村の中心には家の ほとんどは肌を隠すような衣服をまとっていた。 ほど涼しかった。 太陽は相変わらず容赦なく照りつけている。 村を囲む森が冷気を送っているのだろう。 今は武装した男二人がその頂上に しかし、 家は20件ほどし 村の中は驚 村人の

弓の男はそういってロイを招きいれた。 て中に入った。 「ここが私の家だよ。 どうぞ」 ロイはお邪魔しますとい つ

「あら、リーエン。お客さん?」

中から出てきたのは男と同世代の女性だっ ニッコリと優しそうな笑顔でロイを見た。 た。 男がそうだと言うと、

「さあ、 ころだけどお茶を出すわ。 どうぞ。 あなたは・・ 座って」 ・ロイって言うのね。 何にもないと

ロイがまごついていると、 ロイが口をはさむ間もなくまくしたて、 男がロイの背中を押した。 奥の部屋に入って言っ

「さあ、そこの椅子に座ってくれ」

ようこそ」 それは木製の椅子だった。 「さて・・ ロイ君と言ったかな。 ロイが座ると、 私はリーエンだ。 男はその向かいに座った。 ガルガイアへ

そういって右手を差し出した、 んだい?」 「君はケムトから来たと言ったね。 ロイも手を出し、 あそこは今魔物の被害はどうな 握手をする。

「・・・・・?」

ロイが何故こんなことを聞くのかと怪訝な顔をした。 それを察して

リーエンが言う。

の村の客は2ヶ月に一回来る行商人くらいだ。 東の方はいろいろと聞いたのだが・ この村にいるとどうにも外の情報が入ってこなくて その行商人が先日来

ロイは数日前のことを思い出した。

ああ、 あのドートリアから来たって言う人ですか

そうだ、会ったのかい?」

ロイは頷く。その時、 先ほどの女性がお茶を持って現れた。

「緑茶でよかったかしら?」

っさりしている麦茶と違い、 ロイはまた頷いた。 たが、 ケムトで何回か炒った葉でいれたを飲んだことがある。 ボンゴでは茶と言えば麦で入れるものをさして ほんのりと甘い香りがする。

「リーエン、今日はもう仕事はいいの?

女性は ij エンに尋ねた。 IJ ĺ エンは茶をすすりながら答える。

ああ、 折角旅人が来たんだ。 だから仕事は任せてきた」

女性は腰に手を当て、 溜息を付いた。

まあ、 みんなかわいそうに」

そうして微笑むと、奥の部屋へと戻っていった。

しばらくその姿を見ていたロイが視線を戻すと、 IJ Ĭ エンと目があ

った。リーエンは肩をすくめる。

あれは私の家内、アレルナだ」 やれやれ、私は叱られてばかりだよ。 ああ、 紹介してなかっ

リーエンは微笑みながら言う。 その後思い出したように、

「それでケムトは今?」

と言った。

ないこと。恐らく大きな街を敬遠しているだろう事などを伝えた。 ロイは魔物に関する事件はあったが今のところ魔物に襲われてはい

その一部始終をリーエンは真剣に聞いていた。

なものだ」 村の収益はそれがほとんどで、それでこの村は成り立っているよう ら付近の町や村に用心棒をかわれることも少なくないんだ。 実質、 「そうか。 実は先ほど見せたとおり、この村の者は腕がたつ。 だか

これでようやく合点がいっ た。 生活に密接に関わることならば敏感

になるのが当たり前だ。

「それで・・・」

とリーエンが続けた。

「君はケムト出身じゃないんだろう?」

突然の質問に驚きを隠せなかった。

ことを言っていたからね。 うとするものはいないだろうし、さっき街の規模を比較するような 簡単なことさ。 魔物の被害がないケムトで堂々と魔物に対抗 ケムトよりも小さな街か、 あるい は村か じよ

ら来たのだと思うがどうだろう?」

この男は相当洞察力があるらしい。 ロイが感心していると、 そのま

ま続けた。

それで、 出身はどこなんだ?」

ロイは諦めたように息を吐いた。

「ボンゴって知ってますか?」

ら古い本を取り出した。 か思い出したような顔をすると、 リーエンは顎に手を添え、深く考える素振りを見せた。 ロイに断り、 後ろにあった本棚か 数秒して 何

「あった、あった」

ほど・ そういうと、 していたとはね」 『ボンゴ。 • 飲み干したお茶のカップを脇に置き、 完全自給自足を貫く、 しかし、 この本は100年ほど前のものだ。 タンタニア最南端の村。 本を開いた。 まだ実在

ロイはその言葉を聞くと俯き、 呟 い た。

「もう・ ・・ありませんよ」

リーエンが声をかけようと口を開いた時、 リーエンは目線を本からロイへと移した。 ロイが喋っ ロイはまだ俯い た。 61

「魔物に襲われて、 俺以外のみんなは消えました」

ならば、 を失ってしまう気がした。 ロイはあえて死にましたとは言わなかった。ガイガンの話を信じる まだ魔界で生きている可能性はある。 口にしたらその希望

たのだろう。それ以上の追求はしてこなかった。 リーエンはロイが家族の死を受け止めたくないと考えていると思っ

「そうか、それで一人で旅を?」

ればならないのだが、 ロイは頷く。 ように思えた。 ロイの旅を説明するにはギンたちのことを挿入し 今日会ったばかりの者にそこまで言う必要は

「この村もじきにそうなってしまうかもしれ ない

先ほどアレルナが持ってきたティ ポッ トを自分とロイ のカップに

継ぎながらリー ぶんと軽く言いますね」 エンは言っ た。

ロイはできるだけ感情を殺すようにして言っ た。

ば生き、 ら謝ろう。 からかな、 ああっ、 弱ければ死ぬ。 ただ、 なな 常に死はそこにあるものなんだ。 私たちは小さい頃から戦士として育てられてきた 軽くとかそういう事じゃないんだ。 その考えが染み付いているだけだよ 相手より自分が強けれ 気に障っ た

それでもロイには納得が出来なかった。 のでロイは話を切り替えた。 そんなふうに言える筈がない。 しかし、 親しい人が目の前で死ねば それを追求する意味はない

ろなんですか?」 そういえば、行商人が言ってたドー トリアというのはどんなとこ

題に食いついた。 リー エンも気まずく 思っていたらしい。 渡りに船とばかりにその話

明が発達しているところさ。 シスにある国でね、 「ああ、 ここから東に行くと砂漠が広がってい 私も何度か行った事があるんだが、 でも今は戦争中らし る。 その ずいぶん文 砂漠の オア

戦争?・・・人間同士が殺しあう?」

リーエンが首肯する。

どうかは知らないが空を飛ぶ機械があるのだとか」 とは言ってもどうやら相手は 人間じゃ ないらしい がね。 ほんとか

「空を・・・飛ぶ・・・?」

リーエンは真剣な目をして頷いた。

私も詳しくは知らない のだが・ 魔獣を操り、 心を殺し、

械に改造する事もしているらしい」

物のい しかし辻褄が合わない。 レギュラスの姿が脳裏をよぎる。 ない世界だ。 なぜ人間相手に戦争を起こす必要がある レギュラスの、 あの男ならばそれも可能だろう。 そしてカルコン の理想は魔 のだろ

その相手の国は実質大きな組織の支配下にあるらし んとか」 確か、 デ

を振り絞るように頭を動かした。 ロイが言う。

ディアボロス!」

リーエンがロイに目を向ける。 ロイは身を乗り出した。

知っているのか?」

「ええ、 まあ。 少し因縁が・・

え、踏み込むのをためらうほどだった。足を踏み入れた瞬間に、 ンはそれ以上何も訊ねなかった。 を迷ってしまうかのような。そのただならぬ予感のために、 ロイの両目は深く、暗い。 数々の戦いを経験してきたリーエンでさ 生

「次はそちらに向かうのか?」

ンは続ける。 リーエンの問 いにロイは腕を組んだまま、 コクンと頷いた。 IJ 工

で休んでいくといい」 「ここからは1週間ほどかかる。 砂漠も難儀だしな。 2 、3日ここ

にほぐれた。 そういわれてロイは椅子に座りなおし、 士のその緊張感を解き、 微笑んでいる。 顔を挙げた。 ロイのこわばった顔も自然 IJ エンは

「じゃあ、よろしくお願いします」

リーエンは満足そうに頷く。それから、 たちは対等だ。 だから敬語は必要ないからな」 その敬語は目上の者に使うものだ。私達は戦士、 と言って口 お前も戦士。 イを指差した。

ロイは微笑んだ。

ああ、 わかっ た。 ありがとう」

リーエンはニカっと笑うと、 ロイが2 ,3日泊まるって言うから客間に布団出しといてくれ 奥の部屋にいるア レルナに声をかけた。

数秒して、 返事が返ってきた。

話が住んだなら仕事に戻りなさいよ。 みんな大変なんだ

エンとロイは目を合わせる。 IJ エンが肩をすく 笑っ た。

おーい、 見張り役交替だ。 二人とも休んでくれ

村の中心にそびえる見張りやぐらの天辺に、二人の男がいた。 二人は下から自分たちを呼ぶ声に気がつくと、 はしごを降りた。

「ようやくかぁ」

言うと、 ていった。 二人は一度ロイを一瞥し、 リーエンは頷いた。 リー エンを見る。 リーエンと掌を叩きあい、 耳元でぼそぼそと何か 二人は去っ

「さあ、行こうか」

るたびにぎしぎしと音を奏でるが、しっかりとした作りなようで、 ぐらつくことはない。 リーエンは先にロイにはしごを昇らせた。 木製のやぐらは足をかけ

これならどこから魔物がやってきても大丈夫だ。 を見渡すと、森が村を取り囲んでいる様子が良く見える。 頂上に着くと、そこは下から見上げるよりもずっと高かっ なるほど、 辺り

ほどの種族だ。よっぽどこの土地が欲しいらしい」 「ここ最近、3日に一度くらいのペースで魔物が現れる。 大体が先

赤々と照らされている。魔物の陰は見えない。 ロイは相槌を打ちながら周囲を見渡す。 日は既に沈みかけ、 世界は

しかしたら人里はなれた村は魔物の標的になっているのかもしれな 「この土地を何の為に襲うのか、詳しいことは分からないけど、 も

かせている。 リーエンはロイの方を見る。 ロイは夕日からリーエンのほうへと目線を移した。 夕焼けの光を孕んだ風がその髪をなび

・・・俺は、そう思う」

エンは押 し黙った。 先ほどは故郷を滅ぼされ、 たいそう落ち込

うになったのはいつからだっただろうか。 立ち向かう戦士の目をしている。 りもずっと後になってからだ。 んでいるただの子どものように見えた。 果たして自分がその目ができるよ しかし今は真実を受け入れ、 少なくともロイの年齢よ

ロイは頷く。夕日はいまだその右頬を照らし続けていた。 「魔物が知恵を持って人間の反撃を避けてい ると?

知能が高 「魔物は言語を覚えるし、会話もできる。 いのかもしれない」 もしかしたら人間以上に

を行ったり、 リーエンにも心当たりはあった。 集団を組んだりと計算高いところがある。 確かに魔物には人間 の ように偵察

「しかし」

慌てて太陽の方を見た。 そのとき、 ロイの頬に陰が走ったのをリー エンは見逃さなかっ た。

「魔物だつ!!」

うに太陽を背にしていた。 それも先ほどのような単体ではない。 ガーレイシャがこちらに向かってきている。 数匹、 人間 もしかしたら十数匹の の目を欺くかのよ

「みんな!魔物の群れだ!!」

た。 り少し年上の少年まで、 めた人々が家の中から出てくる。上は50近い男から、下はロイよ リーエンが村全体に響き渡るように叫んだ。 んでいた人々が一斉に家の中へ入っていった。 剣や弓などそれぞれの武器を手に持ってい 外で畑仕事などに勤 数十秒後、 武装を固 U

甲高い奇声を上げながら猛スピードで近づいてくる。 既に魔物たちは森の上空にまで来ていた。 大きな羽を羽ばたかせ、

「行くぞ!!」

に煌めいた。 リーエンは弓を既に番えていた。 ロイも剣を抜く。 長い 刀身は夕日

リーエンが矢を放った。 放たれたが、 左手で悠々とはじかれた。 矢は先頭にいたガー イシャ に向 次い でガー か っ てま

から怒声が上がっ

ゲギャ アアア

それを合図にして、 を作った。 リーエンのほかに弓を番えた男が3人が上っていた。 村人達も臨戦態勢を調える。気がつくと、 魔物は左右に分かれ、 村を取り囲むような陣形 見張り台には

「ロイ、魔物を斬れるか!?」

リーエンは弓を番えたまま叫ぶ。

返事をする間もなく、魔物の一体が矢倉に向かって突っ込んできた。 ロイは手摺に足をかけ、 跳んだ。

「任せろ!」

空中で大きく振りかぶる。そしてそのまま振り下ろす。 を自由に飛びまわる魔物にそんな大振りな攻撃があたるはずがない。 はそれが後先を考えない捨て身の無謀な攻撃のように見えた。 それ リーエンに

はあっ

そこから血が噴出した。 さまに落ちてゆく。 の一振りは凄まじく迅く、そして鋭かった。魔物は地面にまっさか 百戦錬磨のリーエンにもその剣閃を見ることはかなわなかった。 左肩から心臓にかけて真っ赤な線が走っていて、

ロイ!!」

見ると、 トルの高さから無事で済むはずがない。 ロイも一瞬だけ空中に静止し、落下していた。 1 2 , 3 メ

ゲギャアアア

半分ほど落ちたとき、 別の魔物がロイめがけて襲い掛かった。 ロイ

落下の速度が一時的に止まる。 はそ とそうとしている。 の攻撃を見事な身のこなしでかわすと、 魔物は体を一 回転させロイを振り落 その背中を踏みつけ

Ţ 臓を一突きに刺した。 ロイはその背中に必死にしがみつきながら、 衝撃を殺しながら地面に着地した。 魔物は絶命し動きが止まる。 剣を掲げ、 その背中を蹴っ 背中から心

「なあ、リーエン。あいつは何者だ?」

衝撃を全身に分散するようにして着地した。 足をくじいた様子もな

・・・・・・わからない」

も人間とは思えなかった。 を臆すことなく、 リーエンは驚き、 むしろ正面から立ち向かっていく。 ロイを見てい た。 周 りの村人も同様である。 その姿はとて 魔物

「リーエン!!」

先程よりも強く引き、 先ほどと同じのように手で払われる。 倉に向かっている。 その注目の中、 いている。 リーエンはすぐさま次の矢を取り出し、 ロイは リーエンは番えていた弓の標準を合わせ射た。 羽を少しねじった。 Щ んだ。 そして魔物を指差す。 魔物との距離はしだいに近づ 番えた。 そ の魔物は矢 今度は

くらえ!!」

わして弧を描き、 左手に何かが当たった感触はなかった。 抜け、 レイシャはまたしても矢を手で払おうとした。 真っ逆さまに落ちた。 左側から首に刺さっ た。 矢はガー ガー イシャ イシャ しかし、 は途端に力 の爪をか 払った

グ・・ギャアア

首を口 首筋 に矢が刺さり イが斬 りおとす ながらもなおそれを抜こうともがい ている魔物 の

の目は首から先のない 自分の体を一瞬だけ捉えた。 しだい 何

も見えなくなる。

る事なら返り血だらけの顔を洗い、 ロイは魔物の首を切り落とした剣を一回振り、 今はそんなことを言っている場合ではない。 衣服も着替えたいと思った。 血を落とした。 でき

. ここは戦場で、俺は戦士だ」

が奪った命はこれまで祖先の代から何百年もかけて紡がれてきた命 が剣で敵の命を奪ったのはこれが初めてだ。 なのだろう。その重みは胃を揺らし、 リーエンの手前、 の力が抜けてゆく。 意地を張って「任せろ」といったが、 心臓の鼓動を加速化する。 魔物といえども今ロイ 実際に口 体 1

握っていた両掌を見た。 ロイは剣を地面に突き立て、 何とか体を支える。 先ほどまでそれを

真っ赤だな」

魔物の返り血はロイを人間ではない何かに変えたような気がした。 皮を裂き、 肉を切り、 骨を断つ感触はいつまでもそこに残っていた。

「もう、戻れない」

ロイは確信を持ってそう呟いた。 そして両手を組み、 握り締めた。

でも、これが俺の選んだ道だ」

ロイは地面から剣を抜くと、 中の物を全て吐き出したい衝動に駆られた。 立ち上がった。 急に胃がぐらぐらとゆ

「ぐわああああ」

嘔吐した。 ロイは声の した方を振り返った。 その光景を見た途端、 膝をつき、

グガアアア

魔物 鋭い牙にむしりとられていた。 に見えた。 今、この場にいる名前も知らない人々に彼らの顔が映っているよう 血だらけの村。 の奇声が上がる。 ボンゴの最期の光景はロイの脳に強く、 魔物は友人の、 そこにい 知人の命を片っ端から奪っていった。 ロイの脳裏に一年前の光景が蘇る。 た村人は肩から先をガーレ 強く焼き付いて イシャ

「ごっ、がはっ」

強靭な腕によって吹き飛ばされていた。 うずくまっていたロイが顔を上げると、 その村人は上半身を魔物 0

「がはっ、はあ、はあ・・・くそっ」

俺はこんな所でうずくまるために為に生きることを選んだんじゃ い。そう何度も自分に言い聞かせ、立ち上がった。

おおおおおき

剣を振り上げ、その魔物に振りかかった。 の先にその姿はない。代わりに肩に激痛が走った。 しか ĨŲ 振り下ろし た剣

・・・・・・ぐあっ」

見上げると、ガーレイシャは飛び上がり、その足の鉤爪でロイ 間に対する慢心はない。人間の強さを認め、 を引き裂いていた。 ならないことを学習していた。 もはや魔物たちにも村に来た当初にはあった人 全力を尽くさなくて の肩

「くそつ・・・!」

ないか、 魔物を殺すことに意味はあるのか、 ロイは考えていた。 ځ 今だけではない。 それはカルコンと同類なのでは リートと戦った夜からずっと。

否定しても、結局自分は魔物が憎い 今気がつい た。 11 くらカルコ のだと。 ンを怨んでも、 その歩む道を

・・・・コロセ・・・」

誰かの声が聞こえてきた気がし 剣を振 かしもっ と近く、 上げた。 もっ と鮮明に聞こえてきてい た。 勿論村人の声かもし る気もする。 れ

#### ギャアアアア

背後から魔物の叫び声が聞こえる。 ロイはその方向へ剣を、 投げた。

#### グギイイィ

駆け出し、地に足をついて苦しんでいる魔物の目の前に来ると、 魔物の悲鳴が上がる。 の剣の柄をつかみ、 薙いだ。 剣は深々と魔物の腹に刺さっていた。 ロイは そ

\_

っ た。 その魔物が大口を開け、叫ぶ声はもはやロイの耳には届いていなか 代わりに頭の中で声が響く。

「・・・コロセ・・・コロセ・・・」

む声がしだいに弱まっていった。 物の体に手を当てた。そこからしだいに蒸気が上がる。 その声がロイから思考を奪っていく。 ロイは口元をゆがめると、 魔物の苦し 魔

地上で応戦している村人、 さえもその異常に気が付いた。 矢倉で戦っているリーエン、 そして魔物

何だ、この熱気は!!

張り台の下の方から上がって来る。 リーエンは周囲の者と顔を見合わせた、 死んでいるであろう魔物に手を当てているロイ以外は。 下を見ても異常はない。 燃え上がるような熱気が見 ただー

### 何だ、あれは!

なんと、 その異様な光景に魔物でさえも手を止め、 魔物の体がみるみるうちに炭のように真っ黒になってい ロイの方を凝視していた。

「うぐっ」

実際に、 り倒した。 そして、 ロイの近くにいた者たちは、 炭のようだという比喩が間違いであることに気が付いた。 炭と化したのである。 バスッという柔らかい音がして、 その熱気と臭いに思わず顔を覆っ ロイは真っ黒になった魔物 その屍骸が粉々になる。 の体を蹴

#### ゲギャアアア

ッと止まった。 め 弓の標準をあわせることが出来なかった。 村人の活躍で、 村を囲むように旋回した。それはあまりにも速すぎて、とても 残る魔物の数はあと3体。 そして、その動きがピタ その3体は攻撃の手を止

空気が振動していた。 膨れ上がっていった。 に集まっていく。 みるみるうちに、 先ほどまで村を包んでいた熱気が魔物のほう ガーレイシャの胸部が何倍にも

### キイイイイイイン

にあるのかわからないような感覚に襲われる。 ガーレイシャたちは声ではない、 しかし、 いた全ての人間は一瞬戸惑ったが、 ・・くっ」 視界が歪み、 膝をついてしまう。 何かの音を口から出した。 すぐに攻撃しようと構えた。 少しすると、 それは目を回してし 地面がどこ

#### ゲギャアアア

まったときと全く同じ感覚だった。

その音と、 もりだろう。 声が混ざった。 恐らく3体のうち、 2体が攻撃をするつ

(これが、音波攻撃か・・・)

音を拾ってしまっ ロイは耳を塞ぎ、 ぐわああああ た三半規管は、 できるだけダメージを和らげようとしたが、 容易にはそれを拒絶できない。

たのだろう。 ロイの後ろで男の叫び声が聞こえた。 恐らくガー イシャ にやられ

くそっ、このままじゃ

た。 た。 するかのように揺さぶる振動に耐え切れなくなり、 剣を投げつけた。 ロイは左手で耳を押さえながら、 その間にも音は容赦なくロイを襲う。 間を置かず、それがはじかれる音があたりに響い 音波を出している一体に ロイは内側から脳を破壊 地面に突っ伏し 向かって

見ると、 えも驚いたように苦しむガーレイシャの姿を見ている。 さっている魔物に切りつ を貫いていた。村人は顔を上げ、 た。どこからか放たれた矢は寸分の狂いもなくガーレイシャ 魔物の悲鳴が轟く。 いれずに飛び出し、 ガーレイシャの首筋に何かが刺さっている。 地面に落ちていた村人の剣をつかむと、 いつのまにか音波は止んで けた。 魔物はもはや何も発することなく地 その勇者を見ている。 61 た。 それは矢だ 残る2体でさ ロイは間髪 ・の首筋 矢が刺 っ

アアアア

面に倒れた。

耳を劈く叫び声が轟く。 なっているようにも見えた。 かかっていた。 しかし、 その攻撃はあまりにも無駄が多く、 残る二体の魔物は爪を振り上げ村人に襲い 自棄に

グアアア

た。 そのうちー 体が倒されると同時に、 もうー 体も地面に仰向け

190

家を飛び出して愛するものにすがり、 る被害は計り知れない。 辺りは騒然としていた。 ノフ!エル 魔物の撃退には成功したものの、 屋内に避難していた子どもや女、 !」「うわああああん」「スバ 悲しみに嘆いていた。 老人達は それによ

. . . . . .

戦ったとは思う。それでもこれだけの人が死に、または傷付い 語の本の挿絵を見ているような、そんな気分になった。 には敗北感が満ちていた。 ロイは呆然と突っ立っていた。ただじっと、 勝ったか負けたかでいえば確かに勝ったのだが、 グリンに読まされ ロイの心の 自分はよく 7

「ロイ」

から。 失ったのと同様に、 れておらず、 リーエンがぽんとロイの背中を叩く。 険しい顔をしていた。当然だ。 リーエンもたった今、 その表情は未だに緊張が解 親しい人を失くしたのだ ロイがボンゴの人々を か

て来い。 「俺は同士の埋葬をしなければならない。 そのような返り血だらけの服ではいささか居心地も悪いだ お前は家に戻って着替え

ロイは静かに首を振る。 そのたびにガンガンと頭痛が走っ

「俺も・・・手伝うよ」

・・・そうか」

るූ かっ の限界が近い と身を引いた。 リーエンは少し表情を緩ませた。 ロイも目を閉じたが、 ロイもその後に従う。 のかもしれない。 3人で頭、 その途端に倒れてしまいそうだった。 腰 数十秒黙祷すると、 仲間の亡骸の側で膝をつき、 足を持つと、 すぐさま踵を返し、 墓地へと運んだ。 その家族がすっ 仲間の元へ向 黙祷す

やけにに手際がいい、と口イは訝しんだ。

ボンゴで人が死ぬとき、 時でも遺族はすがり、泣き続ける。 こんなふうに静かではない。 死体を埋め

として受け入れているのだろう。 この戦士の村ではさっきリーエンが言ったとおり、 誰もが死を日常

に人一人ぶんの穴がいくつも掘られていた。 墓地は地面に穴を掘ってその上に木で作られた碑を立てる質素な のだった。 老人や女性を中心にして、 ロイたちが到着した時には既 も

黙祷をして上から土をかぶせた。 3人ずつで協力して遺体を穴の中に横たえていく。 もう一度全員で

・・・・・・戻ろう」

るようにも見えた。 リーエンは未だに険しい顔をしている。 リーエン。 どうして戦わなくちゃいけないんだ?」 その顔を見て、 村の惨状を眺め、 その表情はどこか泣い ロイは尋ねた。 て

リーエンが振り返り、暗い目をしているロイを見た。

戦わずに・ ・・どうして大切なものを守るんだ!?」

強く言い放ったその言葉は、 怒っていると言うよりも自分に言い 聞

かせているようだった。

追ったが、 そのままリーエンは一言も言わずに家に向かった。 眩暈がし、 景色が歪んで見えた。 ロイもその後を

れるマリオネットのようにリーエンの背中を追った。 意識が朦朧とする。 何も考えることが出来ず、 ふらふらと糸に操ら

突如視界が暗転し、 ロイの意識はかなたに沈んだ。

ドサッ

ーエンが物音に驚き、 ・どうした!」 振り返ると、 ロイ が地面に突っ伏してい た。

肩をゆするが反応はない。

宙に浮いているような気さえする。 直感的にそう思った。 影は一切なく、 狂おしいほどに白い。 真っ白な世界。 天はどこまでも続く白い壁のよ 地面も天も周囲も全てが白く、

影・・・・・?

目の前、 ま膨張し続けていた。 さかった。 その一転だけ黒い しかし、 だいにロイの体ほどの大きさになり、 闇が広がっていた。 始めは拳のように小

· · · · · · · · · !

闇はロイの後を追い続ける。 ように伸びている。 触れてはいけない。そんな感覚が脳裏によぎったからだ。 足を絡め取ろうとする闇から一歩後ろに跳んで逃げた。 まるで影が体に戻ろうとしているかの こ の闇に しかし、

ていた。 ロイは踵を返し、走った。 体は羽のように軽かった。 これまでにないくらい 正しいかも分からない自分の直感に従っ 全力で走った。 不思議と疲労感はな

しかも、 はロイと同等の、 チラッと後ろを見る。 先程よりも大きくなっているようだ。 いやそれ以上のスピードで追いかけてきている。 こんなに速く走っているにもかかわらず、

前 から覆いかぶさるようにして、 を向き、 更に加速しようとするロイの視界に影が映っ ロイの体を包んだ。 た。 影は上

これは夢、夢だ!

影が口 張るような感じがした。 1 の体に吸 い込まれるようにして消えた時、 めまいがして、 右手を顔に当てる。 全身の筋肉が突

なんだこれは!!

ている。 固い 触がした。 が顔に当たった。 驚いて顔をしかめ、 触れ ると、 鋭利な牙がそこにあった。 慌ててそれを見ると、 歯を噛み締めた時、 長く尖っ 異物が当たっ た爪が生え た感

何だこれは!?まるで・・・妖怪みたいだ。

だ。 そこには まにか目の前に鏡がある。 ロイは、 恐る恐るそれを覗き込ん

## うわああああああ!!

恐れ、 利な爪が生えている。 にいるのは紛れもない自分。 驚く妖怪の姿。 茶色い髪に白い肌。 自分とは似ても似つかない姿。 尖った耳と鋭い牙に、 しかし、 そこ

イはそこにうずくまり、両手に顔をうずめた。 額に爪 が刺さる。

嘘だ・・・嘘だ・・・。

こっちを見て見て笑った気がした。 そういってみた鏡の先にいるのはうずくまる自分の姿。 その妖怪が

うわああああああ!!

ロイっ、 ロイっ • ・しっかりしろ!!

ちょっと、病人なんだから静かになさいよ!

肩を大きく揺さぶる感触と、耳を劈く声でロイは目を覚ました。 視

界に二人の人間の顔が映っている。

「ロイ、 大丈夫か?」

リーエンが叫ぶ。 ロイは周囲を見渡して、 何が起こったかを悟った。

「俺はどれくらい眠っていた?」

ロイの体はベットに横たわっていた。 リーエンの家に向かう途中で倒れて・・・そこから先は記憶 小窓からは見張り台が見える。

にない。 覚えているのは、 自分にそっくりな妖怪の姿。 確か、

あれは夢だとロイはかぶりを振った。

あの日からまだ一日も経っていない。 とはいえもう昼過ぎだがね」

ーエンの顔は気のせいか少しばかり嬉しそうに見えた。

あなた の服は洗っ ておいたからね」

リーエンの後ろでアレルナが言った。 見ると、 ロイは別の服に着替

えさせられていた。

それで、 ロ イ。 聞きたいことがある・

エンの顔が険しくなった。 すぐにア レルナが言う。

ちょっと、 リーエン。 まだ熱は引かない んだから後で良いじゃ

「しかし・・・

リーエンは振り返って困った顔をする。

いや、 良いよ。 魔物の身体を炭にしたことだろう?」

リーエンの眉根がピクリと動いた。 すぐにアレルナが口を出す。

「ちょっと、ロイも。あなたまだ結構な高熱なのよ?」

隠しておくわけにもいかない。 ロイは微笑んで見せた。 ここでリーエンに世話になっている以上、 それに、 精霊術がいかなるものか、

もう一度思い出したかった。

もう

アレルナが溜息をつく。

「勝手にしてちょうだい。 また倒れても知らな いわよ

ンは扉が閉まるまでアレルナの背中を見つめ、 そういうと、リーエンに小言をいいながら部屋を後にする。 振り返ると苦笑い エ

見せた。

「では、教えてくれ。あれがなんなのかを」

ロイが頷いた。

ロイがすべてを話し終えた時、 なるほど。 私にもまだまだ知らないことが多い 村は赤い光に包まれていた。 な 夕

日の中に魔物の姿は見えない。が、窓から差し込む真っ赤な光は嫌

が応にも昨日の事件を思い出させる。

リーエンは大きく息を吐き、首を振った。

ロイはリーエンの目をじっと見る。 ひとつ聞 いてい か。 その術を得て、 その細められた目は、 満足だと思ってい 睨んでい るか?」

るようにも泣いているようにも見えた。 ロイは目を閉じ、 故郷を思

い出す。そして、ゆっくりと首を振った。

いせ 俺はずっと家族と暮らしていきたかった。 平和に

ても」

俯くように自分の掌を見つめていたリー エンが顔を上げ た。

真似は出来ない。 そして俺には力がある。 ボンゴだけじゃ な だから俺にはこの力が必要なんだ」 Γĺ それなのに戦わずにそれを見ているなんて 今、 ザイガの平和が奪われようとしてい ಶ್ಠ

• • • • • •

戦士として鍛えられてきた自分と比べてなんと華奢な体つきなのだ リーエンは黙ってじっとロイを見ていた。 その少年は小さい頃から

それなのに、この子は戦うことを選んだのだ。

かし、 私にはカルコンというものが悪だとは思えない

る表情だった。 々と輝いている。 ロイがこちらを睨 んだ。 それは、 その目は猛猛 百戦錬磨のリー しい炎が宿っているように エンにすら恐れを抱かせ 爛

と戦 魔物を駆逐する事が出来れば、それは人間の平和を意味する。 自分の目的の為にボンゴを踏み台にした。 「落ち着け。 い続けた私達には、 確かに今のカルコンは独りよがりな独裁者だ。 その考えが分かる気がする」 しかし、しかしだ。 もし、 魔物

駆け巡っている。 鳴り散らしてやりたかっ れは魔物への怒りと恐怖。 ロイは奥歯を噛み締めた。 た。 怒りがふつふつと湧き上がってきて、 その相反する想いが頭の中をぐるぐると しかし、 ある感情がそれを阻んだ。 そ

き ロイは上半身を倒 腰を上げた。 ベッ トに仰向け に倒れ込んだ。 IJ エンが驚

・・・ウッ・・・ウッ・・・

だっ 嗚咽が の目からあふ 寂 の れ出 中の部屋に響いた。 してい るのは、 旅立った日に捨ててきたはずの涙 ロイは右手で顔を覆っ ている。 そ

あ 俺はどうすればい 61 んだ 家族を奪わ

べばいい のだから」 ベットに横になり、 「怒りたければ怒ればいい。 • 何も我慢する必要なんてない。 涙を流すロイに、 寂しければ泣けばいい、 リーエンは微笑みかけた。 お前はまだ子供な 苦しければ叫

そう、 にも突然で、その嘆きを口に出す暇もなかったのだろう。 れた。リーエンと似た境遇ではあるが、ロイにとってそれはあまり なんてことのない普通の子供。 それが突然戦いを余儀なくさ

リーエンはロイの胸にそっと手を置いた。

顔を覆ったまま、 を奪い去ったこと・・・。 果たしてそれがザイガの為に良いことな カルコンが魔物を駆逐すること、世界を掌握すること、 のか。世界を見て廻ったお前の目で判断するべきだ」 「お前はやはり、一度そのカルコンという男に会ったほうが ロイは頷いた。 リーエンは立ち上がり、 お前の故郷 ドアに向 ĺ١

かった。

そう言ってドアを開いたリーエンに、 「腹が減ったな、 ありがとう、リーエン」 飯を持ってきてやるからここで待っておけ 背後からロイが声をかけた。

1 エンはふっと笑って部屋を出た。

真夜中。 た。 かに聞こえてくる。 まだ熱は引かなかったが、心はいつになく落ち着いていた。 村は寝静まり、 その音を聞きながら、ロイは天井を見つめてい 木々が風に揺られてざわめく音だけがかす

# あんなに泣いたのは、 ボンゴを出た時以来だな。

た。それはきっと、その痛みを人に分けたからだろう。 不思議とボンゴのことを思い出しても寂しい気持ちにはならなかっ

「『二人で心を分かち合えば、喜びは倍になり、悲しみは半分にな

るんだ』って、父ちゃんが言ってたっけ」

までの自分の心は荒んでいたのだろうか。 の手は大きくなっている。そんなことに気づくこともないほど、 自然と笑みがこぼれた。掌を掲げ、握って見せた。 いつのまにかそ 今

ロイがそう思ったとき、 木々のざわめきがはっきりと聞こえた。

?

た。 風が強くなったのだろうか。 ロイはいぶかしんで、 小窓から外を見

「・・・・・・つ!!」

月の光に照らされる黒い塊が見える。 一度目を瞑って目を凝らす。

それは紛れもなく、魔物の一団だった。

「ガーレイシャ!!」

しかも、 数は前回よりも多く、 中でも一体、 ほかと比べ物にもなら

ないほど巨大なものがいる。

くそっ」

ロイはベットを飛び降り、 .なことを気にしている余裕はなかった。 剣をつかんだ。 まだ少し眩暈がしたが、 内開きのドアを勢いよ

く開け、 外に出ようとしたとき、 強い力によって引き戻された。

• つ!リーエン!!外に魔物が!!」

ロイは叫 しものリーエンにも予想外だったのだろう。 んだ。 リーエンは強張った顔をして頷いた。 この襲撃はさ

に残れ」 「分かってる。 俺たちは今から応戦する。<br />
だが、 ロイ。 お前はここ

ロイにはリーエンの言っている言葉の意味が判らなかった。

「どういう事だよ!?俺も戦う!!」

リーエンは首を振った。

「お前のような子どもを戦わせるわけにはい かな

二人はにらみ合った。その空気に堪りかね、 ロイは剣を握ると、 強

引に部屋を出ようとした。

ゴッ

腹に衝撃を感じた。 意識が次第に遠のいていく。

「リー・・・エン・・・」

ドサッと音をたて、 エンは呟く。 ロイはうつ伏せに倒れた。 その頭をなで、 IJ

許せ、口イ。お前はまだ、死んではいけない」

耳を劈く大きな声に、 エンに殴られて気を失わされたことを思い出 ロイは目を覚ました。 した。 腹に痛みを覚え、

「そうだ、魔物だ!」

ロイは勢いよく家を飛び出した。

「あ・・・あ・・・」

死臭が鼻を付く。 そこには凄惨な光景が広がっていた。 まま息絶えていた。 人間は老人も女も子どもも、 人と魔物の死体が入り混じり、 皆武器を手に握った

村の中心、 人間の手の中にはぐったりとした女性の姿があった。 矢倉の下で大きな魔物と人間とが向かいっ ていた。 その

「リーエン!!」

対峙していた。その体から発せられる闘気は、 くことを拒んでいた。 リーエンは右手に剣を持ち、 左手でアレルナの亡骸を抱え、 ロイがそれ以上近づ 魔物と

「おおおおお!」

り下ろす。一瞬間を置いて、 リーエンが剣を振り上げ、 魔物も爪を振り上げた。 魔物の首が吹き飛んだ。 にそれを振

「やった!リー・・・」

「ぐっ!」

リーエンの首筋から血が噴き出る。 そして、 アレルナを抱えたまま

その場に倒れ伏した。

リーエン!!」

さえた。 以外の何物でもない。 けもない絶望的な損傷。 とっくに死んでいてもおかしくなく、 全身のあらゆる部分の皮膚が裂け、 ロイは一目散にリーエンの側に駆け寄り、 しかし、 間近で確認してみると、 最後まで生き、 肉が断たれ、骨が折れ 今から治療しても間に合うわ 戦ったのはリー 傷は首筋だけではない。 血が流れる首筋を布で押 エン っていた。

「リーエン。どうして・・・」

涙がリー エン を捉えた。 の顔にぽたぽたと落ちる。 IJ エンの目が、 ロイ の

状態にもかかわらず、 その声はか細く、 ああ、 イがリー ロ て。 エンの体を抱きかかえる。 無事だったか。 今にも息絶えてしまいそうだっ リーエンはロイを見て笑った。 良かっ IJ エンは右手の剣を離し、 た た。 しかしそんな

その手でロイの顔に触れた。

リーエンは再度微笑む。

涙が落ちる。 「お前を死なせたくなかった。俺達の戦いに巻き込むわけにはいか 何でだよ、 リーエンは口から血を吐きながらか細い声で言った。 リーエン!どうして俺にも戦わせてくれ なかった!!」

リーエンを抱えるロイの腕に力がこもる。 涙が止め処なく溢れ出て

なかった・・・」

「お前に頼みがある。 ここに俺達の墓を作って、 弔っ て欲

・いつまでも、この地を守れるように」

こと。それがリーエンの願い。ロイは何度も頷いた。 それは静かな願いだった。 戦士として生き、 死後も戦士でい続け

「分かった、約束する」

「そして、決して歩みを止めるな。 世界の真実を・ ゴホッ

「リーエン!!」

リーエンが血を吐き、 ロイの顔にかかる。 しかし、 そんなもの微塵

も気にならなかった。

「はあ、 はあ ・・・世界の真実を見極めて、 生き続ける」

ロイは目を強く瞑って涙をこらえようとした。

リーエンはまた微笑んだ。 ければ泣けばいい、苦しければ叫べばいい・・・。そう言ったろ?」 感情をこらえる必要はないんだ。 怒りたければ怒れば 反対にロイの目からは涙が止め処なくあ

戦士として育てられてきた。そして最愛の人と、 「だが、 とが出来た。・・・戦士として」 ロ イ。 憎しみを持つな。 私は幸せだ。 戦士として生まれ 仲間と共に死ぬこ

ふれ出していた。

見上げた。 その力に呼応して、 リーエンは残りわずかに残る力でアレルナをぎゅっと抱きしめた。 士たちが守った空だ。 雲ひとつない青々とした空がそこには広がっていた。 首筋の血が吹き出る。 そして、リーエンは天を

ああ、なんて美しい世界なんだろう・

そして、リーエンは目を瞑った。 「リーエン!?リーエン!!リーエン!!」 その表情は安らかに微笑んでいる。

はもうピクリとも動かない。 ロイはその体を揺する。 何度も、 何度も・

・・・リーエン」

ロイは嘆き、虚空を仰ぐ。 涙は頬を伝って地面へと流れ、 慟哭が虚

空へと響き渡った。

だが、 その声を聞き届けるものはもうどこにもいなかった

「遅かったか・・・」

がたいほどの惨状がそこにはあった。 だろうか。 村の建物はめちゃくちゃに破壊され、 その男は村の様子を見て落胆した。 痩身な上に小さめの服を着ているのでかなり細く見える。 年は20代前半とい 地面か血の海かの判断も付け ったとこ

「死臭が酷い」

そう呟き、鼻を覆った。 に付くものはどれも人より少し大きい魔物の死骸だけだ。 とつ破壊されたというのに村人の姿も死体もひとつとしてない。 しかし、 すぐに怪訝な表情に戻った。 村ひ 目

・・・おかしい」

臭は増し、それに比例するように血の量が増していった。 味悪く、 歩踏み出すごとに血がピチャピチャと音が響く。 そう呟くと、腰に下げている短銃に手をかけながら足を進めた。 男は進む足を否応なく速めた。しかし、 それがなんとも気 足を出すたびに死

・・・あれは?」

ら男は急いだ。 大きな建物が見えた。 血が跳ねて靴を汚さないように気をつけなが

ザッ、ザッ、ザッ

ほど大きくなる。 布の擦れるような音が響いていた。 一人の少年の姿が見えた。 その建物が見張り台だと判断できた時、 それはその大きな建物に近づく その下に

• • • • • ! ? ]

的な恐怖を感じずに入られなかっ やら墓らしかった。 穴の一つ一つは人間ほどの大きさがあり、それが何十とある。 少年は手にスコップを持ち、 男は一心不乱に墓を掘る少年の姿になにか根源 穴に土をかぶせている。 た。 かぶせられ どう た

お前は何者だ」

が不穏な動きを見せればすぐさま発砲できるように。 そう言いながら、 男の両手は両腿の銃 にかけられてい た。 その

と振 泥のように光がない。 少年はその声に気が付くと、 その無表情の顔と雰囲気が違和感を醸し出していた。 り向いた。 茶色い髪に白い肌。 地面にスコップを突き刺し、 確かに背格好は少年のそれだが、 目には淀んだ ゆっ

その少年には見覚えがあった。

「お前はロイ・・・・・ロイ=クレイス」

かけた。 か見たことはなかったが、 ロイと言う名の少年は目を細め、 はっきりと覚えている。 その顔を思い出し ていた。 ロイは剣に手を 度

「カルコンの・・・手先だな!?」

空気がぴりぴりと張り詰めた。 そのあまりにも鋭い殺気に男は震え 上がった。 男は銃から手を離し、降参するように両手を挙げた。

魔物を倒す援護に来たのだが、遅かったらしい・・・」 「そうだ。 僕はディアボロスの三騎士の一人、リック=ローラン。

その男の言葉はとても信用できなかったが、 闘気もないその男の 風

体にロイは右手を剣から離した。 それを合図に両腕を下ろすと、 IJ

ックは腕を顎に当てた。

これがロイ= クレイス。 カル コン様の弟子か。 そして村人

の墓を作っている。・・・なぜだ?」

「おい、あんた!」リックには独り言を言う癖があった。

ブツブ ツと独り言を言っ てい るリッ クにロイが言った。

「カルコンは今どこにいる」

リックはロイをじっと見つめた。 今度は剣に手をかけてこそい ない

ものの、重苦しい殺気は先ほどと変わらない。

リッ 「残念ながら教えられない。 クは 僕は君を敵じゃないと考えられるほど楽天家じゃ ロイ のほうへと歩み出した。 カルコン様はそうは言っ てい な なかった

だがその前に墓作りを手伝おう。 何をすれば しし

-は?

クは肩をすくめた。 土を盛ろうとしていた。 ロイは困惑した。 リッ クはそれを気にも留めず、 ロイはスコップを強引に奪い返すと、 スコップを持って リッ

悔だ。それともほかに仕事でもあるのか?」 いいだろ、別に。 僕が間に合えば村は救えた。 これは最低限の

ロイは少し考え、手を広げて言った。

「これくらいの大きさで、 平たい岩を探してくれ

森へと向かった。 リックはわかったと言い、 その後姿を困惑しながらロイは見ていた。 「岩、岩・・・ **\_** と独り言をいい

「お~~い、見つけたぞ!」

持つっていない。 そう叫びながらリックは駆け寄ってきた。 先ほどと変わらない格好であった。 U かし、 その手には何も

「あっちだ、あっちの森の中」

行った。 リックはそういいながら指差した。 んでいた重い腰を上げ、 不本意ながらもリックに従って後をついて П イは全ての墓を作り終え て休

っ おい、 ったということだろうか。 さっきの「自分がいれば村は救えた」などという言葉は大言壮語だ あんた。 それくらい自分で持って来れない のか?

リックがぴたりと足を止めた。

その剣で僕を斬ってみるといい」 そういえば、君は僕の術を知らないんだっ たな。 そうだな

「どういうことだ?」

同じように足を止めたロイにリックは背を向け 敵の幹部なんだ。 斬れれば幸運だろう?」 たまま肩をすくめた。

・・・後悔するなよ」

そういってロイは剣を抜き、 その腕を切り落とそうと振り下ろした。

「あれ?・・・切れない」

剣はリックの体をすり抜けた。

「そういうこと」

!

全て、そして胸も腹も足も全て影のように真っ黒だった。 そういいながら振り返っ たリックの体前方には色がなかっ た。 顔 の

る 「これが僕の術、 いや、正しくは錯視か」 " 光 だ。 光の屈折を使って錯覚を引き起こさせ

ちぎって自分が本物であることをアピールした。 その姿が消え、 少し前方にリックの姿が現れ た。 IJ ッ クは木の葉を

能力の限界は人間としての本分を忘れないためのくさびだと俺は思 再び歩き出したリックの後を追いながら、 うとするのだ』ってな。 っている。このくさびがあるからこそ、我々は体を鍛え、 「カルコン様が言っていた。『完璧すぎる力は暴力しか生まない。 僕の術には力が無い。 ロイは思った。 それがくさびだ」 強くなろ

術と能力に境界線はない に似た能力をレギュラスが乗っていた魔物も持っていた。 ている・ のか・ IJ Ĭ トの能力。 • ? 映 像 " ار それに、 やはり、

せた。 ロイは昨日見た自分が妖怪になる夢を思い出し、 ぶるっと体を震わ

・・・これだ」

能だ。 岩があっ リックは立ち止まった。 た。 なるほど、 確かに生身の人間一人では、 そこにはロイが示したような形と大きさの 運ぶのは不可

リックは言ったが、 手伝おうか? はなかった。 ロイは首を振っ た。 敵にそこまでしてもらう謂

・・・ふう」

戦闘での限界は既に癒えていた。 げると、 ロイは小さく息を吐くと、 村へと運び出した。 神経を集中させ、 その後にリックが続いて歩く。 強化した筋力で悠々と岩を持ち上 術を発動した。 前回の

さすがカルコン様が見込んだ少年だ」 ・凄いな。 たった一年足らずでここまで術をものにするとは。

ブツブツと、独り言を言いながら。

「・・・ふう」

先程よりも大きく息を吐き、 とができるといつだったかギンが言っていた。 に術の容量も増えたのかもしれない。 疲労が募ったが、 さして気にするほどではなかった。 ロイは墓の群れの正面に岩を立てた。 そういえば、 容量は増やすこ 筋力量のよう

「それをどうするんだ?」

もう一度神経を集中させた。 熱を、指先に集める。 ロイの後ろでリックが訊ねた。 ロイは返事をせずに息を整えると、

高熱を1点に集めるセンスに驚きが隠せなかった。 ロイの指先が光り輝くのをリックは見た。 その光景よりも、 瞬時に

わな 常に燃費が悪 の術は使用する時、 リッ クの想像を絶するほどの力を秘めているのかもしれな いと聞いていた。 常に自分の身を守らねばならな しかし、目の前の少年はそれすら厭 い為

まるで・・・魔物みたいだ」

ているロイの耳には届い 二人の距離は近く、 その呟きは聞かれて然るべきだったが、 ていなかっ た。 集中し

た。 は頬に汗をたらしながら、 ゆっ くりと指先を岩に近づけてい つ

様の能力でも苦労するほどの温度だ。 そん な、 無茶な。 岩の融点は40 0 0度近い 点集中させてもそう出来る んだぞ! 力 コン

であることを確認せざるを得なかっ 必死にその行為を否定しようとしたリッ た。 クは、 その目でそれが可能

ロイは岩を溶かし、文字を刻んだ。

守り、 IJ ここに眠る エン、アレ ルナ、 、 そしてガルガイアの戦士たち、 自らの村を

・・・ぷはっ!!」

場に倒れ空を見上げる。 は頂点を越え、下り坂に差し掛かっていた。 ロイが勢いよく息を吐いた。 顔や服の血は既に渇いて久しかった。 はあはあ、 と肩で息をし ている。 太陽 その

ああ、きれいだなあ

消える。 えなかった。 リーエンの最後の言葉。 なぜか涙が溢れ出てきた。 しかし、 ロイにはその空がきれ それは目尻を伝わり地面に いだとは思

· · · · · · .

その姿を、リックは無言で眺めていた。

もちろんロイはそれを受け取らない。 ロイが立ち上がると、 リッ クが手持ちの食糧をロイに差し出した。

「毒は入ってないさ」

リックが少しだけかじる。 に入れてしまった。 確かに毒は入っていなかった。 ロイは空腹だったのも手伝ってそれを口

界を救わないか?」 ン様も君を見込んでいるし、 「ところで、ロイ。 やはり君もディアボロスに入らないか? 僕も君の力は凄まじいと思う。 共に世 カルコ

るූ な リッ クはそうは言ってみたものの、 俺の家族を奪っ ・そう言うに決まっている。 た奴の味方になれるはずがない。 返事を予想してい た。 必ず潰してや ふざける

そして、 そのつもりならば、 ここで戦わなくてはならない。 自分の

悠長なことを言っていては手の打ちようがなくなる。 盟主はロイ= して、両腿の拳銃に手をかけた。 クレイスを殺すことをよしとしないだろうが、 そんな予感が そんな

「今は、それは出来ない」

「・・・・・・今は?」

だが、ロイの返答は想像だにしないものだっ た。

に誓ったんだ」 「確かに俺はカルコンを憎んでいる。 でも、 あそこに眠っている人

ロイは石碑のすぐ後ろにある墓を指差した。

か分からないんだ。 何も知らない。今はディアボロス 『世界の真実を見極めろ』ってな。 ・・・だから、今は出来ない」 俺は子どもだ。 カルコンが正しい 世界のことを のかどう

. . . . . .

はなく目の前の少年を見た。 リックはぐうの音も出なかった。 の言葉が真実であることが見て取れた。 少年の目はどこまでもまっすぐで、そ しだいに警戒は薄れ、 敵としてで

の前 となく、 襲撃を許せたわけではない。 ロイは何も答えなかった。そんなのは御免だと返したかったが、 「そうか・・・。それじゃあ、ともに戦える日を楽しみにしている」 の男は悪だとはどうしても思えない。思えないけれどもボンゴ 中立を保っていた。 2つの思いの中、 ロイ の心は揺れ るこ 目

既に魔物も村も全滅していた、 ロイは言った。 ・・・いつか、 リックは頷き、 会いに行くと、カルコンに伝えておい 踵を返した。 と報告しなけ 任務地に赴いた時には ればならない。 てくれ

「リック!」

「墓、手伝ってくれてありがとな」リックは足を止め、振り向いた。

Ļ 少しだけ手を上げてロイが言う。 森の中へと消えていった。 リッ クは手を振ってそれに答える

はその場所に尻餅をついた。 村は閑散とし ている。 木々のざわ

れたかのように、 めきすら聞こえない。 静寂を保っていた。 まるで音というものがこの世から消し飛ばさ

「さて・・・」

た服に着替え、自分の荷物を確認した。ロイの胸元でギンのネック ロイは無表情のまま、 スが躍っている。 ロイはそれを固く握りしめた。 リーエンの家に入り、 アレルナが洗ってくれ

らはもらっていくことにした。 何一つ村の者を持っていくつもりがなかったが、アレルナが入れ くれたのだろう、 く出立しようと、 袋に入っている保存食やら水やら、 ロイはベッドに横になった。 既に日は傾いていた。 明日の朝は早 止血用の布や て

を照らし返すものが煌めいていた。 太陽が沈み、 いる少年の顔を照らし出す。 幾分か経った。 その少年の目尻には、 月光が小窓から差し込み、 ほんの少し月光 そこに寝て

け前 度では避暑にすらならず、 変わっている。そして現在太陽は真上。布で頭を隠し、 のように一定の調子で歩いている。 けなければ直射日光で干物になってしまうだろう。 イがガルガイアを出てどれくらいの時間がたっただろうか。 に村を出て、 何日か歩いた。その景色はとっくに砂漠へと移り ロイは延々と続く砂漠の道を徘徊するか しかし、その程 日射病を避

. . . . .

だ。 に う少し近づいたら対処しようと決め、 目を瞑っていても砂はそこにあり、金色の光にもうんざりしてい っていた。 えるほどだ。もはや意識せずとも足は動き、目は砂の傾斜だけを追 その暑さは生命を左右するもので、体力を消耗したくないという上 既に暑いと言う独り言すら発することはなくなった。 3度襲われていた。 前方に巻き上がる砂が見える。 つ以外に方法はない。しかし、見えたもののまだ遠かったので、 つむじ風となって砂を巻き上げる。 しかない大地だった。 たまに覗く枯れた草や石を見ると感動すら覚 風が強く、口を開けると砂が口の中へと投げ込まれていくから そして何よりロイが落胆していたのは、雲ひとつない空と、 砂嵐に巻き込まれれば、 今、何を訊ねられても考えることは出来ないに違いない。 この砂漠は風が強く、 恐らく砂嵐だろう。砂嵐には既に2、 うずくまって通り過ぎるのを待 それはゆっくりとこちらに近づ ロイは再び歩き出した。 ひとたび突風が吹くと、 今までと違 た。

· · · · · ! ! .

砂から逃げるようにして、一台の車がこちらへ走っ 車を追うように、 十分ほど歩いたとき、 巨大な鳥のようなものが見えた。 ロイはその違和感に気が付いた。 てくる。 まき上がる そして、

・・・襲われてるのか?」

方にひね をすっぽ 口を布で覆 い塊を車の上に落とそうとしているようだ。 イは近づこうと少し足を速めた。 り、右手で器用に鳥に大きな銃を向けて発砲していた。 り被った人間が乗っていて、左手で運転しながら、体を後 いながらロイは呟いた。 その大きな鳥のようなものは 車の運転席にはフード 黒 

・・なんだ、 あれ?」

同時に吐き出し、 驚嘆の声を出すと同時に、 もう一度前方を見る。 口の中に砂が入っ た。 それを少ない唾と

それは鳥 のようで、しかし明らかに違ってい た。

とした。 用なことをするものだと感心した時、 は足でハンドルを操作し、両手で大きな銃を構え、 エンジン音が乾いた空に響く。 同時に銃声が轟いた。 鳥のようなものは黒い塊を落 撃ち始めた。 運転手は今度

運転手は銃を後部座席に投げるように置き、 辛うじてそれを避けたものの、 き上げられた砂は風によってではなく、あの塊のせいらしい。 物体のようで、 ドスと言う思い音がして、 きめ細かい砂が高く舞い上がる。 塊は砂の上に落ちた。 明らかにバランスを崩したようで、 前を向いて運転に専念 どうやら先ほど巻 そうとうな質量

取れた。 前方にいるロイに気づいたのだろう事が、 フー の上からでも見て

大きく羽ばたくと言う感じだった。 分は小さな鉄 その大きさは車をすっぽりと覆いかぶせるほどであったし、 運転手は何かを叫 な物はよく見ると体が鉄でつくられていた。 エンジン音は車よりもむしろ鳥のほうから聞こえてくる。 している。 が何枚も張りあわされている。 んでい るふうだったが、 足はなく、 エンジン音で聞こえ 巨大な鷲の様であるが、 風を切ると言うよりも、 腹部から、 鳥のよう 金属 の部 な

にひたすらアクセルを踏み込み、車を走らせていた。 うとしたが、弾切れで断念していた。 助けてやらねばなるまい。事実、 ロイは車に向かって駆け出した。 運転手がもう一度銃を取り、 もしあれに襲われているのなら、 それからはとても焦ったよう

足を一歩踏み出すごとに砂の中にめり込んでいくが、 砂だらけで、気にするほどのことでもなかった。 ロイは剣を抜く。 既に靴の中は

運転手はまた叫 続いてロイが叫んだ。 んだが、 今度は黒い塊を落とす音にさえぎられた。

#### 「止まれ!!」

跳び上がった。 急ブレー キをかけた。 きれた。 ロイを轢く寸前だったからか、 ロイはそこまで駆けると、 タイヤは砂の上ですべり、 それとも声が聞こえたからか、 ボンネットを踏み台にして高く 車体は90度右に

まり、 だという事だろう。 上手く足から砂の地面に着地した。 そのまま剣を振りかぶり、その機械の羽の付け根の鉄と鉄の間に差 わったことがある。 剣に熱を込める。 し込みんだ。 鉄でつくられているのは外側だけで、 肉を裂くような柔らかい感触が手に残った。それはつ 機械は動力の中の燃料で動いているとグリンに そしてそれは火に弱く、 ロイは、 そのまま十メー 簡単に火がつくらしい。 トルほど落下したが、 内側は獣や魔物と同じ

#### ドオオオオン

機械は空中で爆発した。 転がるように して辛うじて逃げた。 炎上したままロイの頭の上に落下してくる。

「あっち!」

なんとか衝突は避けられたようだが、 少し無茶が過ぎたようだ。 熱された金属片が手の甲に触

手の甲をさすりながら立ち上がると、 振り返ってその機械を見た。

黒い異臭を放つ煙だけが、 燃え続けているそれは完全に沈黙し、 モクモクと立ち上がっていた。 ガラクタと成り果ててい

. . . . . .

その光景を見て運転手はフードを取り、 呆然としていた。

「女?」

言う表情で、 そこには金色の髪を翻す少女の姿があった。 機械とロイとを交互に見ている。 少女は信じられない لح

を納めた。そのとき、陽炎の向こうの影がふいに動いた。 る。しかし、その鳥が完全に沈黙したことを確認すると、 その炎の激しさはとどまることを知らず、依然として燃え続けて 薄手の布で、 立ち込める黒い煙と陽炎のせいで、少女の姿は少し歪んで見えた。 しかし、フードを取り、地面に落としたのは見て取れた。 日射しから体を守るために全身を覆うものらしい。 フー ロイは 剣

「すつご~~~~~!!」

陽や、 けた。 少女は跳びついて来た。間一髪のところで後ろに下がり、それ あまりにも感嘆 に対しての抵抗力は皆無なのであった。 ロイにとって初対面の相手に飛び掛るようなテンションの高 燃え続ける炎のせいだけではないだろう。 瞬間的に感じた恐怖に額には汗が滲む。 それは照りつける太 したその声に驚き、身をすくませたロイを無視 人生経験の少ない .を避

「すごい!!」

はずだ。 間髪入れず二撃目が来る。 方をするかも を捕まえた゛と表現するだろう。 する事はかなわなかった。 恐らく人間同士の" 恐らく今の状況を見た人100人のうちのほとんどは しれないが・・ 手をつなぐ"という行為はこうでは 少女の手ががっちりとロイの手を上から 慣れない砂の足場に掬われ、 • 2,3人はボケたような表現 今度は ない の仕 回避 手

ことを不審そうに見た。 少女は感激 な男ならいざ知れず、 のあまり手をガッチリと両手でつかみながらも、 その表情を見てロイは納得する。 ロイのような少年がこれだけの事をしたと 確かに 1

まま、 いうの 手にこもる力が強くなる。 先ほどとは違う警戒の目でロイをじろじろ見た。 は信じられ ないことだのはずだ。 とりあえず手を" だんだんと 握っ た

ていた。 少女は少女と言ってもロイより少し上、 は無いだろう。 なり不審だ。 は十分に自覚しているが、こんな砂漠で1人で戦っていた少女もか していた。金の髪は腰まで伸び、青い両眼はどこまでも深い。 ロイもロ ・ 何 ? 」 ちゃ イで少女を警戒を込めた目で見る。 じっと見つめると、少女はなかなか整った顔立ちをし んとした格好をすれば、 ただし、今は女性のものとは思えない武骨な格好を シルクと並んでいても違和感 1 6 自分が不審だという事 ,7歳くらいに見えた。 その

て、じろじろ見られている俺のセリフだという大きなつっこみを心 ロイの視線に気づき、 の中で盛大にしたあと、 少女が問う。それは突然手を ロイは答えた。 捕まえ"られ

痛いんだが・・・」

ああ、 少し振って血行をよくする。 まだ白い肌に、赤い手の痕がくっきりと残っている。 と少女は思い出したように手を離した。 ロイの日に焼け ロイは両手を も

あなた、 何者なの?」

怪訝そうな目と警戒は全く解けてい したようだ。 ない、 いやむしろ先程より

・ロイ= ク レ イスだ

だ。 普通だと形容できるほど、 警戒している。 そう答えた。 その答えは質問の的を得ていないと自分の中では分かってい 少女がロイを警戒しているように、 車を足で運転しつつ大きな銃を乱射 ロイは適当な人生を歩んでい ロイもまた少女を じてい な る つもり 少女を た

「そう 呼んでね」 あたしはエリナリ アー スタンフィ ナよ。 エリ ナって

まま、 状況によっては友好関係が芽生えるようなセリフだが、 の声色はそれを許そうとしない。 言った。 少女はロイと一歩の間隔を取った 剣呑な少女

料を爆発させることが偶然できたからなのだが。 械は鋼でできていて、 のは鉄の部分ではなく肉体の部分で、 ロイは肩をすくませ、 ・何をしたの?ただ斬ったわけじゃない 少し微笑んで見せた。 銃でさえほとんど効かないんだから」 倒したのは斬撃ではなく、 あえて言うなら斬っ んでしょう? あ の 燃 た

・・・企業秘密だ」

「・・・は?」

ると、 少女は面を食らったような顔をした。 いっそう敵愾心を募らせた。 しかし、 元の険し い表情に戻

「・・・そんなことより」

が。 うは見えな ロイ すわけにもいかない。 リーエンのような戦士ならともかく、 の拙いコミュニケーション能力では不自然極まりなかったのだ いが、一応そういう事にしておこう) に術のことをばら ロイはできるだけ自然に話をそらそうとした。 ごく普通の一般人 (とても

「さっきの布、羽織ってなくてい いのか?火傷するぞ?」

「あなたはどうなの?」

も言ってやらなければならない。だがあれは今頃砂 息もつかせないほど早く切り返してきた。 に邪魔になったので布は投げ捨てたから、 いるだろう。とても探す気にはなれない。 確かに、 そのセリ の中に埋もれて フは自分自身に 先ほど走るとき

・・・ふぅ、まあ、いいわ」

少女は軽く息を吐き、警戒を解いた。

助けてくれたんだから敵じゃ あない んでしょう? 応信用するわ」

· 敵 ?

1イのその反応を見て、少女は首を傾げた。

ドートリアよ!カルタゴラなんかと一緒にしな あんた、 ドー トリアかカルタゴラ の l1 人間 で!」 か

せておこう。 少女はむきになって言った。 ロイとし てはどちらも同じように感じられるのだが、 よほど敵国と同一視されたくないらし それは伏

ているんでしょう?送ってあげるわ。 この砂漠を東へ歩いてたって事は、 車に乗って」 あなたもドー トリアを目指し

う思いながら助手席に乗ると、少女はエンジンをかけた。 よさそうだ。 に肩に力が入っている気がする。 なのだろうか。 もこんな感じだったからこの年ごろの女性というものはこれが普通 一度断ろうとしたが、却下された。この少女、 残念ながらロイの少ない経験では断言できない。 どうやら覚悟を決めておいた方が 相当強引だ。 必要以上 そ

「わっ」

勢いに首は後ろに引かれ、 少女はいきなりアクセルを思いっきり踏んだ。 になりそうだった。 れずしばらく空回りしていたが、 ガクンと言う音が脳に響いた。 やがて一気に走り出した。 後輪は砂を捕らえき ムチ打ち 突然の

するためなのだろうが、 そう言いながら少女はいきなりハンドルを右に切った。 ああ、 ごめんね。 先に言ってくれ」 あたし運転はあんまり得意じゃ 車体は右に傾き、 左の車輪が少し浮いた。 ない のよ 砂丘を回避

を見たまま一言 顔つきで前を見ている。 ロイはそう呟いたが、その声は少女には届い ロイは大きく息を吐い 7 た。 いなかっ すると少女が前 た。 真剣な

もはやただただ苦笑いするしかなかった。「溜息をつくと、幸せが逃げるわよ」

な感覚。 リアはまだ見えない。 ると砂を着ていると言われてしまうだろう程になっている。 ほど前だっただろうか。 衣服の上に積もる砂を払いのけることが無駄だと気づいたのはどれ えるたびに前輪が砂を巻き上げ、 るかと恐怖し、 ていった。 太陽は変わらず頭上を照り付けている。 体力が奪われているため、 もっ とも、 喋る気もなくしていたのだが・ ロイは今、 すっかりと砂に覆われてしまい、 自分が乗っ ロイめがけて襲い掛かってくる。 二人の口数は自然と少なくなっ じりじりと焦がされるよう ている車がいつ横転す • • 車が砂丘を越 傍から見

なあ・・・ · ?

ち た。 道が平坦なことを確認し、 大きな布で身を包んでいる少女を羨ましく思う。 ロイは口を開く。 口の周り

・・・・まだ?」

うるさい わ ね!!」

必要はな 勿論ロイ 全に帰り道を見失ってしまってからは徐々に機嫌が悪くなっていた。 けば大丈夫と意気込んでいた彼女だったが、2度の砂嵐に襲われ完 息もつかせな いだろう。 の方は見ない。 いほどの勢いで少女が反論した。 こんな平坦な道でそんなに肩に力を入れる 始めは車輪の跡を行

「あっ 何あ れ ! ?

アクセルを踏み、 前方に何 か盛り上がったものが見える。 それに近づいた。 少女は嬉しそうに声をあげ、

よう な機械がそこに眠っ 助手席を降り、 体の砂を払うと、 ていた。 太陽光に照らされたボディ それに近づ いた。 大きな鳥 は焼

けるように熱かったが、 煙や炎はもう上がっていなかった。

ことだな、 ろうか?ということは近くに国がある。 何だろうな?これは。 おい う~~む、 ドー まっ トリア軍が撃退した機械だ たくもってはっぴぃな

間違いなくこれはロイの仕業だった。

ジを交えながらそうまくし立てた。 ロイはたまりにたまった鬱憤を吐き出し、 大げさなボディランゲー

「・・・・・で?」

少女はというと運転席で完全に固まっていた。 なだれている。 エンジンを切り、 う

うう

両肩はがっくりと下がってしまっている。 と弱々しい声を上げた。 先ほど力の入っていた反動だろうか、 しかしロイの口撃はやま その

時間以上経っている・・・!」 「なんと!羽の付け根に斬撃の痕があるな。 これは斬られてから二

ボディをコンコンと二回ノックした。 れを顔に出さずに少女に近づき、 「ううう」 少女の目の前で腕を大きく広げた。 火傷しそうに熱かったが、

「・・・さて、どうしましょうか?」

づいた。 ったかのような錯覚に陥っていたが、 自分を大人のように見せたかったのだろう。それで今まで大人にな たのかもしれないが、こんなふうに話したことはなかった。 恐らく リンのところでもリー エンのところでも相手が相手だけに当然だっ 言いながら、こんなに悪態をつくのは久々かもしれないとロイは思 ギンの所にいたときの自分はこんな感じだっただろうか。 ガルガイアでそうでないと気

もっとも、 ような話し方がロイの。 もしかしたらこんな感じに遠まわしに悪態をつくギン 大人" の姿なのかもしれない のだけれど・

ロイが運転席 の左に廻ると、 女はキッとこちらを睨んだ。

は初め が涙で潤 その突然 ての経 h の動作にも驚いたが、 でいたことだった。 ボンゴの子供以外で人を泣かせたの 何よりも驚いたことは、 少女の両目

少女は歯をく 責めたければ堂々と責めればいい LI しばり、涙をこらえているようだった。 で しょ これにはさ

「いや るようにも見えた。 下を向いた。その表情はフードに隠れて見えなかったが、泣いてい 少女は下唇をかんでいる。 すがのロイも申し訳ない気持ちになった。 ・・えっと・・・あのー、その・・ じっとロイの顔を数秒見つめると、 ・ごめん、 言い過ぎた」 また

落ち着け。 死ぬわけじゃないさ」

背中とは違って、 揺れていた。 っていた。それは母親だから大きく見えていただけなのかもしれ 少なくともロイはそう感じた。 自分の母親はもっと大きい背中を持 その背中をポンポンと叩く。 それは紛れもな が、 もう触れることはできないのだから確かめようがない。 今触れた小さな背中はその背中は嗚咽でかすかに い少女の背中で小 その さ な

だろ」 んだよ。 ことがあるんだ。 死ぬんだと思って大泣きしたんだよ。 なんかこんな小さかった頃、 俺はボーっと海を眺めてたらいつのまにか沖でさ。 まあ、元の場所に戻れただけでも良かったじゃ 釣りに出かけてさ、 父ちゃんが出した舟で遭難しかかった それに比べたらマシってもん 父ちゃ んが途中で寝ちまった な 61 俺もう

陰の中で、 少女は何も言わなかったが、 背中をポンポンと叩く。 少女が尋ねた。 少し嗚咽が収まってきたようだ。 ロイ の手を振 り払っ た後、 もう

ロイは ほっ ・それからどうなったの?」 と胸をなでおろし、 答えた。

たらしいな」 そのまままっ は熟知してるって言ってたけど、 の位置とか風向きとかで方角測って、 俺の泣き声に父ちゃんが気づいて起きたんだけどさ、 すぐ帰れたんだ。 なんでも父ちゃ 釣りを忘れるくらいはテンパって すぐに港の方向を見つけてさ。 んは漁場の風の変化 太陽

咽は収まっていた。 少女は顔を上げた。 目尻の涙を拭く。 目は赤く染まっていたが、 嗚

・・ありがと、 ロイ

覚を覚えた。 何か気恥ずかしい気持ちになる。 少女に見つめられ、 名前を呼ばれただけで、 心 臓が高鳴るような錯

それでもどうしましょう。 砂の海じゃ風も分からないでし ょ

えると、 現実世界にグイっと引き寄せられたような感じがした。 いことに代わりはない。まだ日没まで時間があるが、 ・もっともあなたのお父さんがここにいればの話だけれど・ 早々に決断しなければならない。 移動時間を考 現状が危う

あんた、こんなことは初めてなのか?」

ロイが神妙な面持ちで尋ねると、少女は肩をすくめた。

「それどころか私は一人で国の外に出るのも初めてよ」

そう言った少女は少し得意げに見えなくもない。 ロイはあちゃ

右手で額を覆う。 予想以上に後先考えない性格のようだ。

距離を置かれている気がするわ」 「それよりロイ、 その。 あんた』ってのやめてくれない?なんだか

右手の指の隙間から少女を見た。 どうやら、 思っ た以上に気

と言うよりも精神力が強いらしい。 くませていった。 ロイは右手で頭をかき、 肩をす

もう少し親 ぁ しげなふうに なんだ。 9 あ h た じゃ なければ『貴女』 か?それとも

少女は 少し剣呑さを募らせている。 ロイ は 瞬間を置き、 言っ た。

. . . . .

少女は無言で立ち上がり、車から降りると、 ロイの正面に立ち、 左

手を掲げ、ロイめがけてチョップした。

「いって~~」

さして力を込めてはいないふうだったが、 その言葉が口をついて出

てきた。少女は腰に手を当てていった。

「 エ・リ・ナ、よ!エリナリア = スタンフィ ーナ!!」

頬を膨らませ、そっぽを向く。 ロイはやれやれと肩をすくめた。

「わるかったよ・・・」

エリナがチラッとこちらを見た。

「スタンフィーナさん!!」

今度もチョップが来るだろうと心構えをしていたが、

いローキックが右脚を直撃して、膝がガクッと崩れた。

「いや、冗談だ・・・・・エリナ」

鬼だこの人。冗談が通じない。そんなロイの気持ちをよそに、 エリ

ナはニッコリと微笑み、腰に手を当てると、

「それでいいのよ」

と言った。

ものの、 じだった。 も自分の水筒 それから30分ほど経っただろうか。 しいと言うには太陽の力は強すぎたが、 状況 の悪さを感じさせるような無表情だった。 から水を飲む。 イは袋から水筒を取り出し、少し口に含んだ。 あからさまな困惑を面に出していない 日は東に傾き始めた。 先程よりはマシ、と言う感 エリナ まだ涼

のは変わっていない。 暑さは次第に和らいでいたが、 帰り道がわからず立ち往生して

「さて、どうしたものか」

かった。 ってこないと分かってはいたが、どうにも沈黙を続ける気に離れな ロイが腰に手を当てて体を反らせながら言った。 大し た解決策は

何かない の か?」

言いながら車の後部座席を探った。

「何にもないわよ」

った。 な銃が一丁、 と呆れた声が返ってきた。 ハンドガンが2丁と弾薬、 そこにあったのは先ほど持っていた大き そして何か筒状のものがあ

ん?な んだこれ?

ロイは手に取ったものをエリナに見せた。 その筒の端には紐が付

あっ、 忘れてたっ

エリナが身を乗り出して、 たので、 かを注意深 ロイはあわてて身を引いた。 確認しながら言う。 それをロイから奪っ エリナはその筒が壊れてな た。 体が触れそうだ

信号弾よ。 れを引くと赤い煙が上がるの。 運がよけ れば 助け

嬉々とした表情でガッツポーズを決めた。

「早く気づけ!!」

ロイが叫んだ。 エリナはしょうがないでしょと言い放って車から降

ないんだから」 たの!当たり前だけど、 「結構面倒な事になるのよ。 これは特定の人だけに見えるってもんじゃ 使い勝手が悪い から記憶から消去し て

もありえる。 五分五分といったところね」 「忘れたの?あたしたちは戦争をしているのよ!?敵が来るっ ロイが怪訝な表情で首をかしげたのを見て、 エリナは言い放っ て事

うことだ。 それに太刀打ちするような戦力はエリナにはないのだろう。 信号に気づけば先ほどの機械がいくつも襲ってくるかもしれない。 ああ、と口の中で呟き、さっきの様子を思い出し て いた。 仮に そうい が

ないわよね?」 「・・・ロイ、 あなた腕はたつのよね?さっきのあれはまぐ

心配そうにエリナが尋ねた。 ロイは肩をすく

「なんならこの車でも斬って見せようか?」

ふっとエリナが笑った。

「じゃあ、いくわよ!!」

旋を描き、 は知らないが、轟音と共に赤い煙が空高く打ちあがった。 車から離れると筒を上に向けて、 雲ひとつない空にまっすぐと上がっていっ 紐を引いた。 どういう原理な た。 それは螺 のか

「へえ、すごいな」

ロイは感嘆を呟く。 エリナがゴホゴホと咳き込みながら戻ってきた。

フードの上に赤い粉がかかっている。

良かった不発じゃなくて。 になってたかしら。 リアの領地のはずだけど、 とにかく用心しておいてね。一応ここはド 不発だと今頃あたしはもっと赤い 敵が来るかもしれないから」

わかっ ったかもしれない、と不安になった。 ないけれど。 られたらどうなるかはわからない。 てる、 さっきはかっこつけてみたが、 と言って肩を回した。 単体ならどうにかなるかもしれ とは言っ たもの もしかしたらまぐれだ Ó 集団で攻め

った。しばらく思案するようにして、 エリナは車に戻ると、布を脱いで少し払ってまた被り、 んな重要なことを言うのかと気構えをした。 ロイを見た。 ロイは今度はど 運転席に 座

そういえば、 ロイの出身はどこなの?」

雑談だった。

• ・ケムトだ」

突然の質問に詰まったが、 淡々と答えた。

「ふ~ん、そう」

エリナの相槌は思い その目はとても冷ややかだった。 の外素っ気無いものだっ た。 砂漠を見渡し、 そ

ひどい人ね」

れからロイを見た。

そう冷淡に告げる。 ロイにはわけがわ からなかった。 むしろロイ 的

にはかなり親切にしているつもりだ。

しら わざわざ隠すこともないでしょう。 そんなに親しくなるのが 嫌か

ろうか。 その表情は落ち込ん ロイは焦りながら言った。 でいるふうにも見える。 なぜ嘘だとばれたのだ

ないかな、 いや、 だからケムトだって。 それくらい前に出て来たんだ」 そこで育っ Ţ まだ二週間も経って

~~ んと口を尖らせながら言う。

ケムトのどこから海に出たんでしょうね?それともあなたはお父

さんと釣りに行く夢でも見ていたのかしら?」

あっ、 とロイは声を上げた。 そして先ほど自分の 小 さい 頃 の話をし

た事を思い出 した。

目を逸らし、 申 そういうことか し訳なさげにいっ た。

それ で、 本当はどこなの かしら?」

蔑のような冷ややかなものが含まれていて、 語尾が必要以上に上がっているような印象を受けた。 たところだ」 分になる。 「ボンゴ・・ させ、 ・って言ってもわからないか。 そこまで悪いことはしていないと思うのだけれど。 ケムトを更に南にいっ 責められている様な気 そ の 口調は軽

相槌はなかった。 もしかしたらまだ疑ってい る のかもし れ

「それで、何で旅をしてるの?」

いや、それは・・・まあ、 色々あってさ」

れていた。この暗がりで信号は届くのだろうか。そして左側から冷 に西に沈みつつあった。 信号はしだいに風になびき、 目を逸らし、砂漠を見る。 たい視線を感じた。自然と背筋が伸びた。 夕暮れ、とは行かないまでも、 東の方へと流 太陽は

・。そう、あなたは嫌なのね」 ・助けてもらった恩もあるから仲良くしようと思っ てい る  $(\mathcal{D})$ 

さは恐怖すら感じるほどだ。 ちらっとエリナを見ると、冷淡な目が ロイを責めて いる。 その冷た

もう!わかったよ!!

ロイは半ばやけになり、 頭をかいた。

んでもう村には居られないだろ!?だからこうして旅をしてるわけ ボンゴは去年の夏に魔物に滅ぼされたんだよ。 !オーケー ? 俺以外全員な!そ

いる。 様子をうかがうと、 口早にそう言うと、 やや顔を赤く染め、 エリナの動きも、 冷ややかな目つきも止まった。 恥じ入るように下を向 7

Ļ とにごめんなさい」 その、 ・ごめんなさい。 無理に訊いたりして。 そんなことだとは思わ 最悪だよね、 なくて あたし・ えっ ほん

ロイはあたふたと手を振り、 言った。

ゃ そんな気にしなくていいって。 隠そうとしたのは俺の方な

んだから」

でも、とエリナは言う。

い た。 そういった顔を上げた少女の目は申し訳無さそうにロイを見上げて 少しだけドキッとした。 ・隠したかったのは、 思い 出したくなかったからでしょ

「いや、 勿論ジエルトンのことは伏せておく。 エリナは顔を上げると、 何度も疑わ んて誰も知らないだろ?ケムトでも『いやそんな村ないだろ』 そうじゃなくて・・・まあそれもな れたんだ。だから言っても意味ないかと思ってさ」 < はな いけどボンゴな って め

思い出して苦しくなっても、誰かに負い目を感じさせても失われ ものは帰ってこない。 より、 一方的に謝られるのは、 ならば、エリナに負い目を与えたくなかっ 気持ちのい いものでもない。 た

んねと呟

にた

ロイは微笑み首を振った。

## ブロロロロロ

その時、 でも近くのように音が聞こえてくるのは強い の車が近づいてくるのが見えた。 かなり距離が離れているが、それ してそちらを見ると、太陽の沈むのと反対方向から砂煙と共に一台 エリナ、 鳴り響くエンジン音がロイの耳に飛び込んできた。 どっちだ?」 向かい風が原因だろう。 ハッと

ないと答えた。 ロイは神妙な面持ちでエリナに訊ねた。 車を降りると剣を抜いた。 エリナは首を振り、 わか 5

聞こえず、 い全神経を目に集中させていた。 ロイの二つの細めた目がその車に注がれる。 (どうやら複数じゃない 舞う砂が皮膚に当たっ らしい。だったら先制すれば何とかなる) ても何も感じなかっ もはや耳には風の音は た。 それ

・・・・・・・・エリナ」

警戒を少し 解き、 前を見すえたまま話しかけ た。 何?と返事が聞こ

「この車は軍用車か?」

「そうだけど・・・」

うだった。 と後ろで声がする。 その声は質問の糸がつかめず、 困惑してい

ア軍な のか?」 ・これと同じ感じの車で、 色は黒い。 軍用車なら、 ドー IJ

部座席をあさり、ようやく双眼鏡を取り出した。 えない。実際、 あるという事しかわからない。それほどに距離があった。 後ろで驚く声が聞こえた。 ロイに言われるまで気づくこともできなかった。 エリナには砂埃をあげる点は機械の塊 音も聞こ

っている人間は分からないが、間違いなくドートリア軍の車だ。 っ込みを無視して覗き込むと、 一度集中を切らしたロイの「いや、さっさと取り出せよ」という突 狭い視野の中に車が映っている。

間違いないわ。ドートリアのものよ」

ロイはこちらを向かずに頷いた。 いや、そう見えただけかもし 今だ警戒を解かず、前を見すえている。 な

ロイ!もう大丈夫だってば!助けが来たのよ!」

わかってる、とロイは短く言った。 いていないのだろうか、微動だにしなかった。 しかし、エリナ の声は脳まで届

れている。 ・・・この見晴らしのよい場所でできるだまし討ちの方法は限ら あれが敵ではないと言う確証はない」

る以上に実戦経験がある、 なるほど、 ロイは車から視線を逸らさない。今あの車からどんな攻撃をされ とエリナは呟いた。どうやらこの少年、 とエリナはロイを見ながら思った。 自分が考え て L١ 7

にやられる。そういった意味では危なくもあった。 も応対できるだろう。しかし、もし、 エリナが奇襲をかけたら確実

会ったばかりの人間など簡単に信用してい エリナは考える。 人でさえもスパイと疑い、 の全ての動作を疑い、 きっとロイは戦争を経験したことがないのだ。 証明する手順が必ず必要になる。 気を払っていた いものではない。 先ほど

分。 エリナはぼんやりとそう考えた。 方に捧げている。 それなのにロイは完全にこちらに背を向け、 この少年は人に騙されたことがないのだろうか。 全ての集中力を遠

「大丈夫だと思うけどね・・・」

ない。 ン音が聞こえるまでに近づいている。 エリナはそう言いながら双眼鏡を覗き込んだ。 運転手が確認できるかもしれ 今やその車はエンジ

・お兄ちゃん!?」

鏡から目を離 ていたのは間違いなくエリナの兄であった。 ロイが改めてエリナの方を見た。エリナはもう一度確認する。 した。 ほっと息をつき、 双眼 乗っ

空を見上げ、 に座った。手を後ろで組み、 そうか、とロイは呟き、剣を納めた。 「大丈夫よ、 やれやれ・ ロイ。あたしの兄だわ」 隣りのエリナに聞こえないように呟いた。 ・危なかった」 後ろにもたれかかる。 どこまでも青い つかつかと車に戻り、

助手席

知らない少年の姿があった。 は笑顔で手を振る妹の姿、 マリア= スタンフィー ナが妹のもとにたどり着いた時、 そして助手席には憮然として座っている 運転席に

えな ロマリアは大きく溜息をついた。 ごめんね、お兄ちゃん。 いのだろうか。 帰れなくなっちゃ どうして自分の妹は後先を全く考 って •

てやる」 まあ、 無事で何よりだ。 戻ったらみっちりと小言を聞かせ

エリナは唇を尖らせた。 と胸をなでおろした。 怪我などもなく、 無事な様子にロマリアほ

罠かと疑ったが、 車もな ほど、砂漠を縦横無尽に探し続け、赤い信号が上がっ ことだった。 ロマリアのところにエリナがいないと言う知らせが来た いと聞かされたときは、 奔放な性格なので大して気にも留めていなかったが、 実際に来てみて正解だったようだ。 正直背筋が凍った。それから3時間 た時は流石に のは昼前  $(\mathcal{D})$ 

だろうか。 たのかという思いと、 それを聞い 少年は表情を動かさずにこちらを見ていた。 ああ、 まあ、 , , ロイはあたしが襲われていたところを助けてくれ 茶色い髪に白い肌。 てロマリアは愕然とした。そんな危険なことになってい ・・それで、後ろの少年は誰だ?」 それを嬉々として語る妹に対する失望だろう 腰に提げている長剣が印象的だった。 年のころは たのよ」 5 , 6 歳

のよう エリナは車を降りて、 な機械 があった。 機械に被さってい る砂を払っ た。 そこには鳥

・・・M・492F!!ほんとうか!?」

で壊せる代物ではない。 エリナは無言で首肯した。 い事実だった。 大砲やらの大型武器があるならいざ知れず、 だが、 ロマリアにはあまりにも信じがた 剣一本

ほんとに・・ ・人間か?

疑いをかけた視線はロイと交わり、 深い。 まるですべてを飲み込む闇のようだった。 すぐにそらした。 少年の目は暗

はずもない。 その場所からドートリアまでは一時間とかからなかっ Ļ ロマリアが言って、 エリナは居心地悪げに頬をか た。 普通迷う

「誰にだって失敗はあるわよ!!」

当たり前、あまりにも鋭いハンドルさばきに何度も横転を覚悟した。 砂漠なのだからまっすぐ走ればいいはずだ。 とは彼女の言。 何度も言いかけたが、 いと心に誓っていた。 しかし、ロイは二度とエリナの運転する車に乗らな 真剣そのものの表情を見て諦めた。 国に来るまでも、急ブレーキ、急アクセルは 運転を変わろうか?と

そして、 現 在、 ドートリアの城門にいる。

でかいな」

た。 るූ 開口一番、 るのだが、 かった。オアシスの恩恵の上に建ち、強烈な威圧感で聳え立ってい オアシスを覆うようにして造られた城壁は確かに砂漠の中にあ 冷たい深海のように一切の侵入を拒んでいるように見え ロイはそう呟いた。 それは国と言うよりも塔や要塞に近

じたケムトの街の壁よりもずっと高い。 建造物を一目見るだけでその国の技術力の高さを窺い くケムトよりも進んでい るだろう。 事実、 その高さに違和感すら感 知れ た。 恐ら

に 低い城壁では意味がない。 考えてみればそうれは当然のことだ。 更に、 見晴らし のよい 空を跳ぶ敵と戦うの 砂漠と相成っ

絶好の展望台にもなりえる。

がそれに見とれている間も、 二台の車は城壁に沿って走り続け

ていた。

「なあ、まだか?」

精神も肉体も疲弊しきっていた。 ロイが訊ねた。その声は低い。 度重なる運転の無茶ぶりに、

· · · · · · .

決まっている。 の質問に答える意味はない。未だに入れていないという事はまだに エリナは答えない。 必死に兄の車の後ろを追っていた。 確かに、 そ

た。 方が疲れないだろう。 砂埃が上がって、前の車が止まった。 - キを踏む。勿論それは急ブレーキで、ロイの体は前のめりになっ 既に慣性に抗えるだけの気力も体力もなかった。 それにあわせてエリナもブレ 確実に歩いた

ロープになった。 ロマリアが立ち上がって赤と白の二つの旗を取り出し、 いた。しばらくすると、城壁の2、3階に相当する部分が開き、 インを出した。 エリナは黙ってそれを見ている。 二台の車はそれを登り、 中へと入った。 ロイも同様にして 何 らかの サ

「へえ、考えてるんだな」

ロイが感嘆の声をあげると、 隣でエリナが言った。

ない 戦争中だからね。 わけにもいかない。 城壁に穴を開けるわけには行かな それで戦争が始まった2年前に改築された L١ 外に出

車は並んで停まった。 ロイがへえと声を上げる。 エリナがニッコリとロイに微笑みかけた。 車は車庫のようなところに入り、

ドートリアへようこそ!!」

たのだろうが、ゴンと言う鈍い音がロイの耳にも飛び込んできた。 にこりと笑った少女の後頭部に拳骨が降っ 「いった~~い!!何すんのよ!?」 た。 それなりに手加減

そこには鬼のような顔をした軍人が仁王立ちをして ったその表情も、 エリナは頭を押さえながら振り返った。 兄の顔を見るとしだいにおびえに変わってっ しかし、 はじめは反抗的だ いた。 た。

じゃな 「さあ、 いか エリナ。 言いたい事があるんだろう?存分に聴いてやろう

・・・・・・あは」

う する。 降ろし、 鬼ののような表情の兄にエリナは愛想笑いを投げかけた。 っているらしい。ロイはその様子がおかしくて、口元が緩んでしま マリアの額に怒りマークが浮かぶ。 軽い冗談も受け流せないほど怒 しかし、 襟を掴んだ。 ロマリアはそんなことを気にせずに、エリナを車から そのままずるずると後ろ向きに引きずろうと 瞬時に 

な 思い出したようにロマリアの足がピタッと止まった。 それもそうだ 「ちょっと待ってよお兄ちゃん。 と小さく呟いた。 左腕の時計を外し、 ロイはどうするの?」 ロイに渡 した。

かせる。 好だが、 色の文字で、 なるほど、 3階に上がってしばらく国を見て回っていてくれ。 うろちょろしなければ大丈夫だ。 不審がられたらその時計を見せろ」 とロイは手の中の時計を眺めた。 7 ロマリア= スタンフィーナ』 話が終わったら迎えに行 と彫られている。 その黒い時計版には 見慣れな

それと、 地下は軍事施設で立ち入り禁止だ。 あと1 0 階以

時計ひとつ見ても、

こ

の国の技術力の高さがうかがえる代物だ。

左

につけると、

わずかに光を反射

した。 た。

式な入国手続きは後でしよう」 上は居住区だから、 行かないほうがいい。 不審がられるからな。 正

口を開いた。 わかった、 とロイが歯切れよく返した。 ロマリアは少し考えた後、

・・・妹を助けてくれて、ありがとう」

「じゃあね、ロイ。また後で」

と笑った。 るずるとエリナを引きずってゆく。 エリナがブンブンと手を振った。 二人の姿が見えなくなると、 ロマリアはそれを意に関せず、 ロイは腰に手を当て、 駐車場を出た。 鼻でふっ

-座れ」

た。 は反抗をせずにそれに従う。その小さな部屋には椅子が二つ、向か 部屋に入るなり、ロマリアはエリナに向かって言い放った。 い合うようにして置いてあり、 ロマリアはエリナの向かいに腰掛け エリナ

「さて、何か弁解はあるのか?」

前かがみになって、 更にロマリアを苛立たせていた。 の表情は多少悪びれてはいるものの、 膝に肘を当て、 目の前で指を交差する。 深刻な感じではない。 それが エリナ

ことの重大さに気が付いた。 にこりとも笑わない兄の表情を見て、 ロマリアは自分の額に皺がよるのを感じていた。 いいじゃない!結局なんともなかったんだから」 エリナはようやく自分のした いつもと全く違う、

エリナは背中を丸めて俯いていた。 報は確実な優勢をカルタゴラに約束する。 んな尋問、 人近い国民すべてが危険に晒されるところだったんだぞ!」 いいか、 なければ確実にやられていただろう。 エリナ。 拷問を使ってもお前から情報を吐かせていたぞ。 その情 あのまま捕虜になってい 確かに短慮だったと思う。 お前の判断ひとつで1万 たら、 カルタゴラはど ロイ

でもあたしはっ、 あたしはみ んなの力になり たかっ たの

たかった までもお荷 の 物 みた 61 に扱われるのは嫌なの み んなに認めてもらい

り前 成績を残 れたものだ。 それを聞 のことだ。 してはいない。 ίÌ てロマリアは目を閉じた。 かく言うロマリアも始めは何度も上官に檄を飛ばさ しかし、 それは一年目の軍人としては当た 確かに妹は軍の演習でも

げた。 顔を上げるとエリナの目が潤んでいた。 ロマリアは優し しし 口調で告

試験をパスしただけでも十分力量はある」 で行動することが必要なんだ。 「始めは みんなそんなものさ。 焦って無理する必要はない。 だからこそ始めは上官の指示を仰 それに しし

5 ぞって国を守ろうと応募する。その毎年200人近い応募者の中か けでも十分に評価はなされているのだが・ エリナは女性軍人として実に5年ぶりの入隊となっていた。 少ない上に試験内容は男女平等で、それ故に女性の軍人は少ない。 トリアの軍入隊試験は厳しい。 選ばれるのは20人ほどだ。 女性の場合はただでさえ応募者が しかし、 • 愛国心 の強い国民は

「それでもあたしは早くお兄ちゃんたちの力になりたい

エリナは顔を上げ、ロマリアを見すえた。

たのが俺じゃなかったら間違いなく軍事裁判ものだ 一歩間違えば軍籍を剥奪されていたかも知れな ・・それで、一人で行った、か。 だが、 エリナ。 いんだぞ。 お前 もし の行動 行っ は

その言葉にエリナはびくっと肩を震わせ、 俯いた。

ラは戦力増強し なっちゃ わかっ うなんて! てる て いるのよ。 わよ。 けど、この2ヶ月 あたしは嫌よ。 この国が、 の沈黙期間にカ み ルタゴ な

ああ、わかっているさ。

兄とし ロマリ アは言わなければならない。 上官として 61

だからと言っ てお前が犠牲になるのか?それに何の意味がある。

お前 一人の犠牲でみんなが助かると言うのか!?」

・それはっ!」

二人の視線は微動だにせず、 お互いを見据えて いた。 ふと、

アは目を細め てエリナを見、 口を開いた。

「頼むから・ ・・頼むからお前は生きてくれ」

のは、 浮かんだ。 歳のそのときから軍に入り、 は別の国との戦争で死んだ。 エリナの胸がズキンと痛む。 ロマリアは兄であると同時に父親でもある。 たった一枚の写真だけ。 といってももうほとんど覚えていない。 エリナの脳に今は亡き両親 自分を育ててくれた。 あれからもう11年。 エリナが6歳のときにカルタゴらと 手元に残された ロマリアは16 エリナにとって、 の顔が思 ١١

俺はもう、家族を失いたくはない」

っ た。 胸を締め付ける痛みのせいでロマリアの目を直視する事が出来なか

・ごめん、 なさい

うつむいたエリナの頭に手が置かれる。 しく撫でてくれた。 その大きな手は、 続い て優

お前が無事で良かった、 本当に」

その声は優しく、 いつも自分の身を案じてくれる兄の声だった。

お兄ちゃん」

エリナは顔を上げた。 ロマリアは優しく笑いかけて 61

ごめんなさい。 あと、 探してくれてありがとう」

当たり前だ。家族だからな

ロマリアは微笑みながらゆっくりと頷

これは凄いな

地面は芝で、 階 リアのようなところがあり、 の 中央、 子ども達が元気に走り回っている。 庭のような広い場所に出て、 若い母親だろうか、 ロイは驚嘆の声を上げた。 隅のほうにはカフ 笑いながら語

り合って もない ロイは例によっ いた。 しかし、 て例のごとく不審者の様な格好をしているので無理 時折不審そうな視線がロイに刺さる。 まあ、

を付 塔の周りの窓は全て硝子張りで、 いい加減腹も減ってきたなと思い周囲を見渡すと、 にた 欲望につられて足が勝手に動き出した。 西日を受け、 芝を赤く い い匂いが鼻腔 染めてい る

「おっ、兄ちゃん。食ってくかい?」

カウンターで何かを作っているのは体格のい い四十路くらいの男だ

「これはなんだ?」

看板には" い名前だ。 イェー ガサンド" と書かれていた。 全く聴いたこともな

ことだ。 ああ、 それをパンで挟んで、豪快にかぶりつくんだ」 イェ ーガっ てのはここら辺りに生息し ているオ オトカゲの

トカゲ、 ることは出来ない。 と聞いて少し引いたが、それでも悲鳴をあげる腹を見捨て

「1つくれ」

ロイは言ったが、男は怪訝な顔をして訊ねた。

「金はあるかい?1つ50ピ・クルだよ」

少し考え、 確かに今のロイの格好は文無しの浮浪者に見えなくもな 袋の底の方にある、 小さな袋を取り出した。 ιį ロイは

「これでいいか?」

気にそれを受け取ると、 グリンにもらった銀粒を1つ取り出し男に差し出した。 目を丸くした。 男は疑わ

「これっ!お前、 こんな高価なもの受け取れねえよ!」

「・・・・・?」

グリンが少しの躊躇もなくくれたものだっ ンさんに感謝だな、 と思っていたが、 人だと思った。 どうやら相当の値打ちものらしい。 とロイは考えつつ、 ケムトの悪徳商人なら何も言わずに懐に入 目の前 たので大した価値は の男は かな また1つグリ り正直で れる ない

だろう。

持っているみたいだが、 変えてくるといい。もうじき閉まっちまうから急げよ。 「この階のちょうど反対側くらいに換金所があるから、 換えるなら一つだけにしとけよ」 ピー それとまだ ・クルに

「作って待っててやるからな」

ロイはわかったと頷き、

礼を言った。

ても、 ロイは袋の口を縛ると、肩に担いだ。 この階層は相当広い。 逸る腹をさっさとなだめようと、 分厚い塔の外壁分を差し引い

は駆け出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 ・ンター そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n9454y/

**Disturbed Hearts** 

2011年12月13日11時04分発行